
バカとテストと召喚獣 ～バカと未来と過去とFクラス～

水夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～バカと未来と過去とFクラス～

【Nコード】

N5875X

【作者名】

水夢

【あらすじ】

主人公（らしき人物）、西崎瑠美は文月学園内で学力1位の实力をもつ人物。そして、昔から瑠美と仲がよかった吉井明久、姫路瑞希、渡辺直貴。

特に直貴は瑠美に続いて、学力2位の实力をもつ。

しかし、この二人。自分達も知らない過去をもつ人物でもあった。仲のよい四人組はFクラスでどんな生活をおくっていくのか？

プロローグ（前書き）

はじめまして♪

バカテスの小説を書くのは始めてで戸惑うこともありますが、頑張
って執筆したいと思っています

プロローグ

文月学園

科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校

進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い

学園にまで続く坂道の両脇には新入生を迎えるための美しい桜が咲き誇っている

そんな坂道を、鼻歌を歌いながら歩いていく少女が一人いた。

Side 瑠美

「~~~~~♪」

今年も桜がきれいだな♪

ここに入学してから二度目の春がきたんだな

今年も楽しい学園生活がくれるといいな

そう思いながら、私、西崎瑠美は校門までスキップをしていた。

校門に到着すると、筋肉隆々とした体格のいい教師が立っていた。えっと確かあの人は・・・

「鉄人先生。おはようございます♪」

「西崎・・・だよな？ ついにお前もそんなことを言うようになったか・・・」

「冗談です。西村先生、おはようございます」

「お前のは冗談に聞こえないんだが・・・、まあいい。ほら、受け取れ」

そう言つて、てつじ——西村先生は私に茶色い封筒を渡した。
お？クラス分けの結果かな？

「それにしても西崎、残念だったな。あの時ちゃんとテストを受けていればAクラスだったんだがな」

「いや、しょうがないですよ。ちゃんと自分の体調管理をしてなかったですもん。責任は自分にありますから」

「そうか」

「それに、来年もありますから その時にがんばりますよ」

「なるほど。お前らしい考えだな。先生も応援するぞ」

「ありがとうございます」てつじ——西村先生」

「・・・西崎。いくらなんでも成績を下がらせるんじゃないぞ・・・」

「分かってますよ」それぐらいは！」

そう言つて鉄人の言葉を頭の中に入れておき、校舎の中へと入つていった。

向かうクラスは・・・・・・

西崎 瑠美

『Fクラス』

Fクラス！！！！

五分後

S i d e 明久

やばい！！

新学期早々遅刻だ！！

そして急いで足を早くする僕。

校門近くになると、

「遅いぞ吉井、渡辺！！」

ドスのきいた声で、鉄人が遅刻してきた二人の名前を呼んだ。
ん？二人？

横をみると、あのテイ。ズオ。グレ。セスの主人公、ア。ベルに
た少年が僕と同じく息切れをしていた。

髪の色は焦げ茶色で、目の色は紫。

「明らかにア。ベルの色違いバージョンの少年だ。」

「おい、明久。声にでてるぞ」

「やあ。おはよう直貴。君も遅刻？」

「今、明らかにスルーをしたよな！？」

「え？なんのこと？僕にはなんにも分からないよ」

「嘘付け！！」

「ええい。黙らんかきさまら！！」

鉄人の怒鳴り声で、僕たちの言い合いは終了した。

「全く貴様らは……………、言い合いの前に俺に言うことがある
だろ」

「あ、そうでしたね。おはようございます鉄人」

「おはよう西村」

「貴様らは遅刻の謝罪よりあいさつが大事、しかも教師の名前もろくに言えないとは何事だ！……」

「おいおい、鉄人。俺はちゃんと西村っていったぜ」

いや、今鉄人っていったから。

「西村先生だ！……吉井は別名、渡辺は呼び捨てで呼んだら……！……はあ……、貴様らに言っても無駄だな……。ほら、クラスわけの結果だ」

そう言つて、鉄人は僕たちに茶色い封筒を渡した。

「あ、どーもです」

「サンキュー」

「しかし、渡辺は居眠りさえしなければAクラスだったんだが……」

「しょうがねえじゃん。前日緊張して眠れなくてつい寝ちゃったんだからよ」

それ、遠足に行くのが楽しみでなかなか眠れない小学生じゃん。

「明久。今お前、俺のこと遠足に行くのが楽しみでなかなか眠れない小学生だと思わなかったか？」

「気のせいじゃないかな？」

ちっ……！

まさか心をよみとられるとは。油断した……！！

「ていうか俺、途中一回だけ起きたぜ」

「ああ。確か西崎さんが倒れたときだったっけ？」

「そうそう。それそれ……………って、なんでお前知ってんだよ」
「だって、保健室で会ったじゃん」

「……………そうだったか……………」

「話はもういいからさっさと自分のクラスを確認しろ」

「はい」

ん？

くっ、なかなかあけられない。

おもいつきのりがくつついている。

よし、気合いであけよう。

「そついえば吉井。今だから言うがな」

「ん？なんですか」

僕は封筒と戦いながら鉄人の話をきく。

「俺は去年お前を一年見て、もしかしたら吉井は『バカなんじゃないか』と疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんなことを言っているようじゃ、そのうち『節穴』という徒名がつきますよ」

僕はバカではない。

だって、振り分け試験はちゃんとできたもん。

「明久。現実を見る」

「何をいつているのさ直貴。僕は正気だよ？」

「はあ……………、お前というやつは……………」
「そついう、直貴はどこのクラスなんだよ」

こいつ。

僕が苦戦してるなか、楽そうに封筒を開けていやがった。

「あ？俺？ほら」

渡辺 直貴

『Fクラス』

「俺は居眠りしてたからな。全然、問題を解いていなかったからな」

……………なんか、ム力つくのはなぜだろう……………。

「まあ、とにかくだ。すまなかったな吉井お前を疑ってしまつて」
「分かればいいんですよ」

さすがに気合いでは開けられないか……………、じゃあ破くか。
そしてやつとのこと封筒を開けられた。
中に入っている紙を取りだし広げる。
書いてあったことは、

吉井 明久

『Fクラス』

「お前は疑いの余地もない、正真正銘の馬鹿だ！」

なんですと——！！！！

「そんな、意外にイケたと思つたのに……………」

「まあまあ明久。お前にしてはよくやった（笑）」

「直貴。絶対心の中で馬鹿にしているだろ!!」

「なんのことだ明久。俺は同情してあげただけだ」

「嘘だ!!!!」

「さて、クラスも分かったことだしとつと行くぞ明久」

「さりげなくスルーされたし!!しかも、何事もなかったように歩き始めたし!!ちょ、待ってよ直貴!!!!」

そして僕達二人は校舎の中に入っていった。

はあ……………。

そうだとしてみかなり悔しい。

CかDクラスに入れたと思ったのに……………。

「残念だが明久。いくらFクラスに入んなくても、C、Dクラスには入れなかったと思うぞ」

「なぜ!!!!!!ていうか、なんで人の考えてることが分かるの!?!」

「お前の頭の悪さから、せいぜいE、Fクラスが限界だ」

「はつきり言われたああああ!!!!!!」

「お。ここがAクラスか」

「え?」

直貴の方を見ると、もはやホテルというしかない豪華な教室があった。

「すごい…………、ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクライニングシート。うらやましい……………」

「俺はなんとなく嫌だな……」

「なんで？」

「機械音痴だからだ」

「なつとくだよ……………」

「ということで、ここにいるとイライラしてくるから行くぞ」

「え？ちよつ、まっ……！！！！」

僕の言葉を聞かないで、直貴は僕を引きずっていった……………。

そして、B、C、Dクラスを通りすぎてEクラスを通りすぎようとすると、目の前に、茶髪でお団子ヘア（しかし、後ろ髪を残しているしかも長め）の少女がいた。

あれは……………、

「おい！！西崎さん！！」

僕の声に反応して少女は振り返った。

「あ！明久に直貴！！！！」

そして、笑顔でこっちにきた。

「おはよう二人とも」

「おはよう、西崎さん」

「よう。瑠美。体調はもう大丈夫なのか？」

「うん！！大丈夫！！あの時はありがとう！直貴」

そして、西崎さんは直貴に超かわいいスマイルを見せた。

「お、おう。気にするな……………（／／／／／／）」

「明久。今の発言、変態がいうセリフにそっくりだったぞ」

「失礼な!!!」

「ところで瑠美。Fクラスで大丈夫なのか？」

「うん♪なんか楽しそうだし♪それに………」

そして、瑠美は僕のそばまでよってきた。

すると、僕の耳に爆弾発言をした。

「直貴もいるから嬉しいしね♪（／／／／）」

こんな爆弾発言をしてから、瑠美は僕と目を合わせた。

爆弾発言をしたため、顔が赤い。

そんな瑠美に、僕はこんなことをいってあげた。

「応援してるよ。瑠美！」

「うん♪ありがとう明久♪」

「？」

二人で何を喋っていたのか、直貴は気になっていたのか頭に？マークを浮かべている。

「よし!!!じゃあ行こっか!!!」

「うん!!!レッツゴー!!!」

「あ、おい待てよ!!!」

いよいよ、僕達の高校二年生の生活が始まるんだ!!!!!!

プロローグ（後書き）

次回はオリキャラ紹介を行います

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ紹介です

はっきり言って主人公が決まっています（泣）

オリキャラ紹介

西崎 瑠美 （にしざきるみ）

身長 160？

体重 瑠美に殴られたため不明

胸はFカップ

見た目 茶髪でお団子をしている。しかし後ろ髪を残しているしかも長め。

目の色はオレンジ色

趣味 体を動かす 音楽を聞く 料理

得意科目 数学 化学 古典 家庭

苦手科目 日本史 物理 国語

特技 水泳 空手 料理

詳細 明るい性格で、元気いっぱい少女
もちろんクラスの人気者

（学年の中で一番もてる）

試験中、途中退席したためFクラスになった。

美人だが意外にも空手が得意らしく、その実力は全国1位の實力。
そのため彼女を怒らせると痛い目にあう。

それでもなぜかもてる。明久、直貴、瑞希とは昔から知り合いで仲
良し。

直貴のことが好きだが、なかなか想いが伝わらない。

友達のことを馬鹿にされるのが嫌い。

特に明久、直貴、瑞希の悪口をいうやつには容赦しない。

恥ずかしがりやな性格でもあり、ちょっぴり泣き虫なところと、怖
がりなところがあるのでそこがもてるのかもしれない

得意科目の数学、化学、古典、家庭ではAクラス以上の実力だが、苦手科目のなかでも特に苦手な物理は10点。

召喚獣は、チャイナ服を短くした感じの服に雄二の召喚獣と同じく拳で戦う。

（拳の装備はゴールドアームズという物）

もちろん腕輪も持っているし、召喚獣にも特殊な効果がある。

腕輪 色はクリア

効果は『共鳴』シンクロ

相手の召喚獣の動き、次にする行動が分かるようになる。それに追加して、自分が言った攻撃名の攻撃をしてくれる。必殺技も可。

しかし、この時、召喚獣と一体化しているようになるので、召喚獣が受けたダメージは自分にもくる。（つまり観察処分者になる）消費点数は100点

召喚獣の特殊効果

発動キーワード

『スタイルチェンジ』

教科が変わった時に使える効果

使った時は、その教科の点数が倍になる。

ちなみに姿も変わる。

渡辺 わたなべなおき
直貴

身長 168?

体重 54？

見た目 テイルズオブグレイセスのアスベル

髪の色は焦げ茶色

目の色は紫

趣味 運動 寝る

特技 剣道 陸上

得意科目 国語 物理 化学 保健体育

苦手科目 数学 英語 家庭

詳細 強そうな体格だが、根は優しいやつ。

試験中、いねむりをしていたためFクラスになった。（しかもその理由が、前日に緊張しすぎて眠れなかったという、小学生なみの理由）

しかし、一回だけ起きている。

剣道が得意で、竹刀がなくても枝や定規などあればそこら辺の不良を一発で倒せるほどの実力

しかし機械音痴である

明久、瑞希、瑠美とは昔から知り合いで仲良し。この頃瑠美のことが気になって、なかなか顔を合わせられない
果たして瑠美の想いが伝わる時はくるのか？

雄二、明久と鉄人から逃げるのが得意（ていうか、最早達人級）

努力をしない人物が嫌い

後、瑠美を泣かせたらマジでキレル（後ろに魔王が登場するような感じ）

得意科目は全てAクラス以上

しかし、苦手科目のなかでも特に苦手な英語は10点

召喚獣は、見た目がアスベルにっているせいか、召喚獣自身もアスベルと同じ姿

もちろん、武器は剣

腕輪 色は金色

効果は『オーバーリミッツ』

相手の召喚獣の動きをとめ、一回だけ必殺技を決めることができる。
消費点数は200点

この状態の時は自分の召喚獣は光っている。なお、瑠美の召喚獣がいるときに発動すると合体攻撃ができる。

金沢 豊 （かねざわゆたか）

身長 170?

体重 58?

見た目 ボカロの鏡音レンのような髪型

色は茶髪

目の色は赤

趣味 音楽を聞く

特技 喧嘩 運動

得意科目 保健体育 数学 化学

苦手科目 国語 古典 日本史

詳細 美波と同じくドイツからきた帰国子女。
そのため、美波とは知り合いである。

正義感が強く、困ってる人はほっとけない性格
逆に友達を馬鹿にするやつには制裁をする
振り分け試験を受けていないためFクラス

美波とそこで再会している。

明久達とは美波の紹介で仲良くなる。

鉄人からはたまに追いかけるので、その時は雄二達と素晴らしいコンビネーションを見せる。

得意科目はAクラス以上の実力

苦手科目でも、せいぜいDクラスなみ

召喚獣はガンマン

武器は二丁の銃。(装備は知っている人は知っている、マイソロ3のレイディアントの装備)

簡単に言えば、マントにサングラスにズボンに袖無しのTシャツ

腕輪 色はオレンジ

効果は『ラストバトル最終決闘』

自分の召喚獣が、戦死する直前に発動できる。

その時の点数を倍にしそのまま、その点数でやり直すことができる。
消費点数 時間がたっていくことに50点引かれていく

この小説のオリキャラ達は、勝つ直前に必殺技の名前を言います
そこら辺は気にしないでください

オリキャラ紹介（後書き）

どうでしたか？

腕輪の能力がめちゃくちゃですみませんでしたm（
—（m

もし、問題があればいつてください

では

第一話 暴言と紹介と登場（前書き）

バカテストは次回から行います

第一話 暴言と紹介と登場

Side 瑠美

わ……………。

これはひどいね。

現在、私と明久と直貴はFクラスの前で固まっています。

何故かって？

あまりにもボロいからだよ……………。

「これは意外だな……………」

「まさか、こんなに酷かったなんて……………」

「まあまあ明久、直貴。きっと教室の中では温かく迎えてくれるよ」

「だといいんだがな……………」

「もう、直貴ったら。それじゃあ私から入るよ」

そう言つて、私は教室に入ってしまった。

「すみません。おそくなり…」「早く座れ。このウジ虫野郎……………
なっ！？」えっ！？」

入った瞬間、温かく迎えてくれる言葉ではなく暴言をはかれた。

「うつ……………うつ……………（泣）」

「す、すまん！……てつきり明久かと……………」「美女を泣かせるとはいい度胸だあああああ！！！！」なっ！？ギヤアアアアアアア
！！！！！！」

私が泣いた瞬間、教壇の上にたっていた赤い髪でトゲトゲの髪型の男子は、黒いフードを被った人物達に襲われた。

「すみませーん。おそくなり……………つて、瑠美どうしたの!？」

「うえ……………あ、明久……………グスツ（泣）」

「ど、どうしたの!？なんで泣いて……………「どうした?明久……………つて、瑠美!？なんで泣いてるんだ!?!？」あ、それ僕のセリフ……………」

「うつ……………直貴、明久……………私つてウジ虫野郎なの……………?（泣）」
「そんなことないよ!!瑠美は超美少女だよ!!!!」

「おい……………瑠美……………、それ誰に言われたんだ?」

「あの人……………」

そして、私は赤い髪の人をさした。

「よし、分かった。明久。瑠美を頼む」

「了解」

「ルミヲナカセタヤツコロス……………」

「お!……………そこにいるのは、直貴と明久か!？助けてくれ……………つて、直貴!？なぜ、背後から魔王がでて来てるんだ!？」

「ルミヲナカセタヤツコロス……………コロス……………コロス!……………」

「ちょ、ちよつと待て!……………これにはわけが……………「シネエエエエエ……………!……………!」ギヤアアアアア……………!……………!」

「?ねえ、明久。なんで目隠しするの?」

「知らない方がいいよ瑠美。ていいうか見ちゃダメだ」
「????」

明久の言っている言葉が、よく分からなかった。

Side 明久

あの後。直貴の魔王化は消えず、誰も止められなくて焦ったけど、先生がきて騒ぎはなくなった。

ちなみに直貴達にボコボコにされた雄二は、現在気絶中である。現在僕は自分の席に座っている。窓側で一番後ろの席が僕。その前が直貴。そのとなりが瑠美だ。

「おい雄二。生きてる？」

「ああ……………なんとか……………」

「ルミヲナカセタカラダ……………」

「だから、あれには理由があるんだよ！！」

「あ、そうなの？」

あ、直貴の魔王化がおさまった。

「俺が間違っ、明久が入ってきたと勘違いして言っちゃったんだよ！！」

「なるほど。本来なら明久が言われるはずだったのか」

「ああ、そうだ」

「貴様あああああ！！！！」

僕はウジ虫野郎なんかじゃない！！！！

「それにしても、ここの教室はひどいな……………」

「そう？ちゃぶ台ってなんか和風じゃない？」

「いや、ちゃぶ台の事じゃない。この教室全体のことだ」

「そういえば、なんで雄二は教壇に立っていたの？」

「ああ。俺がこのクラスでトップだったから、先生がくるまで立っていたんだ」

「じゃあ、貴方が代表なんだね！！」

「お、おお。坂本雄二だ。よろしくな」

まあそりゃ慌てるよね。

瑠美の目は少女漫画に出てくるような目だから。

それに、噂では学年で一番の美女とか言われてるからね。

「えー、その四人。静かにしてください。ホームルームを始めます」

なんて四人で喋っていると、先生に注意された。

「皆さん。各自座布団とちゃぶ台はありますか？」

『先生ー。座布団に綿が入っていないんですけどー』

「我慢してください」

『先生ー。すきま風が寒いんですけどー』

「我慢してください」

『先生ー。ちゃぶ台の足が折れたんですけどー』

「それなら、このボンドを使って直してください」

.....

流石、最低クラス。

「それでは、自己紹介でもしますかね。えー、では、廊下側の人からお願いします」

すると、廊下側の席の一人が立ち上がった。
あれは……

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

やっぱり!!

瑠美の次に美少女という美少女の秀吉だ!!

ああやって、男の制服を着ているけど実は女の子なんだ!!

「おい!!! 明久!!! なんで女子が男子の制服を着てるんだよ!!」

ほら!!! 直貴も、目を疑わせてるよ!!!

「お主!!! ワシは男じゃぞ!」

『秀・吉!!! i love you!!!』

「だから、ワシは男じゃあああああ!!!」

クラスのみんなが秀吉にラブコールをおくっているなか、秀吉は必死に叫んでいた。

「可愛い♪ お人形にしたいくらい♪」

『なに!?!』

瑠美の一言にクラス全員が固まった。

「と、とにかくわしは男じゃ!!!」

と言いながら秀吉は座った。

「……土屋康太……」

この静かな声はムツツリーニ……！
相変わらず無口だな

「……趣味はとうさ……何でもない……」

そして、性格も相変わらずだな。

「……………です。よろしく」

どんどん、紹介が終わっていく。
次に立った人は女子だ。

あの人も見たことがあるな……、確か……………

「島田美波です」海外育ちで日本語は会話ならできますが、よみか
きは苦手です。あ、英語も苦手です。育ちがドイツなので。趣味は
……………」

やっぱり島田さんだ。

なんかFクラスは、知り合いが多いな。

「趣味は金沢豊をボコることです」

「おい、ちよつとまで美波……！！殴るならまだしも、ボコるは酷
すぎるだろ……！！」

そして、全員性格が変わってない。

あれ？でも、今の男子は見たことないな……………。
島田さんの知り合いかな？

「たく……………。金沢豊だ。美波と同じくドイツ育ちだ。日本語は別に苦手ではないし、英語も苦手じゃない。今年から、ここに通うことになった。ちなみに、美波とはおさ馴染みだ」

チャッ↑一部の男子がカッターナイフを出すおと

「あ、そうそう。喧嘩なら堂々とこいよ？全員、病院送りにしてやるからよ」

サッ↑一部の男子がカッターナイフをしまつおと

へへ。島田さんと同じドイツ育ちなのかへ。

後で話しかけてみようへ

そしてどんどん紹介が進んでいき、次は僕の番となった。

「えっと吉井明久です。ダーリンってよんでね」

『ダーリイイイイイイイン！！！！！！！！』

「失礼。忘れてください」

「バカ……………」

今のは忘れよう。

次は直貴の番だ。

「よしっ。次は俺だな」

「失敗しないようにね。直貴」

「自己紹介で、失敗する馬鹿はいねえよ……………」

そう言って直貴は教壇の方に向かった。

「渡辺直貴だ。よく、テールズオブグレ○○○の主人公に似てると

言われるんだが気にしないでくれ。剣道が得意で、もし明久や瑠美にてを出したら…… ヨウシヤナククロス……」

ヤバい！！！！また魔王化した！！！！

「ま、魔王!？」

もちろん、突如魔王化した直貴にびっくりするクラスメイト達とそこへ

「なに。自己紹介でクラスメイトを脅かしてんのよ、このバカ直貴……!」

ドガッ！！！！！！

「グハッ！！！！！」

↑直貴が倒れるおと

瑠美がいち早く、直貴に鉄斎を下した。そして、自分の紹介をした。

「え」と。さっきはこの直貴が脅かしてごめんね。私は西崎瑠美！
！趣味は音楽を聞くことと、運動をすること！！！！これからよろしくね」

『可愛い！！！！！』

溜美の満面の笑顔で、クラス全員が心をうたれた。

「あ、そういえばいい忘れたけど。直貴と明久とは昔から仲良しなんだ」特に直貴とは一番仲がいいよ」

「あのなあ、瑠美。わざわざそんなこという必要なんか……
……って、あぶね!!!!!!!!!!」

ん？

うわっ!!!!!!!!!! 危な!!!!!!!!!!

「な、なんかカッターナイフが飛んできた!!!!!!!!!!」

『次は逃さん!!!!!!!!!!』

『この二人に死を!!!!!!!!!!』

ちよ、ちよ。危険だよこれ!!!!!!!!!!

「な、直貴!!!!!!!!!! 何とかしてよ!!!!!!!!!!」

「何とかしてほしいなら、俺のちゃぶ台の上にある木刀をとってくれ!!!!!!!!!!」

こ、これ!?

ていうか、学校に木刀なんか持ってきていいの!?

「明久!!!!!!!!!! 早くしろ!!!!!!!!!!」

「え!? あ、は、はい!!!!!!!!!!」

僕は、勢いよく木刀を直貴の方に投げつける。

パシッ!!!!!!!!!! ↑ 直貴が木刀を受けとる

「おし!!!!!!!!!! いくぜ!!!!!!!!!!」

『シネエエエエエ!!!!!!!!!!』

クラスメイトが一気に直貴の方へ向かっていった。

直貴が木刀を構える。

to New York

「あ、そうそう。私、友達を傷つける人は嫌いなんだ。特に直貴と明久を傷つける人は」

みんな、席につけ！！！！
ラジャー！！！！！！

瑠美の一言で、襲いかかってきたクラスメイトは全員座った。

「うふふ♪おもしろーい♪」

「男子で遊ぶなよ……」

「いいじゃん別に。あ、みんな！！仲良くしようね！！！！！！」

溜・美!!! i love you!!!!!!

すごい。秀吉以上のラブコールだよ。

そして、**瑠美と直貴が席についた瞬間**

ガラガラガラガラ

教室のドアがあいた。

「あの……遅れてすいません」

え？

登場した人物に、クラス全員が驚いた。

「ちよーどよかったです。姫路さん。今自己紹介中なので、姫路さ

んも自己紹介をしてください」

「あ、はい。姫路瑞希です。よ、よろしく願いします！……！」

登場した人物は、普通このクラスにいない人物。

姫路瑞希さんだった………………。。

第二話 再会と理由とガールズトーク（前書き）

今回からバカテストを入れました♪
ではどうぞ！！

第二話 再会と理由とガールズトーク

バカテスト 化学

第1問

【調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。】

姫路瑞希・西崎瑠美・金沢豊の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジェラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんと西崎さんと金沢君は引っかけかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

渡辺直貴の答え

『合金の例……ゴールドアームズ』

教師のコメント

それは西崎さんの召喚獣の装備です。

しかし君は化学が得意と聞きましたが、本当に得意なんですか？

Side 瑠美

嘘……………。

瑞希……？なんでここに……………。

「はい！！質問です！！！」

「あ、はい。なんでしょうか」

と思っていると瑞希は誰かに質問された。
いきなりの質問にちよつとパニックっている。

「どうしてここにいるんですか？」

……。
もうちょっと言い方を考えようよ……。

「あの、えっと……。テスト中高熱をだしてしまっただんです……」

そういえばそうだった。

瑞希は高熱をだしたんだった。

「西崎さんと渡辺君にも質問です！！どうして君達もここにいるんですか？」

「えっと、私も急に倒れて途中退席になったの………」
「俺は居眠りをしていて0点になったんだ」

やっぱり、直貴の理由は小学生並だよ……。

『そういや俺も熱（の問題）がでてFクラスに』

『ああ、化学のдар？あれは難しかったよな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出しきれなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

すごい……（逆の意味で）。

どうやったら、そんなこと言えるんだろ。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんななか、逃げるように瑞希は明久と雄二の隣の空いているちやぶ台に着こうとした。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いた。

すると、明久が声をかけようとした。

頑張れ明久……！！

「あのさ、姫——「姫路」あつ……………」

残念ながら、明久の声にかぶせるように雄二が声をかけた。
残念明久……！！

「は、はいっ。何ですか？えーつと……………」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「……あ、それは私も（僕も）（俺も）気になる」「」

気になっていた言葉を発すると、見事に直貴と明久と私の声が重なった。

どうやら、直貴と明久も同じことを思っていたらしい。

「あ、明久くんは直貴くんは瑠美ちゃん！？」

私達三人の登場で、瑞希はチョーびつくりしていた。

うゝん。そんなに驚かなくてもいいんだけど………………。
ていうか、明久はショックを受けてるし。
すると、

「あゝ、姫路（瑞希）。明久がブサイクですまん」

その明久に止めを指すような言葉を、雄二と直貴がいった。
ていうか、直貴……………。

「雄二はともかく、なんで直貴まで!？」

「すまん。明久。つい本音が」

「直貴……………」

「ん？なんだ瑠美」

「……………見損なった…」

「なっ!？」 □———!」 ↑ショックになっている

うん。本当に見損なつたよ直貴……………。
しかし

「そ、そんな!目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ……………」

その一言で明久はショックから立ち直った。
立ち直り速!!!!

「そう言えば、俺の知人にも明久に興味を持っているやつがいたよ
うな……………」

へへ。

明久って、いろんなところでモテてるんだね。

「え?それは誰——」

「そ、それって誰ですかっ!？」

「瑞希。落ち着いて」

「確か、久保——」

ん？

何か嫌な予感……………

「——利光だったかな」

……………。
えっと、まとめると……………、

久保利光（性別ノ♂）

←

結果 BL

だよね……………。

あ、明久がさっきよりショック受けてる。

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「僕もうお婿にいけない……………」

「大丈夫だよ。私がもらうから」

「「ええ！？」」「」

「なにっ！？」

「な！？瑠美何てことを！？ていうか、みんな！！カッターナイフをおろして……………」

『全員突撃……………』

『おお……………！！！！！！！！！！』

「ちょ……………直貴助け……………って、直貴！？なんで木刀を構えてるの！？」

「アキヒサ……………イクラシンユウデモユルサン……………！！！！！！！！！！」

「ちょっと待って！……マジで待って！……！」

「みんな本気にしすぎ。冗談だよ。冗談」

その瞬間、直貴は木刀をおろし、他のひとはカッターナイフをおろした。

「瑠美……。冗談を言っても次は僕の命がなくなると思っていて……」

「分かったわよ。もう冗談は言わないから安心して」

それに、今直貴が反応してくれたから余計安心した（／／／／／／）

「えゝ。皆さん静かにしてください」↑先生がてを叩く

パラパラパラ……↑教卓が崩れ落ちる

『……………』

「えゝ。替えを持ってきました。皆さんは自習をしていてください」

そう言つて、先生は教室を出ていった。

本当にボロいわね……………。

「あ、あはは……………（苦笑）」

さすがに瑞希もこれには苦笑いをしていた。
すると

「……………雄二、ちょっといい？」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」
「別に構わんが」

明久が雄二と一緒に廊下に出ていった。
直貴はいいのかな？と思って隣を見ると……、

「……………いない」

いつの間にか消えていた。
どこにいったんだろう？

「あの、瑠美ちゃん！」

と思っていると瑞希から声をかけられた。

「ん？どうしたの瑞希？」

「あの、話したいことがあるんですけど……………」
「なんの？」

「ちよつと、ここじゃ話しにくいんですが……………」

「小声で話せば大丈夫だよ」

「そうですか？それじゃあここでいいです」
「んで？話したいことって？」

「あの……………、瑠美ちゃんは明久くんのことをどう思っているんですか？」

「へ？」

流石にびっくりしたので口をパカッと開けた。

「どうって……………、友達と見てるけど……………」

「そ、その。異性として見てませんか？」

「うん」

「そ、そうですか」

ピン

なるほど。だから瑞希は私に聞いたんだね。

「安心して瑞希」

「え？」

「私が異性として見てるのは、明久じゃなくて直貴だから」

「え、え？」

「だから、瑞希の恋が実ることを応援するよ」

「る、瑠美ちゃん！？べ、別に私は「好きなんですよ？明久のこと」
うっ、は……はい……（／／／／／／）」

「だったら頑張らなくちゃね」お互い頑張ろう」

「は、はい！」

意外……………。

まさか瑞希が明久に好意を抱いてたなんて……………。これは応援
しなくちゃね」

「あの。瑠美ちゃん……、実はお願いが……」

「ん？なにになに？」

「わ、私に料理を教えてください！！」

「え？料理？」

「は、はい……」

「なんで急に……………あっ」

思い出した。

瑞希は料理がドヘタなんだ。

砂糖と塩の分量を間違えたり、毒物をいれたりとかくドヘタだっ

「ただ……。」

そのせいで直貴が中学の頃、魔されながら病院に入院してたっけ。流石に今年も犠牲者を出すわけにはいかない！！！！！！

「いいよ」

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！！！」

「その代わり、私が許可したときしか料理をすること禁止ね！！」

「そ、それぐらいお安いご用です！！！」

「おし！！料理に慣れるまで教えてあげるからね！！」

「はい！！」

もう高校生なんだから、料理ぐらいちゃんと出来るようにしなくちゃね。

Side 明久

「んで。話ってなんだ？」

「このクラスの設備のことなんだけど……」

「ああ。想像以上にひでえな」

「Aクラスの設備見た？」

「ああ。最早教室とは言えないほど、豪華だったな」

「そこで提案なんだけど、Aクラス相手に試召戦争をしてみない？」

「……………何が目的だ？」

「いや……。僕はただ、あまりにもここのクラスの設備が「おいおい。嘘つくなよ明久」な、直貴！？」

「お前は瑞希のためにAクラスに試召戦争をやろうとしてんだろ？バレバレだぜ」

「うつ……………」

「顔に出てるからな」

「雄二まで……………」

うつ……………。

二人とも敏感すぎたよ……………。

直貴はともかく、雄二までにバレるなんて……………。

「まあいいだろ。ちょうど俺もそうしようとしていたからな」

「え？雄二も？」

「ああ。でも、本当にいいんだな明久」

「もちろん！！！」

「後、直貴と……………そこにいるお前もな」

「え？」

「は？」

なにいつてんの雄二。

誰もいないじゃないか。

「出てこいよ。確か……………、金沢豊だったかな？」

すると、なぜか天井からボカ〇の鏡〇〇〇の髪型にそっくりな男の子が落ちてきた。

あれ？確か、この人もFクラスだったような……………。

「よく分かったな。俺が天井に潜んでるなんて」

「俺達が出ていく前に、お前が出ていくのを見たからな。もしかしたらと思って言ったんだ」

「ほゝ。流石だな。まあ俺もAクラスに試召戦争を仕掛ける提案はいいと思うぜ」

「よし。決定だな」

「明久。後悔だけはするなよ」

「そうだぜ。明久」

「ありがとう……。雄二、直貴、豊くん」

「あ、俺のことは呼び捨てでいいぜ」

「そう？じゃあ、遠慮なく呼ばせてもらうよ」

「お。先生が戻ってきたな。教室に戻るぞ」

第三話 宣戦布告とお昼と始まり

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 【(1) 得意なことでも失敗してしまうこと
(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え】

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にもありますがそれは渡辺くんが答えてくれました。

渡辺直貴の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。これが君の実力ということでしょうか？

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

金沢豊の答え

『(2) 瑠美に浮気がばれボコボコにされる直貴』

教師のコメント

最早それは教師のてにはおけません

西崎瑠美の答え

『(2) かかとおとしをやり過ぎて捻挫しました』

教師のコメント

それは渡辺くんをボコボコにするときにしたのですか？それとも岩を壊していた時にしたのですか？

Side 瑠美

私と瑞希のガールズトークが終わった瞬間、明久達が戻ってきて、替えの教卓をとってきた先生も戻ってきた。

まあ、どうせボロいしまた壊れると思うけどね。

「では自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です。趣味は――」

また自己紹介が再開して、どんどん流れていく。
そして遂に、最後の雄二に回ってきた。

「それでは、最後は代表の坂本君に閉めてもらいましょう。坂本君前へ」

「はいはい」と

先生に呼ばれ雄二は教壇の上にとった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

やっぱり代表の人って、ハキハキしているからいいよね。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言つて、雄二は全員の目を見るように告げる。

「かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台」

みんな雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて静かに告げた。

「――不満はないか？」

『『『『大ありじゃあつ!!!!!!!!!!!!!!』』』』

ここでクラス全員の声が重なった。
最早魂の叫びだね（汗）

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！！！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

やっぱりみんな不満なんだ。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

雄二は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、こうつけた。

「これは代表としてね提案だが——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

S i d e 直貴

Aクラスへの宣戦布告。

これは、明久が考えたことだ。

もちろん、このFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えないだろ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『西崎さん。結婚して』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がった。
ていうか誰だ、瑠美に告白したやつ。

「みんな！！最初から諦めちゃダメ！！後、今告白した人は嫌い！
！」

『『『どうもすみませんでした！！！！！！！！』』』』

なんだ、こいつら……………。

「確かに無理があるが、勝つことができる要素があるんだ。今から説明してやる」

勝つことができる要素？
なんだそりゃ。

「おい、康太。畳に顔をつけて西崎のスカートを覗いていないで前にこい」

「……………！！（ブンブン）」
「え？わっ！！！！」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

ていうか、瑠美のスカートをのぞいただと？

よし後で詳しく聞か……………。

しかも、今頃気づいたのかよ瑠美……………。

珍しいなあいつが今頃気づくなんて。

んで康太とか言うやつは、顔についた畳の後を隠しながら壇上へと歩き出した。

なんか、Fクラスって個性的なやつがいっぱいいるな。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ
「……………！！（ブンブン）」

ムツリーニ？そっういや聞いたことがあるな。男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられているやつか？

「ムツリーニだと……………？」

「馬鹿な、やつがそっうだというのか…………？」

「だが見ろ。あそっまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……………」

「ああ。ムツリーの名に恥じない姿だ……………」

「そして、姫路瑞希もいる。皆だって姫路の力はよく知っているはずだ」

「そっうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった」

「彼女ならAクラスにもひけをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらさないな」

なんかさっきから、姫路にもラブコールをおくっているやつがいるな。

「木下秀吉だっている」

「おお……………！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の……………」

「そして、西崎瑠美と渡辺直貴もいる。この二人は学園でトップの成績をもつ二人だ」

「そっうだ……………！俺たちには西崎さんと渡辺がいるじゃないか……………！！」

「西崎さん……………！結婚して……………！！」

『いいや。俺と結婚して！！！！』

そういえば、確か俺と瑠美は学園で1位と2位を争う実力だ、って聞いたな。

その前に今瑠美に告白したやつ殺す……………。

「そして金沢豊もいる。金沢はAクラスより上の実力をもつ男だ。振り分け試験の時はまだドイツにいたらしいから、振り分け試験をうけられなかったそうだ」

『なに！？そんなに頭がいいだと！？』

『流石、帰国子女は違うな！！！！』

いや。それは関係ないと思うんだが……………。

「当然。俺も全力をつくす」

『確かになんだかやってくれそうなやつだ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『このFクラスには実力はAクラスレベルが五人いるってことだな！！！！』

いつきに教室内はいけそうだ、やれそうだという雰囲気になった。しかし

「それに、吉井明久だっている」

……………シン――

士気が上がっていったのに、この一言で一気に下がっていった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「こいつは学園始まって以来最初の『観察処分者』だ！」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！！」

すまん明久。俺もそう思ってしまった。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

「そうなんですか？それって凄いですね！」

「だが、実際は役に立たない雑魚だ」

「雄二！そこはフォローしてくれていいよね！？」

『やっぱり。観察処分者ってただ単の雑魚なんだな』

『それにどうせ、吉井はバカなんだろう？いなくたって平気じゃないか』

「でも、試験召喚獣って見た目と違って力持ちだから、運よく使うと便利なものだよ」

お。瑠美がフォローをいれた。

『西崎さんが言うならそのとおりだよな！！』

『流石西崎さん！！！！』

ほんとになんだこいつら……………。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。そしてこのバカ（明久）にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事死んでこい！！！」

最低の一言だなおい。

「やだよ！！せめて、直貴ついてきてよ！！！」

「残念だが、敵に直貴がいることをバレることになら駄目だ。もちろん瑠美もな」

「それじゃあ、俺がついてってやろうか？」

「え？豊が？」

「まあ。金沢なら大丈夫だろ。金沢のことを知っているのは俺達だけだからな」

「と言うことだ。行こうぜ明久」

「あ、うん」

「よし。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

『おおー！！！！！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！！システムデスクだ！！！！！」

『うおおー！！！！！！』

「お、お……………」

「楽しそう♪久しぶりにやりがいがあるね♪」

「おいまて瑠美。これは殺しあいじゃないからな？」

「分かってるよ♪そんなぐらい」

嘘つけ……………。

数分後。

Dクラスに宣戦布告にしにいった明久と豊が戻ってきた。話によると、襲いかかってきたので豊が制裁したらしい。微妙に雄二が悔しがっていたのは気のせいかな？

Side 明久

「さて。それじゃあミーティングを行うか」

僕たちは今、昼食とミーティングをするために屋上へと向かっている。

ちらつと後ろを見ると、

「……………（サスサス）」

ムツツリーニが自分の頬の辺りをさすっていた。

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳のあとならもう消えてるよ？」

「……………！！！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いなと思う」

「……………！！（ブンブン）」

「——何色だった？」

「白」

即答か。

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ」

「……………！！（ブンブン）」
「おい。お前ら早くこい」

そんな話をしていたら、直貴に呼ばれた。

「あ、うん」

「……………（スタスタ）」

「あ、後明久」

「ん？」

「テメエ、アトデブツコロス」

「なんで!？」

なぜか直貴に死の宣告をされた後、雄二が勢いよく屋上の扉を開いた。

「さて明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたよ」

「じゃあ、まずはお昼御飯が先ね」

「明久。今日ぐらいまともな食べ物食べろよ」

「そう思うなら、パンぐらいおごつてよ」

「え？吉井くんって、お昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

「……………あれは食べていると言えるのか？」

「何が言いたいのかさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう？」

「失礼な!!きちんと砂糖だって食べているさ!……!」

「明久……………。それは食べるとは言わないぜ……………」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

見ないで！！！！そんな妙に優しい目で僕を見ないで！！！！！！

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りがないんだよ！！！」

「へへ。明久って一人暮らしなんだ」

「うん。両親が仕事の都合で海外にいるからね」

「ていうか。お前よくそんなんで生きていけたよな」

直貴の言葉が僕の心に、グサツと刺さったような気がする。

「……………あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？いいの？姫路さん」

「はい。明日のお昼でよければ」

やった！！姫路さんの手作り弁当！！楽しみだな。

「あ、ちょっと待って！！！！私も作ってくるよ！！！！」

「え？瑠美も？」

「うん。瑞希と共同だね。いいでしょ？瑞希」

「あ、はい」

え？ということは、姫路さんと瑠美が作ったお弁当が食べられるんだよね？

こんな幸せなこと滅多にないよ！！！！

「あ、そうそう。みんなにも作ってくるよ！！！」

「マジか！？」

「ラッキーだな」

「楽しみじゃの」

「……………（コクコク）」

「お手並み拝見ってことね」

「あれ？直貴。なんで震えてんの？」

「……………（ガタガタブルブル）」

「（安心して直貴。なるべくあんたには、あたしの弁当を食べさせるから。ていうか、皆を犠牲にはしないから）」

「（そ、それなら安心だな……………）」

？

二人で小声で何喋ってたんだろう。

「さて。試召戦争の話に戻るぞ」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「そつえば、確かにそうね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

「どんな考えなの？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエのまわりにいる面^{メン}子をよく見てみる」

「えーっと……………」

雄二に言われたとおりその場にいるメンバーを見回してみる。ふむふむ、この場には、

「天使一人と美少女二人と美男子二人と馬鹿が二人とムツツリが一

人いるね」

「天使って誰ですか！！吉井くん！！！！」

「「誰が美少女だと!?」」

「姫路さん落ち着いて！！！！ていうか、なんで直貴と雄二と豊が美少女で反応するの!?」

「私は女子なのに美男子扱いか」……………」

「……………（ポツ）」

「瑠美とムツツリー二まで!?どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない!!」

「まあまあ、落ち着くのじゃ皆の衆」

とそこで、美少女秀吉が止めにはいった。まあ、男なんだけどね。

「そ、そうだな」

「全く、明久が変なこと言うから……………」

「そうだぞ、明久」

「いや、僕のせいじゃないから！！！！だいたい美少女のところで反応する三人が悪いんでしょ！！！！」

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。

無視!? 僕の言葉は無視なの!?

「姫路、西崎、渡辺、金沢に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「?それならDクラスとは正面からぶつかるかと厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ?それ

に、さっきいいかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」
「あ、あの！」

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。さっきいいかけた、って……吉井さんと坂本くんは、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて——」

「それはそうと！」

あ、危ない！！！

あやうく言われるところだった。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

「随分と余裕なんだね……。そこも代表の考えてることかな？」

「ああ。お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

「協力？」

「いいか、お前ら。うちのクラスは——最強だ」

……なぜか、雄二の言葉が本当になるような気がしてきた。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張ります」

「おっしゃーやるぜー！！」

「本気をだすか……………」

「やるなら派手にやっちゃうよー！！！！」

打倒Aクラス。

みんな多分、そう思っていることだろう。

「そうか。それじゃあ、作戦を説明しよう」

大丈夫。僕達ならいける！！！！僕たちは最強なんだ！！！！

第三話 宣戦布告とお昼と始まり（後書き）

次回、いよいよDクラス戦です！！

第四話 Dクラス戦 その1

バカテスト 物理

問 【以下の文章の（ ）に正しい言葉をいれなさい】
『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希・渡辺直貴の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

このごろ渡辺くんの真面目な解答を見ると、なぜか西崎さんの真面目な解答が見られないのですが……………、どうしてなのでしょう？

直貴のコメント
さあ？

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

金沢豊の答え

『希望』

教師のコメント

正解ではないですが、先生はこの解答はすきです

西崎瑠美の答え

『ストロボナイツ』

教師のコメント

誰も初〇ミ〇の歌を答えなさいとはいつてません
そういえば今思い出しましたが、西崎さんは物理が苦手でしたね。

Side 明久

「吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ってたわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田さん。こうして改めてみると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

ヤバイ。何か作動したっぽい。

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと!」
「それもそうね」

ちなみに今はどんな感じかな?
耳をすませると……………、

『さあ来い!この負け犬が!』

『て、鉄人!?!い、嫌だ!補習室は嫌だああ!』

『黙れ!捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ!終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む!見逃してくれ!あんな拷問耐えきれぬ気がしない!』

『拷問?そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやる』

『お、鬼だ!誰か、助けっ——————イヤアア——————(ボタン、ガチャ)』

よし、試召戦争の雰囲気はだいたいわかった。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに?作戦?何て伝えんの?」

「総員退避!!!」

「この意気地無し!!」

ギアアアアア!……!!

殴られたあああ!!!!しかもチヨキでえええ!!!!!!

「目が、目があつ!」

「目をさましなさい、このバカ!アンタは部隊長でしょう!臆病風に吹かれてどうするのよ!」

「そういった台詞は、せめてグーかパーで殴ったあとに言って！！」

「いい、吉井？ウチラの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツラが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチラが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチラが逃げ出したりしたら、アイツラは補給ができないじゃない！」

「島田さん！！君はなんて男らしいんだ！！なぜだか涙が止まらないよ！！（後、激痛も）」

「ウチは女よ！！！！」

「さあ、島田さん！！やるぞ！！！！」

「無視するな吉井！！！！」

すると、島田さんのところに報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

「島田さん！？さっきと言っていることが全然違うよ！！！！」

「ウチラにはもう無理なのよ。でも、精一杯努力はしたから平気よ」
「よし、分かった。逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

くるりとFクラスに向かって方向転換。

すると、本陣（Fクラス）に配置されてるはずのクラスメイトがいた。

えっと、確か横田くんだったけ？

「ん？横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります」

そういつて横田くんは、メモを広げてこう言った。

「『逃げたらクロス』」

「全員突撃しろおーーーーっ!!!!!!!!!!」

「ちよっ、吉井!？」

すまない島田さん。

殺されるのは嫌なんだ!!!!

すると、前方からこちらに美少女（秀吉）が走ってきた。

「明久!!!いま、お主美少女とかいてワシと見たじやろ!!!!!!」

「何をいつているのさ秀吉!!!!それは作者の仕業だよ!!!!とりあえず、秀吉自身は大丈夫なの?」「くっ……………、なんかスツキリしないがまあよい。戦死は免れておるが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい。召喚獣もへロへロじゃ」

「そっか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「それもそうじゃな。では、1、2教科ぐらいはつけてくるようにしようかの。その間に頼んだぞい明久」

「任せて!!!!!!」

そして秀吉は回復試験をうけにいった。

秀吉と入れ違いに、島田さんがこちらに来た。

「吉井!!!試験召喚戦争のルールは覚えてる!?立会いの先生がいなくちゃ、召喚獣を呼び出すことはできないんだからね!!!!」

「分かってるよ!!!!」

「ホントに!?アンタのことだから忘れてると思ったわ!!!!」

なんと失礼な!!!!

僕だってそれぐらい分かってるよ!!!!

え?

それなら試験召喚戦争のルールを全て言えって?

それは作者が書くのめんどくさいらしいから、詳しくは『バカとデストと召喚獣』を呼んで！！！！

「吉井！！見て！！！！」

島田さんが指を指した方を見る。

「五十嵐先生に布施先生！！！！Dクラスの奴ら、化学で勝負をしてくるきだな！！！！」

うーん。化学は自信ないんだよね。

「島田さん。化学の点数はどのぐらい？」

「60点台が普通よ」

さすがFクラス。ひどいなあ。まあ、僕が言う台詞ではないんだけどね。

「よし。じゃああそこは避けて学年主任の高橋先生のところにいこう」

「了解！」

そして、僕たちはこそこそと気づかれないようにその場を離れる。なんか泥棒みたいだな。

「あー！！そこにいるのはもしかやFクラスの美波お姉さま！！！！布施先生こちらに来てください！！！！！！」

「げっ！！！！美春！？」

「しまった！！！！布施先生がこっちに来る！！！！！！」

このままじゃ、二人とも補習室行きだ！！！！
仕方ない！！！！

「島田さん！！ここは君に任せて僕は先にいく！！」

「ええ！？普通、逆でしょ！？」

「そんな台詞僕は知らない！！！！」

「えええ！？」

「じゃあ、後はよろしく！！！！」

島田さんが快く（？）承認してくれたので、僕はその場を離れる。

「吉井！！後で殺してやる！！！！」

なんて事を言っただ島田さん！！！！

君は本当に女なのか！！！！

「仕方がないわね！！！！美春！！勝負よ！！！！！！」

「お姉さま！！美春の愛の一撃受け止めてください！！！！！！」

相手がどんどん島田さんに近づいていく。

そして、

「「試^{サモン}獣召喚！！！！！！！！」」

いよいよ、戦闘が始まった！！！！！！

第五話 Dクラス戦 その2

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい

【ベンゼンの化学式を書きなさい】

姫路瑞希・金沢豊の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント

あとで土屋くんと一緒に職員室に来るように。

西崎瑠美の答え

『アンチクロロベンゼン』

渡辺直貴の答え

『パラジクロロベンゼン』

教師のコメント

なぜ、二人ともボーカ……。の鏡音……。と……。レンの曲を書いているのですか？

まあ、確かにあの曲はとてつもなくいいですが。

特に『この歌に意味はあるの？この歌に意味はないよ。この歌に罪はあるの？この歌に罪はないよ。あの歌に意味はあるの？あの歌に意味はないよ。あの歌に罪はあるの？あの歌の罪は……』と、『ベンゼンに意味はあるの？ベンゼンに意味はないよ。ベンゼンに罪はあるの？この歌の意味は……ベンゼン』という歌詞はいいですね。

西崎瑠美・渡辺直貴のコメント

なんで、先生がそんなにしってんですか！？

Side 明久

「————^{サモン}試獣召喚！！！！！！」

呼び声に応えて、二人の足元に幾何学的な魔方陣が現れる。

教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、姿を見せる召喚獣。

島田さんの召喚獣は、軍服姿で手にサーベルを持っている。後は全て島田さんそっくり。ただし、身長は80センチ程度だ。

その姿を一言で表現するなら、『デフォルメされた島田美波』ってところ。

相手の方も同様にデフォルメされた自分の分身を従えている。向こうの獲物は普通の剣みただけ。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

「ちょっと！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

いよいよ戦闘が始まるんだな。そう思うと、自分のことじゃないのに全身に震えが走る。

ん？お姉さま？

「島田さん、お姉さまって——」

「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

「このわからずや！」

……………ついていけないや……………。

「行きます！お姉さま！」

二人の召喚獣の距離が詰まる。いよいよ戦闘だ。

「はあああああつ！！！」

「やあああああつ！！！」

それぞれの召喚獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「こ——のっ！！！」

「負けません！！！！」

島田さんじゃなくて、瑠美だったら一気に勝つな。これ。

そして、二人の召喚獣の頭上には参考として二人の戦闘力（点数）が浮かび上がっていた。

Fクラス 島田美波 化学
53点

V S

Dクラス 清水美春 化学
94点

「島田さん！！！サバ読んだの！？本当は60点にすら届いてないじゃん！！！！」

「数学以外は無理ーーーー！！！！！！」

「ここまでですっ！」

「しまった！！」

ついに、島田さんの召喚獣が清水さんの召喚獣に力負けした。そのままの勢いで島田さんの召喚獣が押し倒される。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

刀を喉元に突きつけられる島田さんの召喚獣。
これがやられたら即死だな。

「い、嫌あつ！補修室は嫌あつ！！！」

島田さんが取り乱す。僕も補修室は嫌だよ。

「補修室？……………フフッ」

清水さんが島田さんの手を引っ張る。

あれ？清水さん？そっちにあるのは保健室ですよ？

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

「よ、吉井！早くフォローを！なんだか今のウチは補修室行きより危険な状況にいる気がするの！」

うん。僕から見てもそんな気がするよ。

でもね、島田さん……

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

ごめん、僕にソコに飛び込む勇氣はない。

「さらばだ島田さん！！君のことは忘れない！！！！」

「ああっ！！吉井！！なんで戦う前から別れの台詞を！？」

「邪魔物は殺します！！！！」

ヤバい！！！！清水さんの召喚獣がこちらにやって来た！！！！僕も補修室は嫌だ！！！！！！！！！！

「殺すことができるなら、殺ってみるよ！！！！」

「誰ですか！！！！！！」

すると、僕の後ろからそんな声が聞こえた。
振り返ると、

「え！？豊！？」

「ヒーローは遅れて参上っていうことだぜ！！布施先生！！Fクラス金沢豊、行きます！！！！試獣召喚^{サモン}！！！！！！！！！！」

豊はすぐに、召喚を行い清水さんの召喚獣の前に立ちはだかった。

「だ、誰ですかあなた！！見たことない人ですけど！！」

「俺は金沢豊！！そこにいる島田美波の……………」

その次の瞬間、豊はとんでもない爆弾発言をした。

「彼氏だ！！！！」

「……………はああああ！？……………」

ここにいる、全員の声が重なった。ちなみに島田さんは顔を真っ赤にしている。

「なっ！？こんな男とお姉さまが！？許しません！！！！殺します！！！！」

「やれるもんなら、やってみな！！！！ただし……………」

そして、豊の点数が頭上に浮かび上がる。

「この点数に勝てるならな！！！！」

Dクラス 清水美春

化学 41点

V S

Fクラス 金沢豊

化学 441点

「ええええええええええ！！！！？？？？」

またもや、全員の声が重なる。

ていうか、豊ってこんなに頭がよかったの！？

「そ、そんなっ!!!」

「ぶっ飛びな！！！エクスプロードバレット！！！」

ちなみに豊の召喚獣は、マントに袖無しＴシャツに半ズボンにサン
グラスに拳銃という装備。

その拳銃から大爆発てきなものが起こり、清水さんの召喚獣が一撃で戦死になった。

「これは、俺の召喚獣の特殊効果でな。俺がいった技をだしてくれるんだぜ」

つ、強すぎる……！！！！！！

でも、豊がなんでここに？

だって、本当なら豊は回復試験を受けているはずなのに。

「さてと。おい、てつじ——西村先生！この負け犬を補修室に連れていってくれ！」

案外、豊もひどいこと言うんだね。

「おお、清水か。たつぷりと勉強づけにしてやるぞ。こつちにこい」
「お、お姉さま——美春は認めませんからね——！そんな害虫と付き合っているなんて——！いつか絶対、美春のものにしますからね——！——！」

清水さんは鉄人に補修室に連れていかれた。
さて、僕もやる事が出来ちゃったな。

「おい美波。大丈夫か？」

「え、ええ。ありがとう豊（／／／／／／／／）」

「ねえ、豊。ちょっといいかな？」

「なんだ明久……………、おい明久」

「ん？何かな豊」

「今手に握っているものを、こちらに渡せ」

「ん？なんのことかな？」

「とばけるなよ———って、危ね！！！」

「ちっ！！逃したか！！！」

くそ！！後、もう少しで肝臓に刺せたのに！！！！

「おい！！明久！！てめえ、どういうことだ！！！」

「黙れ！！男の敵！！みんな、殺るよ！！！」

『『『異端者には死を！！！！！！』『』『』』

「顔が見えねえけど、絶対真ん中にいるやつは須川だろ！！！！！」

「総員、狙ええええ！！！！！」

『『『おおおおおお！！！！！！』『』『』』

「まさか、てめえら、さっきの俺が言ったことを信じてるのか！！！！
？？言つとくけどあれは嘘だぞ！！！！！」

「え？嘘？」

「そつだ。明久てめえなに信じてんだよ」

「いや、だって……………」

「だいたい、俺がこんな胸のない暴力女なんかと間接が今までに感じたことのない痛みを感じてるうつうつうつ！！！！！！！！！！！」

見ると、島田さんが豊に間接技を仕掛けていた。

「豊アアア——！！！！！」

「ギャアアアアア！……ギブキブ！……ギブー……！」

「よくも――!!!!」

「ギヤアアアアアアア！！！！！！！！！！」

↑ バタツ！！！！！！
豊が倒れたおと

よし。逃げよう。

「あ、そういえば吉井？」

「（ギクッ!）な、なになな? し、島田さん」

「ウチを見捨てたわね？」

「……記憶に「うざい」ません」

.....

.....

ものすごく島田さんから、殺気がくる。しかも居心地が悪い。早くここから抜け出したい……………。

しかも、なんか嫌な予感がするんだけど……………。

「死になさい！！吉井！！試獸召^{サモ}」

「誰かああ……！島田さんが錯乱した……！本陣に連行してくれ！」

嫌だああああ！！！！！！
今、補修室に連れていかれたら、清水さんの隣の席になっちゃうじゃないかああああ！！！！！！

「島田、落ち着け！！吉井隊長は味方だぞ！！」

須川くんが、島田さんを羽交い締めに行っている間、僕は倒れている豊のもとへ行く。

「豊？生きてる？」

「ああ……………、なんとか……………」

なんとか、痛みをこらえて豊は立ち上がった。

「くっ！！まだ生きていたのね豊！！！！こうなったら吉井と一緒に殺してやる！！！！須川！！放しなさい！！！！」

「須川！！！！早く連れていってくれ！！その禍々しい視線だけで殺されそうだ！！！！」

「ちよつと、放し——殺してやるんだからあ————っ！！！！！！！！！！」

物騒な捨て台詞を残し、島田さんは須川くんの本陣に連れていかれた。

「そつえば豊。なんで豊はここにいるの？」

「あ？ああ。あの木下とかいうやつに今の現状を聞いたんだ。そして、けっこつ押されると聞いてな。とりあえず先生に許可をもらい、三教科だけ受けてこっちに来たんだ」

「ふん」

でも、その三教科がフィールドに出てこなかったらおしまいだよな。今のフィールドは化学。

ということとは、豊は化学を受けたことになる。

残りの教科は何なんだろう？

「おら。明久。ぼけっとしてないで片付けるぞ」
「あ、うん」

でも、豊がいれば安心だな。

「おっじゃあ！……おもいきり暴れまくるぜ！……！……！……！」

第五話 Dクラス戦 その2（後書き）

次回でDクラス戦完結です（できるといいな）。

第六話 Dクラス戦 その3（前書き）

今回、オリキャラがです。

やっと、直貴達の召喚獣がだせた〜（ホッ
♪

第六話 Dクラス戦 その3

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y. 』

姫路瑞希・西崎瑠美・金沢豊の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。後、久しぶりに西崎さんの真面目な解答を見て先生はほっとしています。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

『 ● 」 ♪ ☆ × 』

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

渡辺直貴の答え

Dクラス モブ男B
化学 95点

Dクラス 女子A
化学 104点

Dクラス 女子B
化学 102点

V S

Fクラス 金沢豊
化学 438点

「弱いぜ！！ブレイズバレット！！！！！」

俺の召喚獣が拳銃を持ちながら、敵四体の真下に炎の火柱を出した。
四体全員直撃したため戦死。
補修室で頑張って勉強してこい！！！！

「さあ、次は誰だ！！！」

『くそっ！！長谷川先生はまだか！！！』

『まだだ！！それまで持ちこたえてくれ！！！』

『さすがに無理だ！！！』

長谷川先生？

つて、なんの科目だったけ？

「おい。明久……………っていねえ！？」

あいつどこいったんだよ!!

「吉井隊長なら、トイレ!!とかいってトイレに行ったぞ」

「何やってんだあいつはああああああ!!まあ、後でぶちのめすか。おい須川。長谷川先生ってなんの科目だ?」

「長谷川先生?確か数学だったな」

数学だと!?

『長谷川先生が来たぞー!!!!』

『Dクラスの奴らは数学で勝負するみたいだ!!』

『長谷川先生!!お願いします!!』

「ヤバい!!全員撤退!!!俺、数学受けてないから0点なんだ!

!!」

『『『なんですとおおお!!!!!!!!』』』

『数学なら勝てるぞ!!!!全員突撃!!!!』

『『『おおおおおおおおおお!!!!!!』』』

「くそつ!!!数学の点数があるやつは前に出て防御している!!ないやつは撤収!!」

「よし!!金沢!!ここは俺に任せろ!!!!」

「須川!!よし、頼んだ!!!!」

「長谷川先生!!Fクラス須川亮いきます!!!試獣^{サモン}召喚!!!!」

Fクラス 須川亮

数学 89点

V S

Dクラス モブ男C

数学 105点

Dクラス モブ男D
数学 110点

「駄目だったあああああ……!!」
「須川……!!」

全然駄目じゃねえかよ!!
須川がとどめをさされそうになったその時!!

「どりゃあああああ……!!」

なぜか、敵の後ろから明久の召喚獣が飛んできた。
もちろん、敵二体に直撃した。

Fクラス 須川亮
数学 10点

V S

Dクラス モブ男C
数学 85点

Dクラス モブ男D
数学 90点

「明久!?なんでお前!」
「ちょ!!直貴!!なんで投げ飛ばすのさ!!」

「何をいつているんだ明久！！！須川がピンチだったからお前の召喚獣を投げ飛ばして、須川をピンチから救えたんじゃないか！！」
「その割には投げ飛ばす瞬間、『死んでこい明久！！』と言ったのは僕の気のせいかな！！」

「豊！！！助けにきたぞ！！」

「スルーされた！！！」

「直貴！？お前、回復試験を受けていたんじゃない？」

「学園2位の実力をなめるなよ！！Fクラス渡辺直貴！！ここにいるDクラス生徒、全員に数学で勝負する！！！！試験召喚！！！」

Dクラス ここにいる生徒

数学 平均90×15

V S

Fクラス 渡辺直貴

数学 482点

「な、なんだあの点数！？」

「渡辺直貴ですって！？」

「ちよつと待てよ！！なんで学園2位のやつがFクラスにいるんだよ！？」

「いくぜ！！！！げっばしゅれっば月破翔烈破！！！！」

直貴の召喚獣が剣を降り下ろした瞬間、そこから衝撃波が出てきて敵を全て戦死にした。

「いっちょ、あがり！！」

「直貴！！お前が来たということは姫路達も！？」

「いや！瑞希と瑠美はまだ回復試験を受けている！！しかし、瑠美はもう少しで全教科終わるぞ！！ああ見えて、学園1位の座を持っているからな！！」

「分かった！！よし！！お前ら逝くぜ！！」

『『『おおおおおおおおおおおお！！！！』』』

S i d e 瑠美

「高橋先生！！西崎瑠美、全教科終了しました！！」

「はい。西崎さんはもう戦争に参加しても大丈夫ですよ」

「ありがとうございます！！」

現在、やっと回復試験を終わらせた。

ちなみに、豊は化学と保健体育を受けて戦争に参加。

直貴は現代国語以外全て受けて戦争に参加しにいった。

私と瑞希は全教科受けると言われていたので、遅く参加することになった。

「姫路瑞希！！終了しました！！」

「お疲れ様です。これで姫路さんも戦争に参加しても大丈夫ですよ」

「はい！！！！」

「瑞希！！行ける？」

「はい！！行きましょう瑠美ちゃん！！！！」

「OK！！行くよ！！！！」

Dクラス代表！！

覚悟しなさい！！！！

姫路瑞希・西崎瑠美、Dクラスに移動開始！！

Side 明久

「くそっ！！いくらなんでも教師を交換しすぎだろ！！！」

現在のフィールドは現代国語。

Dクラスが数学では勝てないと思いつき、現代国語にしたらしい。しかも、直貴と豊はどちらも現代国語を受けていなかったらしく現在戦争に参加できない。

つまり、僕たちはピンチの状態だということだ。

「Dクラス！！荒恵里菜が現代国語で勝負します！！試獣召喚！！！」
「！！」

「くそっ！！Fクラス田中がいく！！試獣召喚！！！」

あらえりな

Dクラス 荒恵里菜

現代国語 118点

V S

Fクラス 田中明

現代国語 67点

「Fクラス須川亮参戦します！！試獣召喚！！！」

「Dクラス初瀬川桃子も参戦します！！試獣召喚！！！」

Dクラス 荒恵里菜

現代国語 118点

Dクラス 初瀬川桃子
はせがわももこ
現代国語 116点

V S

Fクラス田中明
現代国語 67点

Fクラス 須川亮
現代国語 84点

「くそっ!!まだか!!!!」

「ていうか、坂本達は!?!」「いた!!雄二!!!!」

「明久!!もう少し持ちこたえろ!!!!」

「そんなこと言われたって!!!!」

『戦死したものは補修!!!!!!!!!!』

「田中と須川がやられたぞ!!!!!!」

どうする!?!どうする!?!

「下校している生徒にうまく紛れ込め!!!!」

後ろから雄二の声が聞こえる。

どうやら、もう放課後のようだ。

「おい。明久」

「なに?直貴」

「あれって、Dクラス代表じゃないか？」

直貴がDクラス本隊の一番後ろを指さす。

見ると、下校している生徒に紛れているDクラス代表の平賀くんがいた。

よしっ！！

「直貴！！豊！！瑠美と姫路さんが間に合わないなら、僕達で平賀くんを倒そう！！」「でも、科目はどうするんだ？」

「大丈夫。布施先生！！こっちに来てください！！」

先ほどの戦いで、ちょうど近くにいた布施先生を呼んだ。
現代国語が無理なら化学で勝負するよ！！

「なるほどな。現国じゃなく化学で勝負するということか」

「そういうこと！！行こう！！二人とも！！！！」

「「おう！！！！」」

「明久達のカバーをしろ！！！！」

雄二も気づいたらしく、みんなに僕達のサポートをするように呼びかけた。

「Dクラス突撃です！！」

その声を聞いて、Dクラスの本隊の隊長、荒さんが突撃指令をだす。
僕たちはそのすきに平賀くんのもとへと移動する。

しかし、

「行かせはしないよ！！Dクラス初瀬川桃子！！試獣^{サモン}召喚！！」

いつの間にか僕達の前にいた初瀬川さんが行く手をはさんだ。

「明久達の邪魔をするではない！！木下秀吉！！試獣召喚^{サモン}じゃ！！」

しかし、秀吉がそれを遮る。

「行くのじゃ明久！！！！」

「ありがとう秀吉！！」

みんながサポートをしてきているお陰で、平賀くんの近くに来た。
よし！！気付いてない！！

「今だ！！布施先生！！Fクラス吉井明久が！！」

「Fクラス渡辺直貴が！！」

「Fクラス金沢豊が！！」

「『Dクラス代表！！平賀源二に——』そうはいかない！！Dクラス玉野美紀！！試獣召喚^{サモン}！！」なっ！？「！！」

なんだと！？

近衛部隊！？

「いつとくけど、玉野だけではないぞ！！Dクラス渡辺佑樹！！試獣召喚^{サモン}！！」

「同じくDクラス！！南谷愛里！！試獣召喚^{サモン}！！」

Fクラス 吉井明久

化学 45点

Fクラス 渡辺直貴
化学 456点

Fクラス 金沢豊
化学 356点

V S

Dクラス 玉野美紀
化学 96点

Dクラス 渡辺佑樹^{わたなべゆうき}
化学 410点

Dクラス 南谷愛里^{みなみやあいり}化学 123点

つて、ちょっとまってよ!!
Dクラスなのに、一人だけAクラスレベルがいるよ!?
ん?
渡辺?まさか!?

「くそっ!!佑樹!!やっぱり近接部隊にいたか!!」
「化学を選んだのが間違いだったね兄ちゃん!!!!!!」
「兄ちゃん!?!」

僕と豊の声が重なる。

「ああ。そこにいる渡辺佑樹は俺の双子の弟だ!!」
「ええええええ!!?!」

直貴って、双子だったの！？

そういえば、雰囲気は何となく似てる！！

しかも、直貴の弟だから兄が得意な科目は弟も得意なのか！！

「残念だったな！！Fクラスの三人！！！」

「平賀くん！！」「一瞬、Aクラスレベルが二人いるということに
は焦ったが、所詮はその程度だ！！諦めな！！」

「……………確かに、今の状況では僕達は勝てない……………」

「ああ、だから。こいつらに託すしかないんだよな……………」

「後は頼んだぞ。姫路、西崎」

「……………はっ？……………」

一瞬、Dクラスの四人が『何を言っているんだこいつらは？』という表情になる。

すると、平賀くんの後ろから我らが切り札、姫路さんと瑠美が現れた。

「あ、どうも……………」

「えへへ……………」

「あれ？どうしたの姫路さんに西崎さん。Aクラスの人達はここを通らないはずだけど……………」

「あ、いえ。そうじゃなくて……………」

「あゝもう！！めんどいなゝ！！！！瑞希いくよ！！Fクラス西崎
瑠美！！！」

「え！？あ、Fクラス姫路瑞希が」

「Dクラス代表！！平賀源二に化学で勝負するよ（します）！！

！！」

「えっ？」

「試験召喚獣召喚！！試験召喚！！！！！！」
サモン

「試験召喚です！！！！！！」

「えっ？あ、試獣^{サモン}召喚……………」

あわてて、平賀くんが召喚獣を召喚する。
無理もないよね……………、だってこの二人……………

Fクラス 西崎瑠美

化学 518点

Fクラス 姫路瑞希

化学 316点

V S

Dクラス 平賀源二（代表）

化学 108点

どちらもAクラスレベルなんだから……………（一人は学園1位の实力
だけ……………）

「え、えっ？」

「ご、ごめんなさい！！」

「じゃあね、鷹爪^{たかつめもうじゅうげき}猛獣撃！！！！」

姫路さんの召喚獣は剣を降り下ろし攻撃して、最後は瑠美の召喚獣
が空中から蹴りを落として平賀くんの召喚獣を戦死させた。
そして

「戦争終結！！勝者はFクラスです！！」

布施先生の一言で、戦争はFクラスの勝利という結果になった。

第六話 Dクラス戦 その3（後書き）

誤字脱字があつたら言ってください。

後、今日でたオリキャラ達は他の部分でも活躍します（特に佑樹と恵里菜と桃子は）

このオリキャラ達の紹介は、次回にやると思います。
それとも、次回が終わった後にしようかな？

第七話 僕と悪魔と生徒交換（前書き）

今回はバカテストはなしです。

あと、オリジナル要素がはいります。

第七話 僕と悪魔と生徒交換

Side 明久

Dクラス代表 平賀源二

討死

『うおおおおお!!!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ!!! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな!」

「ああ。アレはDクラスの連中のもことになるからな」

「坂本雄二サマサマだな!」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな!」

「坂本も凄いけど、金沢と渡辺と西崎さんと姫路さんも凄いぜ!」

「金沢、渡辺、坂本万歳!」

「姫路さん愛してます!」

「西崎さん結婚——ぐはっ!」

「ルミヲタブラカスナ……………」

やばっ!!

また、直貴が魔王化した!!!

「兄ちゃん!」

しかし、そこで弟佑樹の妨害がはいる。

「ジャマヲスルナユウキ!!」

「あ、そんなこと言うんだ？分かった。兄ちゃん秘密をみんなにバラ——「すみません!!許して佑樹くん!!!!!!」最初からそう言えばいいのに……。ってか抱きつくな——!!!!僕にそんな趣味はない——!!!!」

はつきり言うけど、もしかして佑樹ってDS？

「あー、まあ。なんだ。そう手放して誉められると、なんつか」

ちなみに雄二は、頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見ていた。

照れているなんて意外だな。

「まさか、姫路さんと西崎さんと渡辺くんがFクラスだったなんて……………」

すると僕の後ろから声が聞こえてきた。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀くんの姿があった？

「あ、その、さっきはすいません……………」

「謝る必要なんてないわよ瑞希。これも勝負だしね」

「西崎さんのいうとおりだ。とにかく、ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

これが、試召戦争で負けたクラスが受ける罰的なものだ。

負けたクラスは三ヶ月試召戦争を行使できない。

しかも、僕達のクラスに負けたため僕達の教室の設備と交換しなければならぬ。

ずっと、あの設備のままって嫌だよね。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「いや、その必要はない」

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「で、でも……」

「おいおい明久。忘れたのか？俺達の目標がAクラスだということを」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！！」

「違っぜ雄二。明久は近所の小学生に言われたんだ」

「そうなのか？明久……」

「……人違いです」

「「まさか……本当に言われたことがあるのか……」？」

み、見ないで！！そんな目で僕を見ないで！！

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。しかし、条件がある」

「条件？どんなのだ？」

「条件は二つだ。一つめは、俺が指示を出したら、窓のそとにあるアレを動かなくしてもらいたい」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスのものじゃない。ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんて物はないん

だから。

「Bクラスの室外機か。まあ、設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、平気だろ。んで、二つ目は？」

「話が早くて助かるな。二つ目の条件は生徒の交換だ」

「生徒の交換？」

「ああ。今から俺がDクラスにいるある四人を指名する。その四人は明日からFクラスとなる。そして、その四人がFクラスとなるため、こちらからも四人いつてもらいたいところだが、人数の関係があるため、二人だけDクラスにいつてもらおう」

「まあ、いいだろ。それで、誰を選ぶんだ？」

「なに。もう決まってるさ。渡辺佑樹、荒恵里菜、初瀬川桃子、南谷愛里をFクラスに貰おう」

「分かった。佑樹、荒さん、初瀬川さん、南谷さんは前へ」

「さて。明日からお前らはFクラスだが、なにか言いたいことはあるか？」

「特にないです。それに、Fクラスでも僕は平気です」

「私も」

「同じく」

「全然大丈夫よ」

「よし。これからよろしく頼むぞ。んで、こちらからの二人は明日のお楽しみだ」

「分かった。ちなみに、なんで室外機を壊すんだ？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。タイミングについては、後日詳しく話す。今日はもういいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろう？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。あ、後、うちのクラスの四人をよろしく頼むぞ」

そして、平賀くんは、じゃあ、とてをあげて去っていった。

「さて、お前らー！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！と、その前に。Dクラスからきた新しいメンバーの自己紹介でもしてもらうか。じゃあ、渡辺（弟）のほうからいくか」

「分かりました。渡辺直貴の双子の弟、渡辺佑樹です。明日からよろしく願います」

こうしてみると、直貴より佑樹の方が礼儀正しいね。

「荒恵里菜です。秀吉くんと同じく演劇部に所属しています。よろしく願います」 「初瀬川桃子です。美術部に所属しています。

明日からよろしく願います」

「南谷愛里です。部活には入っていませんが、ピアノをやっています。よろしく願いますね」

『おい。めっちゃ可愛い女子が三人入ってきたぞ』

『教室がまた華やかになったな！！』

『生徒交換なんて、坂本はほんとに凄いや！』

可愛い女子が三人も入ってきたので、Fクラスの男子どもは一斉に喜びあった。

「よし。ちなみにDクラスへ行くのは柴崎と田中だ。なにか文句ある奴は、直貴がボコボコにするがあるか？」

『全然ないです！！！！』

「じゃあ、解散！」

皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。

ちなみに、直貴と豊は佑樹と瑠美は女子三人と雑談している。

「雄二、直貴、豊。僕らも帰ろうよ」

「そうだな」

「分かった。あ、佑樹も一緒に帰るからな」

「さっさと帰るか」

「あ、あのっ、坂本くん」

「ん？」

帰ろうとしているところを、姫路さんに呼び止められた（雄二が）。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本くんに聞きたいことがあるんです」

「おう。分かった」

そうこたえると、雄二は姫路さんと一緒に僕から少し離れたところで話を始めた。

……………なに、はなしてんだろう？

姫路さんは真剣に雄二の顔を見ていた。

凄く集中しているように見える。

ん？もしかして……僕は存在を認識されていない？まさか、眼中にないとか？ちくしょう！それだったら——スカート捲り放題じゃないか！！

『チャンスだぜ明久。パパッと捲っちまえよ。あんな可愛いこのスカートの中なんて、そうそう拝めるもんじゃねえぜ？』

はっ！？お前は僕のなかの悪魔！？くそっ！僕を悪の道に誘惑してきたな！舐めるなよ！僕の正義の心が負けるものか！

……………。

.....。
.....。
.....。
.....。

..... あれ？天使は？僕のなかの天使は！？ちょっと、出てきてよ！！これじゃ僕には悪の心しかないみたいじゃないか！！

「ま、元々興味があつたが、きっかけはコイツがそんな相談をしてきたってことだ」

僕が自分と戦っている、いつの間にか二人がこちらに歩いてきていた。

「あの、吉井くんがそんなことを言い出した理由って.....」

どンドン、二人の会話は続いていく。

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあつたみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつた、ってことだろ」

「いたい、なにを話しているんだろう。」

まさか、愛の告白！？

姫路さんは雄二が好きだったの！？

そうになると、なんかショックだよ.....。

胸のあたりがモヤモヤするや。

「おい明久？大丈夫か？」

「え？あ、直貴。大丈夫だよ」

「雄二たち、話が終わったみたいだぜ。帰ろうぜ」

「あ、うん。そうだね」

「瑞希！！帰るよ！！」

「あ、瑠美ちゃん！！ちょっと待っててくれませんか？」

「分かった。じゃあ、荒さん達と一緒に玄関でまってるね！！」

向こうも向こうで、帰るらしい。

「じゃ、俺達もいくか」

「そうだな」

「姫路さん！！また明日ね！！」

「はい！！また明日！！」

やっぱり、まだモヤモヤが消えないや……。

もしかして、僕……………。

まあいつか、さあ帰ろう。

ていうか、天使がでてこな——

『捲ってもいいんじゃない？』

遅いよ出てくるの！！！！僕のなかの天使！！！！

しかも、肯定してるし！！！！

第七話 僕と悪魔と生徒交換（後書き）

次回はオリキャラ紹介part2です。

オリキャラ紹介 part2 (前書き)

訂正番です

オリキャラ紹介 part 2

渡辺 佑樹 （わたなべゆうき）

身長 直貴より5？小さい

体重 直貴より5？痩せてる

見た目 テイルズオブエクシリアのジュード

髪の色、目の色は直貴と同じ

趣味 昼寝 機械いじり

特技 格闘技 陸上 料理

得意科目 化学 日本史 英語 家庭

苦手科目 数学 現代国語 古典

詳細 直貴の双子の弟で、Dクラスの生徒。

雄二の条件にのっとり、Fクラスの生徒となる。

直貴は剣道が得意だが、佑樹は柔道や空手が得意。

見た目はそんな似てないが、雰囲気は似ている。

例えば、得意科目がほぼ同じとか、行動が同じとか。

似てないところは、直貴は機械音痴なのに佑樹は機械いじりが好きとか、直貴より佑樹の方が礼儀正しいとか。はつきりいつて、弟の方が評判がいいかもしれない……………。

ちなみに直貴に双子の弟がいると知っていたのは、瑠美だけである。兄の鈍感さには呆れていて、いつか、瑠美と直貴をくつつけなくちゃと思っており、ちよくちよく瑠美にアドバイスしている。

本人いわく、『瑠美さんのような美人の女性をお姉さんと早く呼びたいです！！！』らしい。

得意科目のなかで、一番得意な化学はAクラス並の成績をもつ。

しかし、学園2位の实力を持つ兄がいるお陰で、次第にすべて（現代国語以外）の科目がAクラス並の成績を持つようになる。

苦手科目のなかで、一番苦手な教科は現代国語。

直貴の得意な科目でもあるため、直貴はめちやくちや勉強させているらしい。

召喚獣はテイルズオブエクシリアのジュードのミニ版。

格闘技をつまく使い、敵をノックダウンしていく。

瑠美とはちよつと違う技を使う。

腕輪は化学だけ使える。

色は黄緑

発動キーワードは『ドラグーン』

消費点数は200点

発動した瞬間召喚獣が輝く竜となり、あたり一面大量の火の玉をばらまく。最後は光線のようなものを出してもとの姿に戻る。

ちなみにこのときだけ、自分は竜から出る特殊な光で観察処分者となる。

荒 恵里菜（あらえりな）

身長 156?

体重 44?

胸はCカップ

見た目 鈴宮ハルヒに出てくるキヨンの妹

髪の色は青

目の色は緑

趣味 読書 音楽を聞く

特技 演劇

得意科目 現代国語 古典 英語

苦手科目 化学 数学 物理

詳細 演劇部に所属している、Dクラスの生徒。

佑樹と同じく、雄二の条件にのっとり、Fクラスの生徒となる。

演劇部に所属しており、秀吉とは知り合いである。そのため、秀吉に恋心をだしている。

見た目はキヨンの妹に似てるが、性格は心優しい少女。

困っている人はほっとけない。ちなみに、少々天然ボケのところがある。

得意科目の中で一番得意なのは現代国語。

後にAクラスレベルの成績になる予定。

苦手科目は化学。本人いわく『実験嫌い』という理由だけで苦手らしい。

過去に実験で失敗して大変なめにあつたとか。

召喚獣はロッドに白いローブにティアラという僧侶っぽい装備。

ちなみに、恵里菜はのりきではないがたまに技名を言っている。

（なぜ、技名を言って点数がひかれないかというと、瑠美が学園長と無理矢理召喚獣の特殊効果としていれたから。技名を言うのは人それぞれである）

腕輪は現代国語だけ使える。

色は赤。

発動キーワードは『フェニックス不死鳥』

使うと現在の点数からいつきに1点になる。

自分の召喚獣が不死鳥となり、敵を一撃で戦死させる。

ちなみに、恵里菜がこの腕輪を使うのはAクラス戦以降なので、ま

だ使わない。

初瀬川 桃子 （はせがわももこ）

身長 156?

体重 45?

胸はCカップ

見た目 ポニーテールでピンク色の髪
垂れ目で、色は赤

趣味 読書 絵を描く

特技 特にないですby桃子

得意科目 英語 現代国語 家庭

苦手科目 数学 化学 日本史 物理

詳細 美術部に所属しているDクラスの生徒。雄二の条件でFクラス
の生徒となる。

絵を描くのが好きで、いつもスケッチブックを持ち歩いている。
若干ボケのところがある性格。ドジッコでもあり、あらゆる場所で
転びまくる。

自分では気を付けているらしいが……………。

得意科目で一番得意なのは、英語。成績はBクラスレベル。
苦手科目のなかで一番苦手なのは、日本史。日本史だけはFクラス
レベルである。

召喚獣はスケッチブックにペンにベレー帽に学生服。
スケッチブックに書いた絵は本物となり攻撃する。

案外描くスピードは早い。
腕輪はなし。

南谷 愛里（みなみやあいり）

身長 158?

体重 絶対言わない！！by愛里
見た目 二つ結びをしていて黒髪。目の色は茶色。胸はCカップ

趣味 暇なときはいつでもピアノを弾く

特技 ピアノ 作曲や作詞

得意科目 日本史 数学 物理 家庭

苦手科目 古典 現代国語 保健体育

詳細明るくリーダーシップをもっているDクラスの生徒。

雄二の条件にのっとり、Fクラスの生徒となる。

性格に会わないが、ピアノで有名。作詞、作曲もしたことがあり、そのピアノの実力はコンクールで最優秀賞をとるほど。

得意科目で一番得意なのは日本史。実力はBクラスレベルである。

苦手科目のなかで一番苦手なのは保健体育。運動の方は得意なのだが、保健が苦手。

いわゆる、変態が苦手。

召喚獣はキーボードに音符の髪飾りに白のワンピース。キーボードから音を出して攻撃する。

弾くはやさによって、召喚獣の動きが変わる。
腕輪はなし。

第八話 僕と恐怖とお弁当（前書き）

今回の内容は……………、タイトルを見ただけでわかります
よね？（笑）

第八話 僕と恐怖とお弁当

S i d e 瑠美

現在、瑞希の家にいます!!
なぜかって？

瑞希が料理を教えてほしいと言ったから特訓中なんだよ。
んで、現在は瑞希がこれなら作れると言ったシュークリームを作っ
てもらっているの♪もちろん一人で。

え？

不安じゃないのかって？

そりゃあ.....

.....、

「あ！これを入れたら、もつと甘くなりそうです!!さつそく.....
「ストップ!!瑞希!!それは、青酸カリ!!そんなのいれたら、
私、死んじゃうよ!!!!ていうか、なんで青酸カリが置いてあるの
!?!」わ、分かりました.....」

めちやくちや不安に決まってるじゃあああああああああん
!!!!!!!!!!!!!!

今の見た!?!見たでしょ!?!

あのこ、私のこと殺すき!?!

ていうか、まじでなんで青酸カリが置いてあるの!?!

で、数分後

「できましたよ！！瑠美ちゃん！！」

シュークリームが完成した。
うん。見た目は悪くないね。

「じゃあ。いただきます」

「……………（ドキドキ）」

パクッ

「あ、意外においし——辛！？」

辛ー！

な、なにこれ！？

な、なんでシューはいいのにクリームは辛い！？

「瑠美ちゃん！？大丈夫ですか！？はい、お水です！！」

「……………（ゴクゴクゴクゴク）プハア。生き返った……………」。
瑞希。いつたい私になんの恨みが……………？」

「え！？私は別に瑠美ちゃんに恨みなんかないですよ！？」

じゃあ。なんでこんなに辛いなの……………。

チラッと台所を見ると……………。なぜか、使う必要が全くないタバスコがクリームを作るときの鍋の近くに置いてあった……………。

「これだあああああああああ！！！！！！」

「え！？」

「瑞希！！あんた、バニラエッセンスと間違えてタバスコ入れたでしょー！！」

「え！？私、タバスコをいれたんですか！？」

「だって、このクリームめちゃくちゃ辛いんだもん！！明らかに台所に置いてある、タバスコが原因だよ！！！」

「そ、そんな！ーご、ごめんなさい瑠美ちゃん！ー！」

「まったく…………。こんなじゃ、お昼のお弁当作れないじゃない……………」

「そ、そんな（泣）」

「やっぱ。私がいなくちゃ、駄目だね…………。さて、瑞希。明日みんなに食べてもらえるよう、もう作っちゃうよ」

「え？もうですか？」

「うん。おかずのいとかは私と共同作業。デザートは瑞希に任せるよ」

「え？デザートは私に作らせてくれるんですか？」

「デザートぐらいは大丈夫でしょう？あ、どうせならおかずのい何品かは一人で作ってもらうか。もちろん、やるよね？」

「はい！ー！」

「じゃあ、メニューはこんな感じで……………」

ワイワイガヤガヤ

二人で明日みんなに食べてもらう、お弁当のメニューを考えて、料理を作つて（途中、事件がおこったけど）、きれいに箱につめてその日は終了した。

でも、このときは後悔した。

あんなことを頼まなければと……………。

次の日のお昼時間

Side 明久

「さて、昼飯でも食いにいくか」

「そうだね。今日こそ、おごってね」

「おいおい明久。なに学食に行こうとしてんだ？」

「え？直貴は行かないの？」

「違う。そういう意味じゃない。今日は瑠美達がお弁当をつくってきてくれたんだぞ」

「そういえば、そんな約束をしていたな」

「頑張って二人で作ったんだからね」

「絶対おいしくできたはずです！！」

「（だと、いいんだがな……………）」

「どうした直貴？顔が真っ青だぜ？」

「い、いや、なんでもない……………」

「では、こんなところではなく屋上にいくとしようかの」

「それはいいな。じゃあ、みんな屋上に行ってくれ。俺は飲み物を買いに行く」

「あ！それならウチも行くわ！！」

みんなと話していると、もとDクラスメンバー四人がこっちに来た。

「あれ？兄ちゃん達、どこいくの？」

「お、佑樹。そうだ。お前らも一緒に屋上に行かないか？」

「え？なんで？」

「瑠美達がお弁当を作ってきてくれたんだ。一緒に食べないか？」

「ホント！？あ、でも、僕らのぶんってあるの？」

「あ、その事なら大丈夫だよ。けっこう多目に作ってきたから、佑樹達のぶんもあるよ」

「それなら。平気だね」

「私も一緒に行きます」

「私も！！」

「あたしもいただこうかな」

「じゃあ、けっこう多く飲み物を買ってこなくちゃな」

「あ、それなら私も買いに行きます」

「あたしも」

「恩に着る。じゃ、明久達は最初に行ってくれ、ちゃんと俺らのぶんを残しとけよ」

「うん。分かったよ」

こうして、雄二、島田さん、荒さん、南谷さんは飲み物を買いに行き。僕、直貴、豊、ムツツリー二、秀吉、瑠美、姫路さん、佑樹、初瀬川さんは先に屋上にいくことになった。

屋上

「さあ。さっそく食べようかー!」

「あ、そういえばシートも持ってきてあるんです。今、ひきますね」

「なんか、ピクニックみたいです」

「天気もいいからね」

姫路さんがシートをひいてくれたので僕たちはそこに座った。

真ん中には、本当に多目に作ったらしく、二段弁当が二つ置いてあった（しかも、めっちゃ豪華なお弁当箱）。

「じゃあ。開けるね」

そう言っと、瑠美は二つのお弁当箱の蓋を開けた。
なかを見ると……………、

「ダラダラダラ」

「あ、明久？よだれがすごいよ？」

凄い……………。

まず、片方のお弁当箱にはお稲荷さんとおにぎりという、主食類。もう片方には、卵焼きやタコさんウィンナー、おひたしや、ミニハンバーグや、エビフライなどおかず類が揃っていた。しかも、きれいに詰めてあるからめちゃうくちや美味しそう。

「な、なんだこのうまそうな弁当は……………」

「やべえ……………、よだれがとまんねえ……………」

「……………（ダラダラダラ）」

「美味しそうじゃの〜（キラキラ）」

「凄い！！僕の好きなものがたくさんあるや！！」

「佑樹くん。落ち着いて。こんど、料理でも教えてもらおうかな？」

みんなも、認めるほど美味しそうなお弁当。

なんか、雄二達にちゃんと残しとかなくちゃ悪いね。ていうか、絶対右ストレートが飛んでくるな。

「さあ、食べようか♪」

「いったきまーす！！（パクッ）」

「……………（パクッ）」

「あ、ずるいぞ土屋^{パクッ}」

まず、目にも止まらぬ速さで初瀬川さんがお稲荷さんを、ムツツリーニがエビフライを、豊が卵焼きを食べた。

「お、美味しい！！！！」

「ホントですか！！」

「良かった〜♪」

初瀬川さんは、美味しいとコメントを返したが、なぜか男子二人のコメントが返ってこない。
すると…………、

ボタン！！！！↑二人が倒れたおと

ブルブルブル↑倒れたまま体が震えてるおと

「キャアアアアア！？」

「ムツツリーニ！？豊！？どうしたの！？」

なぜか、二人とも倒れて、小刻みに震えだした。
しかし、二人はすぐに起き上がって、

「……………（グッ）」

「お、美味しいぞ。に、西崎、ひ、姫路……………」

ムツツリーニは親指をたて、豊は美味しいと返してくれた。
それなのに、なぜ、二人とも震えているのかな？

「あ、お口に会いました？良かったです」

「……………（サアーツ）」

姫路さんは喜んでいたが、瑠美は顔を真っ青にしていた。

「（直貴、佑樹、秀吉。今のどう思う？）」

「（どう思うと言われても……………」

「（わしはなぜ、豊とムツツリーニは倒れ、初瀬川が倒れていないのかと疑問がわいてくるのじゃ）」

「（多分、うんよく初瀬川は瑠美の作ったものを食べられたんだろ
うな。……………よし、明久）」

「（なに直貴？）」

「（俺は主食しか食わない。おかずはお前に任せた）」

「（嫌だよ！！あんなの見せられると、めちゃくちゃ不安だよ！
！！！！）」

「（大丈夫だ。多分100%中25%は瑠美が作ったものだ。安心
しろ）」

「（そんなの安心できないよ！！！！！！）」

「（それなら、わしがいいのかな）」

「（駄目だ木下！！ここは明久の木製の胃袋を信じるんだ！！！！）」

「（もう、その時点で信じられないよ！！！！！！）」

「（大丈夫じゃ。わしの鉄の胃袋を信じるんじゃ）」

「（いや、ここは明久に任せるんだ！！！！）」

「（直貴！！きさま、僕を死に追いやるつもりだな！！！！）」

まあ、そんなこんなで言い争っている、

「おい。飲み物買ってきたぞ」

「なんか、騒がしいですね」

「なにかあったのかしら？」

雄二と荒さんと南谷さんが登場。

あれ？島田さんがいない？

「お、うまそうな弁当だな（パクッ）」

「あ、雄二くんずるいです。私も（パクッ）」

「二人ともずるいわよ。あたしも（パクッ）」

「……あッ……」

ヤバイ！！雄二はともかく、荒さんと南谷さんが食べたものは！！

「あ、とても美味しいです！！」

「ほんと！！とても美味しいわ！！」

……………あれ？

もしかして、二人は瑠美が作ったものを食べたのかな？

……………ということは、

ボタン！！！！

ガタガタブルブル

手遅れだった。

「ちょ、坂本！？いったいどうしたのよ！？」

ここで島田さん登場。

ん？

視線を感じる。

チラッとみると、雄二が今言いたいことを目で僕に訴えていた。

「『毒をもつただろ』」

「『もってないよ。これが姫路さんの実力だよ』」

「『じゃあ、なんで荒と南谷は倒れてないんだ？』」

「『あの二人はうんよく、瑠美が作ったものを食べたみたいだよ』」

普段、役にたたないのがここで役に立つなんて。

「あ、足がつつてな……………」

そして、雄二は瑠美と姫路さんを悲しませないよう（おもに姫路さんを）嘘をついた。

「あはは、ダッシュで階段ののぼりおりしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情のわかっていない島田さんが不思議そうな顔をする。

ちなみに、荒さんと初瀬川さんと南谷さんは、こつちをきにしないで主食を食べている。

「あ！！なんか、主食もおかずも美味しそうね！！ウチも食べるわ！！」

え！？

ちょ、待つんだ！！島田さん！！そのタコさんウィンナーは！！！！

「いったきまーす！！（パクッ）」

「「「あああああああああ！！！！！！」」」

「（ムシヤムシヤ）うん！！美味しいわ！！！！」

「ほんと！！良かった！！（瑞希が作ったものを食べなくて）」

あれ？

またもやセーフ？

なんで女子ばっかし！？

「ほら。明久達もはやく食べなくちゃ、なくなるよ」

「……………上手い（ムシヤムシヤ）」

姫路さんは凶器を作るのが上手なんだよ。

「あれ？7個しかありません。どうしましょう」

!!!!!!

い、嫌な予感が……

「ちょうど、男子が7人いるから男子に食べてもらおうか♪」

「なんだとおおおお!!!!!!!!!!」

└
└
└
└

「ええ。私たちのぶんは？」

「また、こんどね♪」

「仕方ありませんね」

「そうね」

「いいわね。」
吉井達は

全然よくないよ!!!

「はい！！どうぞ！！明久くん！！」

すると、姫路さんになにかを渡された。

てをみると、カップゼリーみたいなものが僕の手のひらに置かれていた。

スプーンつきで。

他のメンバーもそんな状態だった。

「あ、ありがとう姫路さん……」

[illegible]

「（ゆ、雄二どうしよう）」
「（しょうがねえ。死を覚悟して食べるぞ）」
「（めちやくちゃ不安なのじゃが……………）」
「……………（コクコク）」
「（俺はまだ死にたくない……………）」
「（運命というものは残酷ですね……………）」
「（よし。みんなで一斉に食べよう）」

豊の発言に全員うなずいた。

「いくぞ……！……せーの……！……！」
「……………（パクっ……………ムシャムシャ）……………」

……………。

「……………！……………！……………！……………」

ぐはっ！？

「……………ぱあっ……………！……………！……………！……………」

全員、食べた五秒後に命という儚い花が散った。

第八話 僕と恐怖とお弁当（後書き）

誤字脱字があつたら言つてください

次回はもしかしたら、オリ展開が入ります

第九話 狙いと目的と宣戦布告

バカテスト 保健体育

第7問

問 以下の問いに答えなさい。

【女性は（ ）を迎えることで第二次成長期になり、特有の体つきになり始める】

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久・渡辺佑樹の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太・金沢豊・渡辺直貴の答え

『初潮と呼ばれる。生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するころに初潮をみるものが多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

しかも、渡辺（兄）くんが変態になると西崎さんが悲しむと思いますよ。

瑠美のコメント

直貴の変態……………。

南谷愛里の答え

『初潮（この問題をつくった教師は辞任してください）』

教師のコメント

しっかりと正解を書いてからその事書いても、効果はないですよ。

西崎瑠美の答え

『プシュー（／／／／／）↑顔を真っ赤にしながら気絶』

教師のコメント

西崎さん！？

大丈夫ですか！？

S i d e 瑠美

現在、復活した皆とお茶中です。

特に男子メンバー全員には、大量にお茶を飲ませています。

お茶には殺菌成分が含まれているので

ていうか、なんであの時瑞希におかずを作らせちゃったんだろう…

.....。

あゝ、もう！！私のバカー！！！！

美波「そついえば坂本、次の目標だけど」

雄二「ん？試召戦争のか？」

美波「うん。相手はCクラスなんだって？」

雄二「ああ。そうだ」

明久「え？Bクラスや、Aクラスとはやらないの？」

雄二「いや。Cクラスの後にBクラスとやる」

豊「Aクラスとは？」

雄二「まあ落ち着け。作戦はちゃんとあるんだ」

全員「作戦？」

雄二「ああ。まず、今の实力ではAクラスには勝てない」

珍しい.....、雄二がそんなことを言うなんて。

でも、無理はないと思う。

文月学園はAからFの六クラスから成るけど、Aクラスは格が違う。別次元だと言ってもいいらしい。

五十人のAクラスの生徒のうち、四十人はまだいいみたい。せいぜいBクラスよりも少々点数が上の普通の生徒らしいの。

でも、残り十人がヤバいみたい。ちなみに、なぜか私と直貴はもっ

とヤバいとか言われてるのよね。

まあ、今はAクラスじゃなくてFクラスだからそんなことどうだっていいけど（「」）

直貴「じゃあ。Aクラスとはやらないのか？」

雄二「もちろんやるさ。一騎討ちでな」

全員「一騎討ち？」

またもや皆と声が重なる。

このクラスってよく声が重なるよね。

恵里菜「でも、どうやって一騎討ちに持ち込むんですか？」

雄二「Bクラスを使う」

佑樹「使う？Bクラスをどうやって使うんですか？」

雄二「明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

明久「え？も、もちろん！（知らないよ……………）」

あの明久の顔……………、絶対知らないな。

瑞希「（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）」

あ、瑞希の助け舟が入った。

今の明久の顔は、なるほどと思っている顔になった。

明久「設備のランクを落とされるんだよ」

雄二「……………まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

明久「そうだね。常識だね」

その常識を、あんたは知らなかったんだよ明久。

雄二「では、上位クラスが負けた場合は？」

明久「悔しい」

雄二「ムツツリーニ、ペンチ」

明久「ややっ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

直貴「馬鹿かお前は。後、ムツツリーニは本当にペンチを用意するんじゃない」

ここで直貴がツツコミを入れた。

ていうか、ムツツリーニはどこからペンチを取り出したの？

瑞希「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

またもや瑞希のフォローが入る。

瑞希はいい子だね。

明久「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

雄二「ああ、そのシステムを利用して、Dクラスとも交渉したんだ」

愛里「じゃあ。あたし達と同じように、Bクラスから何人がFクラス生徒と交換するき？」

雄二「いや。残念ながら、生徒交換は禁止されたんだ」

瑠美「さすがにそれはダメだ。と言われてね。これから生徒交換はダメになってしまったの」

雄二「だから、Bクラスには違う交渉をする。設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

明久「ふんふん。それで？」

雄二「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

明久「なるほどね」

秀吉「じゃが、それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのさ確かじゃからな。それに――」

明久「それに？」

秀吉「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路、渡辺（兄）、西崎がいるということは既にしれわたっていることじゃろう？」

言われてみればそうだね。

FクラスがDクラスに勝ったとなると、当然その勝ち方に注目が集まる。私達の存在はもはや周知の事実だろう。そうになると相手も私達に対してなんらかの対策を練っているはず。

雄二「そのへんに関しては考えがある。心配するな。あと、もしかしたら一騎討ちでやるやつと、二体二でやるやつに別れる。一騎討ちでやるより、二体二の方がすぐ終わるはずだからな」

皆の不安とは対照的に自信満々な雄二。

豊「そういえばBクラスの前に倒す、Cクラスのことなんだが。やるということは何か理由があるのか？」

雄二「ああ。実はCクラスとやるというのは、初瀬川から頼まれたんだ」

（回想）

桃子「あの坂本くん……。ちょっといいですか？」

雄二「なんだ初瀬川？もう、Fクラスは嫌か？」

桃子「い、いえ！！そんなことではないんです」

雄二「じゃあなんだ？」

桃子「あの……、次の目標ってBクラスなんですか？」

雄二「ああ。そうだが？」

桃子「………お願いがあるんです。Bクラスより先にCクラスとやってくれませんか？」

雄二「Cクラスと？何故だ？」

桃子「実は………」

内緒話中………

雄二「なるほどな……。そういえば、学園でそんなことが噂されてたな」

桃子「あれは、噂ではありません。本当のことです」

雄二「別にやってもいいが。お前は覚悟を決めているのか？」

桃子「もちろん決めています。他の教科は微妙ですが、得意の英語で勝負を申し込めば勝てます。それに、意外に私、召喚獣の操作は上手いんですよ？」

雄二「そういえば、お前の得意教科は英語だって聞いたな」

桃子「英語もそうですが、国語も得意です」

雄二「なるほどな。だが、万が一の為に、一人助っ人を用意しとけ」

桃子「助っ人？」

雄二「ああ。万が一の為にだな」

桃子「分かりました。皆にもあとで伝えとかなくちやいきませんね」

雄二「そうだな」

〽回想終了〽

雄二「と。これがCクラスとやる理由だ」

ふん。

桃子がCクラスとやりたいって言うなんて意外だね。

あの子。大人しいから、あまり戦争が苦手そうだなって思っていたんだけど、やるときはやるみたいね。

それにしても、桃子ってCクラスとなんかあったのかな？

まあ一年のころ、誰もが驚く噂が流れていたのは覚えてるけど、内容までは覚えてないや。

桃子「で。私が一応Cクラス代表を倒すという予定なんですけど、一人だけでは戦うと危険だからもう一人連れていけって言われてるんです。そこで……………瑠美ちゃん。一緒に戦ってくれませんか？」

瑠美「うん。別にいいよ」

全員「軽っ！……！」

だって、はつきりいつてCクラス代表って嫌いなんだよね。
ああいう性格めっちゃ無理！！！！
あれ、男を見る目ないよね。

桃子「あ、ありがとございます！！！！」

瑠美「ちなみに、教科はなにでいくつもりなの？」

桃子「あ、はい。英語が国語です」

瑠美「英語でいつてくれるよね？」

桃子「え？あ、あの——『英語でいつてくれるよね？』——
——は、はい……………」

瑠美「じゃあ。英語で頑張ろう！！！！」

全員「（なに今の脅し！？背中に魔神が見えた！！！！）」

直貴「（そっぴや。瑠美は国語が苦手だったけ）」

国語で勝負なんか、お・こ・と・わ・り！！！！

雄二「じゃあ、助っ人も決まったことだし。早速、Cクラスに宣戦
布告をしてこい明久！！！！」

明久「絶対嫌だ！！！！！！」

佑樹「あ、じゃあ。僕もついていきます！！！！」

雄二「渡辺（弟）か。まあ、いいだろう。二人揃って逝ってこい！
！！！！」

佑樹「じゃあ。明久さん。行きましょう！！」

雄二「ちなみに、今日の午後に開戦と行ってこいよ」

明久「分かった」

数分後

明久達が戻ってきたけど、二人とも無事であった。
襲いかかってきたから、佑樹がボコボコにしてきたらしい。

佑樹「久しぶりに暴れましたね」

このセリフが聞こえてきたけど、あえてスルーしよう。うん。

第九話 狙いと目的と宣戦布告（後書き）

次回はCクラス戦です!!

第十話 Cクラス戦 その1（前書き）

Cクラス戦です

第十話 Cクラス戦 その1

バカテスト 生物

第八問

問 以下の問いに答えなさい

【人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい】

姫路瑞希・西崎瑠美・渡辺直貴の答え

『? 脂質 ? 炭水化物 ? タンパク質 ? ビタミン ? ミネラル』

教師のコメント

流石です。久しぶりに学園1位と2位の正解を安心しました。

吉井明久の答え

『? 砂糖 ? 塩 ? 水道水 ? 雨水 ? 湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

金沢豊の答え

『? カモミール ? レモングラス ? ペパーミント ? ハイビスカス ? ローズヒップ』

教師のコメント

それはハーブティーを作るときに使う有名なハーブです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経とちう。また、十五歳になっても初潮がないときを遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がないときを原発性無月経といい……………」』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

S i d e 明久

キンコーンカーンコーン♪

雄二「開戦だ！！！！野郎共！きつちり死んでこい！！！」

Fクラス半分『おお……………！！！！！！！！！！』

ドドドドドドド！！！！！！

午後一時丁度。

Fクラスの半分の人達が、Cクラスに向かっていった。

残ってるのはその半分と、僕、姫路さん、雄二、秀吉、ムッツリー

二、瑠美、直貴、佑樹、荒さん、初瀬川さん、南谷さんだ。

ちなみに、さつきCクラスに向かっていったメンバーの中には、豊と島田さんがいる。

雄二「残りのメンバーは突撃礼が出てくるまで、点数を補充しとけ！！！」

残りのメンバー『了解！！！！』

さて、まずCクラスを倒すための作戦を紹介してくよ。
最初は、半分のメンバー（豊と島田さんをいれた）がCクラスに向かう。

この時は長谷川先生を使い、豊と島田さんの得意な数学で勝負する。もし、数学ではなくなってしまうたら島田さんは補充をしに来る。代わりに豊がそこで勝負する。

戦力が削られていったら、次の部隊が出陣。

この時は、荒さんと秀吉、姫路さん、僕、直貴、佑樹、瑠美、初瀬川さんもついていく。

ムツツリー二と南谷さんは雄二の護衛。

メインのメンバーで、Cクラスの戦力を削っていき、目を見計らって瑠美と初瀬川さんはCクラス代表、小山友香さんのもとへいく。

このときは英語担当、遠藤先生も連れていく。

そして一気に二人でCクラス代表の首をとる。

だが、この時、Cクラスに要注意人物がいる。

一人目は佐々木隆と佐々木光という佐々木兄弟。

まあ、双子なんだけどね。

コンビネーションもばっちりらしく、二人とも英語が得意らしい。

英語が苦手な直貴を狙ってくる可能性が高いので充分注意すること。

二人目は五十嵐享弥。

数学が得意で最初の部隊にいる可能性が高い。

点数も高いので気を付けること。

三人目は林舞衣。

化学が得意で同じく最初の部隊にいる可能性が高い。

数学から化学に変わった時は気を付けること。

四人目は藤崎紗那。

英語が得意なので、小山友香の護衛につくか、最初の部隊にいるかは分からない。

英語が苦手な人達は気を付けること。

そういえば、この藤崎紗那とかいう人。

なんか、今回初瀬川さんがCクラスとやりたいとかいった理由のキーワード人物みたいなんだ。

深い理由は分からないけどね。

雄二「おい明久。お前も点数を補充しとけ。後で大変な目にあうぞ」

明久「うん。分かったよ」

とりあえず、最初の部隊は僕達が有利になるように頑張っしてほしいな。

S i d e 豊

美波「Fクラス!!! 島田美波いきます!!! 試獣^{サモン}召喚!!!」

『Fクラス 島田美波
数学 198点

V S

Cクラス モブ男A

数学 97点

& a m p ;

Cクラス モブ男B

数学 108点

モブ男A「一人Bクラス並の点数だぞ!!!」

モブ男B「そいつは構うな!!!他の連中を狙え!!!」

???「チャージバレット!!!」

バン!!!バン!!!バン!!!

二人「え?」

『Fクラス 金沢豊

数学 398点

V S

Cクラス モブ男A

数学 0点

& a m p ;

Cクラス モブ男B

数学 0点

豊「相手は一人じゃないということに気づくんだな!!!」

モブ男C「え、Aクラス並みだと!？」

女A「勝てるわけじゃない!！」

美波「今よ!!!総員突撃!！」

Fクラスメンバー

『おおおおおおお!!!!!!!』

『Fクラス 島田美波

数学 198点

Fクラス 金沢豊

数学 398点

Fクラスメンバー

数学 平均50点×12

V S

Cクラスメンバー

数学 平均98点×20

『

圧倒的に向こうの方が人数が多いが、これぐらいなら楽勝だ!!!!

豊「いっくぜー!!!エクスペードバレット!!!」

美波「はあああああ!!」

Fクラスメンバー

『どりゃあああああ!!!!!!』

Cクラスメンバー

『ギャアアアアアア!!!!!!!!』

『Fクラス

金沢豊

数学

388点

Fクラス

島田美波

数学

188点

Fクラスメンバー

数学

平均45点×12

V

S

Cクラスメンバー

数学

0点×20

『

おっしゃあ!!!!

撃破だ!!!!

豊「今のうちに前進だ!!」

Fクラスメンバー『おおおお!!!!!!』

男D「Fクラスが来たぞ!!」

???「足止めしろ!!絶対にCクラスに近づきさせるな!!!」

Cクラス近くで、12人ぐらいの人数のCクラスの生徒達がいる。
今、指示をだしたのは部隊長だろう。

男D「Fクラス覚悟!!!」

男子×11人

「「「サモン
試獣召喚!!!!」」」

女子×9人

「「「サモン
試獣召喚!!!!」」」

ちなみに、長谷川先生もついてきているので召喚フィールドからは
俺たちはでてない。
さあ、こいつらはどうだ?

「Fクラス 金沢豊

数学 388点

Fクラス 島田美波

数学 188点

Fクラスメンバー

数学 平均45点×12

V
S

Cクラス男子

数学 平均108点×11

Cクラス女子

数学 平均100点×9
」

点数は高いが、いける!!

豊「ここは俺に任せろ!!! フリーズバレット!!!」

男子×11「!?!」

女B「う、動けない!?!」

女C「腕輪を持ってないのになんで!?!」

フリーズバレットは、敵を凍らせることができるんだ。
でも、こういう効果の技は - 五点されんだよな。

豊「美波は女子を頼む!!」

美波「分かったわ!!!!」

豊「ツインバレット!!!!」

美波「とどめえええ!!!!」

俺と美波で敵に止めをさしていく。

そして、残りは男子一人、女子一人という男女が残された。
そういえば、この二人だけ俺たちと戦わなかったな。
まあ、面倒なことになる前に片付けるか。

豊「さて、この二人を倒したらFクラスへ戻るとするか」

美波「代表を倒すのは、ウチらの役目じゃないしね」

豊「さあ。早く召喚しな！」

???「舞衣……。布施先生はまだか？」

???「まだですね……………」

あつ！！来ました！！布施先生！！こちらへ来てください！！」

なに！？

すると、俺たちの後ろから化学担当の布施先生がきた。

まさかこいつら、雄二が言ってた！！

享弥「おっしやあいくぜ！！長谷川先生！！Cクラス五十嵐享弥
きます！！試獣^{サモン}召喚！！！！」

舞衣「長谷川先生！！五十嵐くんが終わったら、化学で勝負をさせてください！！」

『Cクラス 五十嵐享弥

数学 321点

』

Fクラス全員「「「な!?!?!」」」

美波「え、Aクラス並みの成績!?!」

豊「五十嵐享弥だ!?!?雄二が言っていた要注意人物じゃねえか!?!」

享弥「お前らがいく場所は補習室だ!?!?!どりゃああああああ!?!?!」

相手の召喚獣が俺と美波を通りすぎ、後ろにいたFクラスメンバーを一撃で倒していった。

鉄人「戦死者は補習室に集合!?!?!?!?!」

ここで登場鉄人。

俺と美波以外のメンバーをつれていった。
すると、

舞衣「布施先生!?!召喚許可を!?!」

布施「承認します」

舞衣「さあ。ここからは化学で勝負です!?!林舞衣。試験^{サモン}召喚です!?!」

『Cクラス 林舞衣

化学 258点

』

数学フィールドから化学フィールドに変わった。

林舞衣。こいつも雄二が言っていた要注意人物だ。

ちなみに五十嵐享弥は、召喚をしていない。

くそっ！！

こっからは明久達が来るまで足止めだ！！

美波「豊！！あれってCクラスの代表じゃない！？」

先を見ると、Cクラス代表が屋上へと続く階段を登っていく姿が見えた。

ここでは危険だから、屋上へと逃げるきか！！

豊「美波！！お前はFクラスに戻って、雄二に伝えてこい！！現在、Cクラス代表が屋上へと逃げたと！！！！後、明久達も出陣と頼んできてくれ！！！！」

美波「分かったわ！！それまで持ちこたえていなさいよ！！」

豊「任せろ！！！！」

そう言つて、美波はFクラスに戻っていった。

豊「さあ、いくか！！金沢豊いくぜ！！試獣^{サモン}召喚！！！！」

『Fクラス 金沢豊

化学 498点』

舞衣「なっ！？」

豊「残念だったな。俺も化学が得意なんだよ！！」

享弥「（こいつ。こんな点数をとっているのに、なんでさつき代表のところになかったんだ？こいつら、一体何をたくらんでいる！？）化学の点数があるやつは、舞衣の手助けをしろ！！！」

Cクラス10人くらい

「「「「サモン試獣召喚！！！！」」」」

『Cクラス10人

化学 平均108点×10』

さあやるぜ！！！！

第十話 Cクラス戦 その1（後書き）

次回もオリキャラが登場します。

誤字脱字があったら言ってください。

第十一話 Cクラス戦 その2（前書き）

今回、桃子がCクラスとやると言った理由のキーワード人物がでてきます。

第十一話 Cクラス戦 その2

Side 明久

美波「坂本！！！」

ガラッ！！

ドアを見ると、全速力で走ってきたのか、息切れの島田さんがいた。

雄二「どうした？何かあったか？」

美波「大変よ！！Cクラス代表が屋上へと逃げたわ！！」

雄二「なんだと！？」

美波「後、五十嵐享弥が出てきてウチと豊以外を全滅させたの。今は数学から化学になって、林舞衣と豊が対戦してるわ！！」

雄二「やっぱし、五十嵐享弥と林舞衣は最初にいたか。というところ、屋上へと続く階段には佐々木隆と佐々木光、藤崎紗那がいる可能性が高いな……………」

美波「早く。吉井達を出陣させて！！豊が補習室送りにさせられるわ！！」

雄二「まあ落ち着けて。西崎、初瀬川聞いたか？」

瑠美「うん。代表が屋上へと逃げたんだって?」

桃子「バカですね。屋上へと逃げても勝ち目はないのに（黒笑）」

いま一瞬だけ初瀬川さんの背後に、黒いオーラが見えたのはきのせいであろう。うん。

雄二「作戦を変えんとするか………………。全員聞け!!これから、豊の方へ行くグループと屋上へと行くグループに分ける!!だが、言っとくが代表を倒すのは西崎と初瀬川というのは変わらない!!」

雄二の説明によると、まず豊の方へ行くグループは化学と数学の点数が高い人達。

屋上へと行くグループは英語の点数が高いグループが行くらしい。そうになると、メンバーチェンジも必要になるね。

雄二「まず、豊の方へ行くグループには直貴と佑樹に指示をだしてもらう。次に屋上へと行くグループには西崎と初瀬川を屋上へと行かせるために、なんとしても階段でCクラスを撃破しろ!!」

ちなみにグループ分けはこんな感じだよ。

豊の方へ行くグループ

Fクラスメンバー10人

直貴、佑樹、須川くん

屋上へと行くグループ

Fクラスメンバー5人

荒さん、秀吉、初瀬川さん、瑠美、姫路さん、僕

教室に残るグループ

ムッツリーニ、南谷さん、島田さん（点数を補充する）

なるべく、屋上へと行くグループの方を優先するらしい。

なんか、要注意人物が三人いるみたいだからね。

雄二「さあ、お前ら覚悟はいいか！！これから戦う相手の中にはクラスレベルじゃないやつが5人いる！！注意して戦ってこい！！」

教室にいるメンバー

「おおおおお！……！」

「！！！！！！」

雄「おし！！！！出陣だ！！！」

そして、僕らも教室を出ていった。

Side
豊

舞衣「参ります!!!」

豊「いくぜ!!!」

舞衣「やあああ！！！」

豊「おらああああ！！！」

現在の状況。

林舞衣と五十嵐享弥以外のCクラスメンバーを倒した!!

って、ドラ○エか!!

おっと、自分の言葉にツツコミを入れちまった。

まあとにかく、この二人以外のCクラスメンバーは倒せたんだよ。はつきり言っただけめんどくさいんだよねこいつら。

さっきから、数学と化学を交互に変えていくんだ。

んなことしなくてもいいのによ。

すると、

ドドドドドドドド.....!!!!

遠くから(ていうか俺の後ろから)

10人ぐらいの人数が、全速力で走ってくる音が聞こえてきた。

.....っ!!!!

きたか!!!!!!

舞衣「な、なんですかあれは!？」

敵の方も驚いている。

やっぱし、あいつらか!!!!

Fクラス10人

「「「「うおおおおお!!!!!!!!」」」」

きた!!

Fクラスメンバーだ!!

享弥「もう援軍がきたのかよ!!舞衣!!交代だ!!」

舞衣「分かりました！！長谷川先生！！数学で勝負を――」

佑樹「させるかあああ！！！！布施先生。このまま、化学で勝負をさせてください！！試獣召喚！！」

Fクラスメンバー5人
「「「「「試獣召喚！！」「」「」

『Fクラス 渡辺佑樹
化学 428点

Fクラスメンバー5人
化学 平均60点×5

V S

Cクラス 林舞衣^{はやしまい}
化学 128点 ㊦

舞衣「な、なんですかあの点数は！！」
佑樹「豊の仇！！緋炎連脚！！」^{ひえんれんきやく}

豊「いや、まだ俺死んでないから！！！」

まあ、ツツコミをいれたけど。
炎にまいった回転蹴りを相手に喰らわし、一発で林舞衣の召喚獣を倒した。

享弥「くそっ！！先生数学で勝負を！！試獣召喚！！」^{サモン}

直貴「佑樹下がれ！！」

佑樹「うん！！！」

直貴「数学は俺の出番だ！！試獣召喚！！」^{サモン}

須川「俺も行く！！試獣召喚！！」^{サモン}

Fクラスメンバー5人

「「「「俺たちもだ！！試獣召喚！！」」」」^{サモン}

「Cクラス 五十嵐享弥」^{いがらしきょうや}

数学 328点

V S

Fクラス 渡辺直貴

数学 518点

Fクラス 須川亮

数学 108点

Fクラスメンバー5人

数学 平均65点×5

□

享弥「こ、こいつら。本当にFクラスかよ！？」

直貴「こいつらだって、勉強してんだよ！！！！風牙絶咬！！！！」

須川「おらおらおらああああ！！！！！！」

Fクラスメンバー5人

「「「「「どりゃあああ！！！！！！」」」」」

享弥「く、くそっ！！！！Fクラスなんかに！！！！」

勝負はついた。

直貴の風のように移動し一直線に切りつける攻撃。

須川とFクラスメンバー5人の気合いの攻撃。

俺たちの勝ちだ。

享弥「相変わらず強いな。直貴は」

直貴「享弥も。点数が上がったな」

享弥「誰のおかげで上がったっていうんだよ（笑）」

舞衣「佑樹くんも相変わらず化学は強いですね」

佑樹「待つんだ林さん。僕は他の教科も得意だからね？」

舞衣「あ。そうなんですか？ごめんなさい」

佑樹「うつ……………（泣）」

お前ら、知り合いだったのかよ。

ていうか、どんだけ知り合いがいるんだよ。

直貴「さあ。後はあいつらの方だな」

佑樹「瑠美さん達。大丈夫かな？」

Side 瑠美

モブA「Fクラスが来たぞ！！」

モブB「所詮はFクラスだ！！やっちまえ！！」

女A「先生！！召喚許可を！！！！」

遠藤「承認します」

Cクラス10人くらい「『サモン』試獣召喚！！！！」

明久「Fクラスメンバー5人は姫路さんが来るまで戦って！！！！」

明久が階段で指示を出す。ちなみに瑞希は体力があまりないので、遅れてくる。

私と桃子はある作戦の準備として、現代国語の先生と一緒に、敵に気づかれないように隠れている。

Fクラスメンバー5人

「『サモン』了解！！試獣召喚！！！！！！」

『Cクラス10人

英語 平均108点×10人

V S

Fクラス5人

英語 平均78点×5人

モブC「こ、こいつらFクラスのくせに点数が高くないか!？」

女B「なにおびえてんのよ!?!やるわよ!?!」

だけど、

キュポ!?!

Cクラス10人

「「「「えっ?」「」「」」

瑞希「お、遅れてすみません……………」

「Fクラス 姫路瑞希

英語 298点

V S

Cクラス10人

英語 0点

息切れしながらも、なんとか現地につきCクラス10人を圧倒的な

差で倒した瑞希があらわれた。

モブD「姫路瑞希だと!?!」

女C「なんでここにいるのよ!?!」

はいはい。

さっさと補習室へいって~~~~~（笑）

明久「よし。後は屋上の扉の前にいる三人だけだ!?!」

まだいたんだ…………。

ちよつとだけ除いてみる。

うん。確かに三人いるね。

二人の男子に、一人の女子が扉の前に立ち塞がっている。

だけど、一人の女子はなぜか右足と両手に包帯を巻いている。

あれ?

あのこもしかして……………、

桃子「紗那……………」

後ろで桃子がそう呟いた。

やっぱり。

桃子がCクラスとやりたいっていった理由のキーワード人物。藤崎

紗那なのね。

紗那「こつからさきはいかせません」

光「通りたいたいなら、俺達を倒しな!?!」

隆「いくぞ！！！」

隆・光「サモン試獣召喚！！！」

紗那「サモン試獣召喚です！」

明久「こっちもいくよ！！姫路さん！荒さん！秀吉！お願い！！！」

瑞希「任せてください！！！」

恵里菜「いきます！！サモン試獣召喚！！！」

秀吉「サモン試獣召喚じゃ！！！」

『Cクラス 佐々木隆ささきりゅう』
英語 289点

Cクラス 佐々木光ささきひかる
英語 278点

Cクラス 藤崎紗那ふじさやな
英語 328点

V S

Fクラス 姫路瑞希
英語 298点

Fクラス 荒恵里菜

英語 285点

Fクラス 木下秀吉

英語 132点

」

隆「一人だけ点数が少ない！！そいつを狙うぞ！！」

光「分かった！！いくぞ！！」

佐々木兄弟の召喚獣が秀吉の召喚獣を狙う。
しかし、

恵里菜「させません！！」

ここで恵里菜がロッドからシールド的なものを出して、二人の召喚獣の攻撃を防いだ。
さらに、

瑞希「てええええい！！！！」

瑞希が剣から衝撃波をだして二人の召喚獣に攻撃をした。

『Cクラス 佐々木隆

英語 289↓189点

Cクラス 佐々木光

英語 278↓178点
』

光「おい！！藤崎！！お前も攻撃しろ……………お？」

敵の一人である藤崎紗那が攻撃してこないと気づいた佐々木兄弟が後ろを向くと、

紗那「うっ……………」

隆「！！！！！！紗那！！！」

藤崎紗那が苦しそうに座り込んでいた。
そこへ佐々木隆が駆け寄る。

隆「紗那！大丈夫か！？」

紗那「う、うん。大丈夫……………」

光「もしかして、いつものあれか？」

紗那「うん……………。ごめんね迷惑かけて……………」

隆「しょうがないだろ？お前は悪くない」

紗那「この激痛さえ収まれば平気だから……………」

明久「……………。遠藤先生。フィールドを解除してください」

遠藤「わ、分かりました」

明久がそう言ったら英語のフィールドはなくなった。

桃子「紗那！！！！」

瑠美「あ、ちょ！桃子！！」

いきなり後ろから桃子が飛び出していったので、私も追いかける。

紗那「も、桃子！？あなたDクラスじゃ……………」

桃子「わけあってFクラスになったの。それより紗那！！その腕と足は！！」

紗那「うん……………。あの時の怪我だよ……………」

恵里菜「あの時の怪我？」

紗那「ちよつと事故っちゃってね……………」

桃子「……………紗那。Cクラス代表はこの先にいるんだよね？」

紗那「うん。そうだよ……………」

桃子「通らしてくれる？」

隆「はあ！？そんなの駄目に決まって——（紗那）「いいよ」おい！！紗那！！！！」

紗那「だってどっちにしろ、通ることになったみたいだからね。いいでしょ？隆」

隆「しょうがねえな……………」

桃子「ありがとう。瑠美ちゃん。いこ」

瑠美「え？あ、うん」

桃子「遠藤先生もついてきてください」

そして、現国、英語担当の先生を連れて桃子は屋上の扉を開く。

目の前にいるのは近隣部隊二人と、代表小山友香。

ガチャ

そして、桃子は屋上の扉をしめる。

桃子「Fクラス初瀬川桃子。近隣部隊二人に現国で勝負します。試
獣^{サモン}召喚」

近隣部隊二人

「「試^{サモ}獣召——ギヤアアアアアアアアアア！？」」

『Fクラス 初瀬川桃子

現代国語 248点

V S

Cクラス 近隣部隊二人

現代国語 DEAD 』

.....え？

なに今の？

桃子「やっとあなたと話すことができますね.....小山
友香！.....！」

友香「は、初瀬川桃子？な、なんであんたがここに.....！」

桃子「親友が.....、紗那が受けた辛さを思いしりなさい！！Cクラス代表小山友香に英語で勝負します！！！」

遠藤「承認します」

桃子「試験^{サモン}召喚！！！」

友香「くっ.....試験^{サモン}召喚！！！」

あれ？

なんか、勝手に進めちゃってるよこの人たち。

『Fクラス 初瀬川桃子
英語 389点

V

S

Cクラス（代表） 小山友香

英語

143点

☞

残念ながら対戦は次回だよ。
お楽しみに。
ていうか、私の出番はありますか？

第十一話 Cクラス戦 その2（後書き）

次回Cクラス戦決着！！

桃子のCクラスとやると言った理由が明らかに！！
そして、瑠美の出番はあるのか！（笑）

第十二話 Cクラス戦 その3（前書き）

今回桃子が暴走します。

第十二話 Cクラス戦 その3

Side 明久

『―――サモン試獣召喚！！！』』

扉の向こうからそんな声が聞こえてきた。

初瀬川さんとCクラス代表の勝負が始まったのだらう。

瑞希「始まりましたね……………」

恵里菜「大丈夫ですかね…………」

秀吉「大丈夫じゃろ。学園1位の实力を持つ西崎がいるのじゃからな。それに対戦科目は、初瀬川の得意な英語だと聞いたからの」

明久「でもなんか、初瀬川さん。ものすごく焦ってるような気がするんだよね…………」

紗那「……………どうして？」

四人「…………え？…………」

紗那「どうしてあなた達は、私達Cクラスと戦おうとしたんですか？本来ならBクラスと戦うつもりだったと聞きましたが……………」

恵里菜「その事なんですけど、ちょっと扉に耳を済ましてくれませんか？」

紗那「うん。いいけど……。なにかあるの？」

恵里菜「私達がCクラスとやろうと言った理由が分かりますよ」

荒さんが藤崎さんを誘導し、藤崎さんは扉に耳をかたむけた。
もし、理由を知ったら藤崎さんはどんな反応をするだろうか。

……自分の親友が、自分の仇のためにCクラスとやろうと言った理由を……。

Side 瑠美

桃子「小山友香……。私は絶対に許さない……。あなたのせいで親友が……。紗那が辛い思いをしたことを……！」

桃子の召喚獣が小山友香の召喚獣に攻撃を仕掛ける。
怒りが激しいせいか、回りを気にしてないように見える……。

友香「さっきから聞いてれば……。藤崎が辛い思いをしたってどういうことよ……！そんなの私は知らないわよ……！」

この言葉を聞いた瞬間、桃子の召喚獣が動きを止めた。

桃子「……。あれほど、最低なことをしたっていつのに覚えてないですって？……。ふざけるな……！」

そして、桃子の召喚獣が猛スピードでなにかを書き始めた。

桃子「あなたのせいで紗那はあんな怪我をおったのよ！？一年のころ、あなたが紗那の人生を狂わしたあの怪我がね……！！！」

そして、桃子の召喚獣のスケッチブックからシャボン玉が出てきた。
でも、ただのシャボン玉ではない。
中に絵が浮かんでいる。

桃子「見せてあげるわ。あなたが紗那を辛い思いにした過去をね！
！！！」

そしてシャボン玉はスクリーン並のデカさとなり、なんか映画を見る感じになった。

くっからさきは桃子と紗那の過去の出来事です

Side 桃子

紗那「桃子！！」

桃子「うわあっ！？って、紗那か……………」

いきなり後ろから紗那が飛びついてきた。
なんか機嫌がいいね。

あれ？そういえば昨日、
バレーの大会に出場できる一年生メンバーを発表されたんだっけ？

紗那「聞いて聞いて！！桃子！！あのねあのね！！」

桃子「はいはい。まずは落ち着いて深呼吸」

紗那「スーハースーハー……………」

桃子「で、なんだって？」

紗那「昨日。大会に出場できる一年生メンバーが発表されたの！！
その中で私選ばれたんだ！！」

桃子「おお！！スゴいじゃん！！おめでとう！！他にもいるの？」

紗那「うん。一年生は二人選ばれたんだ。私その他には亜梨沙も選ばれたんだ」

桃子「亜梨沙？……………ああ、鈴風亜梨沙のことね。そういえばあのこもバレー部だったけ」

紗那「後は補欠として小山友香とかいうひとでも選ばれたよ」

桃子「ああ。あのめっちゃうざったい性格悪女子？」

紗那「嫌ってるんだね……………」

桃子「当然^{キツパリ}」

はつきりいって、私は小山友香のことは嫌いというか苦手だった。
なんとなく男を見る目がないし、性格悪いし、頭もよくないくせに、
自分は頭がよいとかバカなことを思っているからね。
ああいう人とは関わらないほうがいいんだよね。

桃子「ん？ということは今日も部活なの？」

紗那「うん。大会が近いから休みはなしなんだ」

桃子「ふ〜ん。大変だね〜」

紗那「あ。授業が始まるね。早く戻ろうか」

桃子「そうだね」

そして、私達は教室に戻っていった。

S i d e 紗那

友香「藤崎さん。ちょっといい？」

話しかけてきたのは同じバレー部に所属している小山友香さん。
同じバレー部に所属しているけど、クラスが違うのでそんなに話したことがない。

紗那「なに？小山さん」

友香「ちょっと話したいことがあるんだけど、いい？」

紗那「いいけど……………」？」

そして私は小山さんについていった。
しかしこの時。

事件はおきた……………。

S i d e 桃子

桃子「ええ！？紗那が病院に入院した！？」

「???」「うん。なんか、バレー部がいつも掃除している倉庫で棒の下敷きになっていたんだって。なんとか一命は取り戻したけど、両手、右足を骨折したみたいで完全復活は難しいみたい。それで、バレーの大会にはでられないみたいだよ。代わりに補欠の人がでるみたいだけど」

桃子「そんな……………紗那……………そういえば美夏子。一番最初に発見したのはだれなの？」

美夏子「うん。話に聞いたところ一緒にいたのが小山友香とかいうひとだって」

桃子「小山友香？一緒にいたの？」

美夏子「うん。ちょうどその時小山友香はいなかったみたい」

桃子「……………分かった。ありがとう教えてくれて」

美夏子「これくらいお安いご用♪それじゃあね」

桃子「うん。じゃあね」

ガチャ。

そして、私と話していた美夏子……………白石美夏子は電話をきった。

桃子「小山友香……………。怪しいわね……………」

一緒にいたっていつ時点で怪しいや。
調べてみるか……。

あ、でもあれは禁止されてるんだっけ。
ていうか封印されてるんだった。
なにがって？

残念ながらまだ教えられないよ。
教えられるのは………あの二人の記憶が戻ってからだよ。

桃子「しょうがない。気が進まないけどあいつのところにいくか………」

私と同類のあいつのところに………。

S i d e 瑠美

ブツン

肝心なところで映像は切れた。

瑠美「桃子？なんできつたの？」

桃子「あなた達にはこの先の映像は見せられない。せめてあの二人の記憶が戻ったら見せてあげる」

瑠美「あの二人？」

桃子「さてと。小山友香。思い出したかしら」

友香「……………」

けれど、小山さんは一言も喋らない。

桃子「あの紗那の怪我は、一年前、あなたが負わせたということですね！！」

友香「っ！！！！！！」

桃子「これで言い逃れはできないわよ。皆はあなたが最初の目撃者だつて言つてた。それに、紗那の上に棒が倒れてくるときは、あなたはその場所にいなかったとも言つてた。でも、私と同類の人物の話では、あなたがわざと棒にぶつかり紗那に怪我を負わせたと言つていたわ。大会に出場できる紗那を出場させないようにして、自分が出場権を獲得するという小賢しいてを使ってね！！だから私は許さない……………、今まで頑張ってきた親友の努力を無駄にする人を！！！！」

その瞬間、シャボン玉が破裂して中から大量の針が小山友香をめがけて降ってきた。

友香「くっ……………！！！！」

『Cクラス（代表） 小山友香

143点↓43点

』

これで、次の一発が決まれば桃子の勝ちなんだけど……………

桃子「一発で終わらせない……………。もっと苦しめる。苦しめる！！！！」

いや、桃子さん？

それはフィードバックの時しか効果は出ませんよ？

ましてやマイナス点にならなくちゃ………

………って、まさか！！！！！！

桃子「あなたの点数をマイナス点にしてあげます！！！！」

友香・瑠美・遠藤先生

「「「はあ！？」「」」

瑠美「桃子やめなさい！！！！マイナス点になると、相手は大変な痛みを受けるのよ！！！！」

遠藤「初瀬川さん！！落ち着いてください！！」

桃子「止めないで！！！！こいつだけは、こいつだけはあああああああ
ああ！！！！！！」

桃子の召喚獣のスケッチブックから、大剣が飛び出した。
召喚獣はすかさず大剣をてにし、小山の召喚獣を切りつけた。

『小山友香 43点↓0点 』

本来ならばここで戦死なのだが、

桃子「まだだああああああ！！！！！！！！」

桃子の暴走は止まらないで、小山の召喚獣が消える前にまた斬りかかった。

友香「き、キャアアアアアアアアア！！！！！！」

『小山友香 0点↓ - 25点』

小山の点数がマイナスになる。

点数がマイナスになったためフィードバックとなる。
だけど痛みはマジでヤバイ。

ていっかなんで？

なんで桃子がこんなことを知ってるの！？

私と直貴が作ったルールを！！

実は私と直貴は、学園1位と2位という成績を持っているということとで、学園長から記念に試召戦争のルールをいくつか作ってもいいと言われていたの。

んで、作ったルールは、

1・現代国語、数学、化学、日本史、英語などの科目で400点以上とっているものは、召喚獣の技に技名をつけてもよい。技名をつけると、召喚獣がその技をだして攻撃をしたり、防御をしたりできる。ただし、凍結させるなどの効果がある技は - 5点される。総合科目の場合は6000点以上とっているものしか使えない。（つまり学園1位と2位しか使えない）

2・自分の点数が0点になった場合は戦死して補習室に連れていかれるが、召喚獣が消える前に相手の召喚獣に攻撃された場合、マイナス点となり - 100点になった時点で戦死する。

この時自分にフィードバックがくるので注意。

他にもあるんだけど、めんどくさいから2つだけ紹介してみたよ。

1は特に危険度はないから皆に伝えてあるんだけど、2は危険度があるので先生と学園長、私と直貴しか知らない。

それなのに、なぜ桃子が知ってるの！？
どこから情報が漏れたの！？

桃子「やああああああああああああ！！！！！！」

またもや小山の召喚獣を切りつける桃子の召喚獣。

友香「いやああああああああああああ！！！！！！！！！！」

10点 ↓ 35点

ダメ！！

もう見てられない！！！！

サモン
「試獸召喚!!!!!!」

現れる私の召喚獣。

瑠美「桃子！！落ち着きなさい！！」

そして、
 またもや小山の召喚獣を切ろうとした桃子の召喚獣をとめる。

桃子「じゃまをするなああああああ！！！！」

瑠美「くっ………！！！！しょうがない………使うきはなかったけど、
使っしかないわね！！！！」

ちなみに私の点数は

『Fクラス 西崎瑠美

英語 428点 』

だよ。

英語は普通なので。

暴走を止めるにはこの方法しかない！！！！

瑠美「腕輪発動！！キーワードは『共鳴』^{シンクロ}！！！！！！」

効果を発動すると、私は光に包まれて召喚獣の意識とつながる。

桃子「はああああああ！！！！！！」

桃子の召喚獣が襲いかかってくる。

普通の人なら避けきれないと思うけど

瑠美「まずは……………、連牙弾！！！！」

腕輪の効果で、全ての召喚獣の動きが予測出来ているので避ける。
そして、蹴りとパンチの連続攻撃を喰らわせる。

瑠美「続いて……………獅子閃光！！！！！！」

そして、私の召喚獣は虎の顔をした闘気を桃子の召喚獣に放つ。

瑠美「最後は……………天空かかと落とし！！！！！！」

そして、桃子の召喚獣に天空からのかかと落としを喰らわせる。

桃子「くっ……………」

『Fクラス 初瀬川桃子

英語 128点 』

瑠美「さあ。とどめよ!!」

私がそういつと桜の花びらが桃子の召喚獣を包んでいく。

桃子「な、なにこれ!!」

瑠美「少しは頭を冷やしてもらっわ……………。舞い踊れ桜花絢爛の花吹雪!!必殺!殺撃舞紅拳!!」

蹴りとパンチを素早く連続で決めていき、最後は空中から蹴りを落としていく。

勝負がついた。

『Fクラス 初瀬川桃子

英語 0点 』

瑠美「先生。暴走も収まったはずなのでフィールドを解除してください」

遠藤「あ、はい。わかりました」

なぜ、今までフィールドを解除しなかったかつて? 暴走状態の時にフィールドを解除してしまったら、桃子は先生に襲いかかっていたと思うからよ。

それにしても、あんなに暴走するなんて……………。
よっぽど親友が傷つけられたのが、悔しいみたいね。
とりあえず、扉の鍵を外して扉を開く。
そこには、呆然と立ち尽くしていた明久達が出た。

第十二話 Cクラス戦 その3（後書き）

Cクラス戦終了です。

次回は交渉と、直貴と瑠美の間に、ちょっとフラグがたつ話をおおくりします。

誤字脱字があったらいつてください。

第十三話 交渉と手紙とプレゼント（前書き）

今回作者が暴走しました。

みなさんブラックか豆の準備を……………（笑）

第十三話 交渉と手紙とプレゼント

バカテスト 国語

第十問

問 次の意味にふさわしい四字熟語を書きなさい

【？ 動作などがきわめて素早いこと

？小さいことを大きく言うこと】

姫路瑞希・渡辺直貴・初瀬川桃子・荒恵里菜の答え

『？ 電光石火

？ 針小棒大 』

教師のコメント

正解です。

初瀬川さんと荒さんが正解したのはビックリしました。

国語は二人の得意科目でもありましたね。

吉井明久・金沢豊・坂本雄二の答え

『？ピカ○ユウ』

教師のコメント

誰もこの技を持っているポケ○ンの名前を答えなさいと言っていないません。

西崎瑠美の答え

『?コラッ○』

教師のコメント

西崎さんまで惑わされないでください。

渡辺佑樹の答え

『?ヒ○アラ○、ヒ○ザ○など』

教師のコメント

もうツツコム気力もありません。

Side 明久

紗那「桃子!!!!!!!!!!」

藤崎さんが座り込んでいる初瀬川さんに近づく。

ちよつと僕らはあの二人の過去を聞いて啞然としていた。

そこまで詳しい内容までは知らなかったけど、藤崎さんの怪我は小山さんが原因だということに驚いているし、初瀬川さんのあの暴走

.....。

小山さんが何回も悲鳴をあげてたときは藤崎さんが泣いていた。

〈回想〉

友香『いやあああああああ!!!!!!!!!!!』

光「!!!!!!!!!!」

秀吉「また、悲鳴が聞こえてきたのじゃ……………」

瑞希「いったい、扉の向こうで何が起っているんですか……………」？」

恵里菜「桃子ちゃん……………」

紗那「もうやめてよ桃子……………。私は平気だから……………、平気だから……………！」

藤崎さんが泣いている。

親友が自分の仇をうつということを知ったときはものすごく驚いていた。

でも、今の初瀬川さんは暴走状態。

普段優しい親友が、人を傷つけるところを見たくないのだろう。

隆「紗那……………」

ここで、佐々木くん兄が藤崎さんを慰めるために自分の方へと引き寄せる。

あ、ピンク色の空間ができちゃった。

僕たちはお邪魔むしみたいだね。

ていうか、人目を気にしないということがすごいよ……………。

〜回想終了〜

まあ、こんなことがあったのだ。

雄二「さて。交渉の時間だ」

すると、いつのまにか、雄二と直貴、佑樹、豊、島田さん、ムッツリーニ、南谷さんが僕達の後ろにいた。

雄二はそう言うのと座り込んでいる小山さんに近づいた。

瑠美「痛みはだいぶ収まっているはず。話すことぐらいできると思うよ」

雄二「そうか。じゃあ、交渉といくか。小賢しいてを使って初瀬川の親友の努力を無駄にした、負け組代表さん」

友香「くっ……。何が目的なの」

雄二「まず、次回俺たちはBクラスと戦うことになっているんだが、そこである提案をおもついた」

友香「提案？」

雄二「ああ。確かお前はBクラス代表の彼女だったな。そこでだ。もし、Bクラスに何か頼まれても必ず無視しろ。絶対受け入れるな。もし、受け入れたら西崎がボコボコにしにいくから覚悟しとけ」

ちなみにこの時、全員、顔が真っ青になったのは言うまでもない。

雄二「そしてあとは……。初瀬川。お前が言え」

雄二がそう言うと、藤崎さんと何かを話していた初瀬川さんがこっちにやってきた。

桃子「私からのお願いは単純です。紗那に謝ってください」

まあ当然のことだろう。
あんなにひどいことをしたんだし、初瀬川さんの怒りがおさまるわけがない。

友香「……………分かったわ」

そういうと、小山さんは藤崎さんの方を向き……………

友香「藤崎さん。一年前はごめんなさい……………。あんな、ひどいことをしてしまつて」

謝つた。

紗那「もう平気だよ。今では、車イスを使わなくてももう歩けるし。それにね……………」

すると、藤崎さんは小山さんに近づいて小声でなにかを喋っていた。喋り終わると藤崎さんは顔を真っ赤にしている、小山さんはちょっと驚いている顔をしていた。何を話していたんだろう？

雄二「さてと。交渉のけんは話したことだし。教室に戻って明日の予定でも全員に教えるか。お前ら、戻るぞ」

Fクラスメンバー

『は……………いい』

紗那「あ、そうだ。桃子。今日は部活ないから一緒に帰ろう」

桃子「うん。じゃあ待ってるね」

そして、僕たちは教室に戻っていった。

雄二「さてとお前ら！！今日はご苦労だった。明日はBクラス戦だ！！今日の戦いよりきつくなるかもしれないが、頑張ってくれ！！それじゃあ今日は解散だ！！！！」

Fクラス生徒

『『『あざーしたーーーー！！！！！！！！』』』』

雄二が解散宣言をしたため、教室はいつものメンバーだけとなった。

豊「さて。俺らも帰るか」

明久「そうだね」

そういつて、明久、豊、雄二、佑樹、ムッツリーニ、秀吉といったメンバーが帰ろうとする。

つてあれ？

直貴は？

佑樹「あれ？兄ちゃんはどこにいったのかな？」

秀吉「そういえばいないの〜」

ムッツリーニ「…………先に帰った？」

雄二「ならしょうがないな。直貴なしで帰るか」

恵里菜「あ、秀吉くん！！一緒に帰りませんか？」

秀吉「お？恵里菜じゃったか。もちろんいいのじゃ」

恵里菜「（やった！！秀吉さんと帰れる♪）じゃあ、行きましょう
！！！」

秀吉「ということで、わしは恵里菜と帰るのじゃ。先に帰るからの」

明久「分かった。じゃあね秀吉」

秀吉「またの」

そういつて、秀吉と恵里菜は出ていった。

恵里菜って案外積極的なんだよね。

桃子「そろそろ紗那がくるかな？私も帰るね」

次に桃子が帰った。

愛里「瑞希、瑠美、美波。あたしたちも帰ろう」

美波「そうね」

瑞希「あ。私は今日は一緒に帰れないんです。ごめんなさい」

瑠美「私も今日は一緒に帰れないんだ。ごめん」

美波「そうなの？なら愛里。二人で帰ろうか」

愛里「そうね。用事があるなら仕方ないわよね。じゃあみんなまた明日ね」

その次は美波と愛里が帰っていった。

明久「僕達も帰ろうか」

豊「ていつかまじで直貴はどこにいったんだ？」

瑞希「あ、そういえば。直貴くんは職員室にいつていましたよ」

雄二「職員室？先生にでも呼ばれたのか？」

瑞希「いえ……。なんか何かを確認するといっていましたか……」

明久「何かってなに？」

瑞希「うーん。そこまで覚えていません」

豊「じゃあ。先に帰るか」

雄二「そうだな。じゃあお前らも早く帰れよ」

瑠美「うん。じゃあね」

次に男子メンバーも帰っていった。
さてと、みんないなくなったことだし。

瑠美「瑞希」

瑞希「はい？」

瑠美「話したいことってなに？」

実は瑞希に、放課後に話したいことがあると言われていたのだ。

瑞希「あ、その、実は……………」

瑠美「……………明久のこと？」

瑞希「な、なんで分かるんですか！？（／／／／／）」

図星かよ……………。

瑠美「態度で分かるよ。それでなに？告白でもするの？」

瑞希「こ、こ、告白！？（／／／／／）」

瑠美「あれ？違うの？」

瑞希「ち、違うというか。違うないというか……………（／／／／／）」

瑠美「じゃあ。告白しちゃおうよ！！！！手紙で！！！！」

瑞希「て、手紙？」

瑠美「いわゆるラブレターだね。ラブレターを書いて明久に渡せばいいんだよ！！」

瑞希「で、でも……………（／／／／／）」

瑠美「瑞希！！このまま、友達という関係でいいの！？もし、明久に彼女ができてしまったらどうするき！？」

瑞希「！！！！それは悲しいです……………」

瑠美「でしょ？だったら、今がチャンス！！さあ、手紙を書こう？」

瑞希「は、はい！！……………あ。瑠美ちゃんはいいんですか？」

瑠美「え？な、な、なんのこと？」

瑞希「とぼけないでください。瑠美ちゃんは直貴くんに告白しないでいいんですか？」

瑠美「ふえ！？そ、そりゃあ告白したいけど……………（／／／／／）」

瑞希「じゃあ。瑠美ちゃんも一緒に書きましょう？直貴くんって、けっこうもてますから瑠美ちゃんが告白する前に誰かにとられちゃいますよ？」

瑠美「書く！！書く、書く、書く！！書くう……………！！！！！！！！！！」

瑞希「切り替え早いですね！？」

瑠美「直貴を他の女にとらせるもんか！！！！さあ、書くよ瑞希！！！！」

瑞希「あ、あははは……………（苦笑）」

ちなみにこの後。

明久が戻ってきて誤魔化すのに大変だったのはまた別の話。
んで、数分後。

瑞希「じゃあ。私は帰りますね」

瑠美「あ、うん。また明日ね」

手紙をかきおわったので瑞希は先に帰った。
まあ、私もかきおわったんだけどね。
それにしても、直貴遅いな……。。
しょうがない。今日は一人で帰ろう。
そして私は教室をでていった。

S i d e 直貴

直貴「失礼しました」

そういつて俺は職員室をでる。
実はあることを調べるために職員室にいたんだ。
次のBクラス戦。
どうやら、Bクラスの代表はあの根本らしい。
これは大変なことになりそうだな。

直貴「って、やべえ。もうこんな時間かよ。早く帰らねえとな」

そういつて、ダッシュで教室に戻りダッシュで下駄箱にいき学園を
でた。

この時間だから、瑠美は帰ってるよな……。。

と思いながら角を曲がると……………」

???「は、はなして!!!!はなしてください!!!!」

そんな声が聞こえた。

近くにあった電柱に隠れ、そつと見てみると……………」

瑠美「はなしてください!!!!」

男A「いいじゃん。こんな時間に一人でトボトボ歩いてるからなんか悲しいことでもあったんでしょ?」

男B「だから、俺らと一緒に楽しいところにいこうよ」

男C「楽しすぎて朝まで返さないとと思うけどな!!」

瑠美「い、いや!!!!だ、誰か!!誰か助けて!!!!」

男A「やつべえ。めっちゃ可愛いぜこいつ」

男B「早く連れていこうぜ!!」

なんと、瑠美が男三人に囲まれて襲われていた。

一人の男が軽々しく瑠美の腕をつかんで、連れていこうとする。

男C「ていうかこの女。めっちゃめっちゃスタイル抜群じゃね?胸もでかいし」

瑠美「!!!!!!い、いや!!!!!!」

男Cが瑠美の胸を触ろうとしたその時、俺の何かがキレた。
そしてすぐさま木刀を持ち、

直貴「真空ぶつた斬り！！！！！！」

技を男三人に喰らわせた。

男三人「くはあ！？」「」

瑠美「え！？な、直貴！？」

俺は瑠美に近づき、すぐさま自分の方に引き寄せる。

直貴「ひとの彼女の体に触ってんじゃねえ！！！！このゴミカス！！！！」

瑠美「か、彼女！？（／／／／／）」

男A「な、なんだこの男！？」

男B「ていうか、今の普通の人間が使える技じゃねえぞ！？」

男C「ば、バケモのだ！！逃げろ！！！」

そういつて、男三人は逃げていった。

直貴「へ。くちほどにもねえぜ。おい瑠美。もう大丈夫だぞ」

瑠美「……………（／／／／／）」

瑠美を見ると、めちゃくちゃ顔を真っ赤にして今にでも倒れそうなぐらいだった。

直貴「瑠美！？大丈夫か！？熱でもあんのか！？」

瑠美「……………」

その瞬間、

ギューー！！！！

瑠美に抱きつかれた。

え！？

なにこの状況！？

なんで抱きつかれてんの！？

ていうか胸が、胸がああああああ！！！！

今にでも精神崩壊しそうだ。

瑠美「助けてくれてありがとう直貴……………。怖かった、怖かったよ……………」（泣）」

すると、急に瑠美は泣き始めた。

直貴「ええ！？大丈夫かよ瑠美！？」

瑠美「うう……………」（泣）」

ヤバイ。

このままだと、俺が瑠美を泣かせたようになってしまう。どうする！！どうする俺！！

このままでは俺の理性が持たない！！

あ、そういえば……………確かあそこにあつたはずだよな。

直貴「瑠美！！」

瑠美「え？」

ガシッ！！

瑠美「っ！？（／／／／／）」

直貴「ちよつとつきあえ！！」

瑠美「え！？ちょ、直貴—————！？」

俺は瑠美の手をつかみ、全速力である場所にむかった。

S i d e 瑠美

現在直貴に、て、手を掴まれたままある場所に向かっています。
しかも走って。

ていうか、手！！

なに、無意識に手を掴んでんだよ—————！！！！！！

その前に本当にどこに向かつてるんだろ？

そう思っていると、直貴はショッピングセンターに入ってしまった。
そしてある店に入った。

ここって……………、

瑠美「『c h e r r y』？」

『cherry』というのは、女の子に人気な雑貨屋。
ちなみに、ワン〇ースや〇リーチなどの商品も置いてあるので、男
の子も立ち寄っているところだ。
ついでにゲーム機が近くにあるので、休日は騒がしい。

直貴「えっと、確かこちら辺に……………」

すると、直貴はヘアゴムが売っているコーナーで何かを探していた。
何を探しているんだろう？

直貴「お！あつたあつた！！」

そして何かを手に取りこちらにやってきた。

瑠美「何かあつたの？」

直貴「瑠美。いま、お団子を二つに分けることできるか？」

瑠美「え？あ、うん。できるけど」

普段はお団子を一つにまとめている。

たまに、お団子を二つに分けているんだけどね。

今日は運よくゴムを二つ持っていたのでお団子を二つに分ける。

瑠美「できたよ」

直貴「……………（／／／／／）」

瑠美「あの……………直貴？どうしたの？」

直貴「おわっ！？い、いや、なんでもない……………（／／／／／）」

???????

直貴「ちよつと待つてくれ。買ってくるから」

すると直貴はレジに向かっていった。
いったい何を買うのかな？

直貴「おまたせ。さて、早速だけど……………瑠美。これを受け取ってくれないか？」

そういつて、直貴は包み紙を私に渡す。
いったいなんだろう？と思ひながら開けると、

瑠美「！！！！こ、これって……………」

直貴「確かお前この前これが欲しいって言つてたよな？」

入っていたのは、私がこの前欲しいって言つていたヘアゴム。スイレンの花がついているヘアゴムだった。

瑠美「これもらつていいの？」

直貴「ああ。もちろん」

瑠美「ありがとう直貴！！（／／／／／）」

直貴「……………（／／／／／）」

直貴から自分の欲しかったものを貰えるなんて!!!!絶対無くさないようにしなくちゃ!!!!

直貴「よし。帰るか」

瑠美「うん!!帰ろう!!」

そういつて直貴の腕に抱きつく。

直貴「お、おい瑠美……（////////）」

瑠美「~~~~~」

直貴「ったく……（////////）」

そうして、ショッピングセンターをでて夕暮れの道を帰っていった。

第十三話 交渉と手紙とプレゼント（後書き）

やっちゃったf（^ー^）

ついにフラグがたちました（笑）

まず紗那が小山にいった台詞はこちらです。

紗那「隆がずっとそばにいてくれるから嬉しいんだ」／／／／
／」

またまた、オリ×オリのフラグがたちました（笑）

次回はまたオリキャラ紹介です

ちなみにオリキャラはまだまだるのでお覚悟を……………（笑）

オリキャラ紹介 part3 (前書き)

Cクラス戦で出てきたオリキャラ達の紹介です

オリキャラ紹介 part 3

佐々木隆 （ささきりゅう）

身長 168?

体重 55?

見た目 ボカロのKAITO

髪の色は赤茶色

目の色は紫

趣味 入れ替わり（たまに弟の光と入れ替わりしている）

特技 サッカー

得意科目 英語 物理 数学

苦手科目 化学 国語 古典

詳細 佐々木光の双子の兄でCクラスの生徒

サッカー部に所属している。ポジションはMF

弟、光とめちやくちや似ており区別するのが難関

区別方法↓顔

隆はその区別がつかないところをネタに、たまに入れ替わりしている。

しかし、一人だけ見破れる人物がいる。

同じクラスの藤崎紗那に恋心を抱いており、いつも紗那のそばにいる。

性格はイ○ズマ○レブンの円○守のような、サッカー大好きっこ少年（笑）

サッカーに夢中になりすぎると回りに気づかなくなる。

得意科目のなかで一番得意なのが英語

点数は200点代

苦手科目のなかで一番苦手なのは化学

点数は10点代である

召喚獣は落武者の鎧に剣

佐々木光 （ささきひかる）

身長、体重、見た目、趣味、特技がすべて隆と一緒に
しかしメガネをかけている

得意科目 英語 国語 古典 日本史

苦手科目 数学 化学 物理

詳細 隆の双子の弟でCクラスの生徒

隆と同じくサッカー部に所属している

ポジションはFW

兄、隆とめちやくちや似ており区別するのが難関

しかし光はメガネをかけているので意外に簡単かも？

隆が入れ替わりしようといったときはノリで入れ替わりしているが、
本人もけっこう楽しんでる

ちなみに二人が入れ替わりしているというのが見破れる人物は藤崎
紗那だけである

自分は別に誰にも恋心は抱いていないが、隆の恋は応援している

性格は隆よりちょっとクール

しかしサッカー好きどは隆ぐらい

得意科目で一番得意なのが英語。隆と一緒に勉強していく中でどん
どん得意になっていったらしい

点数は200点代

苦手科目のなかで一番苦手なのは数学

点数は20〜30点

召喚獣も隆と同じ格好をしている

五十嵐享弥 (いがらしきょうや)

身長 164?

体重 51?

見た目 雄二が髪をおろしている姿

髪の色は茶色

目の色は赤

趣味 佐々木兄弟で遊ぶ

特技 空手

得意科目 数学 保健体育 日本史

苦手科目 英語 物理 古典

詳細 よく目の下にくまができていたので、パンダというあだ名がついているCクラスの生徒

同じクラスの佐々木兄弟と仲良しで、よくちょっかいをだして遊んでいる(というかからかっている?)

空手が得意で、瑠美には運がよければ勝てる強さ

直貴とも仲良しで数学仲間

性格はおっちょこちょいなところもあるが、誰にでも優しい
まあ嫌いなひとには厳しいが

得意科目のなかで一番得意なのが数学

点数は300点代

苦手科目のなかで一番苦手なのは英語

点数は30点代

召喚獣はアームズに空手着を装備している
攻撃方法は瑠美と同じ

藤崎紗那（ふじさきさな）

身長 161?

体重 紗那がめちゃくちや鋭い視線をおくってきているので不明（怖い）

胸はBとCの間

見た目 ミディアムで茶髪

瑞希のような目

色は黄色

趣味 人間観察

特技 バレー

得意科目 英語 数学 保健体育（運動）

苦手科目 化学 日本史 古典

詳細 バレーが大好きなCクラスの生徒

性格も明るいので誰とでも対応できる

桃子とは親友である

一年前ある事件で、右足、両手を骨折してしまった。

今はちゃんと歩けたり、手を動かしたりできるが時々痛みが増して大変なことになってしまう。

現在は包帯を巻いている。

同じクラスの佐々木隆に恋心を抱いており、痛みが増して座り込ん

でしうときは必ず隆が助けてくれる。
紗那にとってはそばにいてくれるだけで嬉しいらしい。
ちなみに両思いだということに気づいてない。

得意科目のなかで一番得意なのが英語。

点数は350点以上

苦手科目のなかで一番苦手なのは化学。

点数は20点代

召喚獣は八チマキにマントに鎧に短剣を装備している

林舞衣 （はやしまい）

身長 160?

体重 なんかさつきから怖いオーラが後ろからきているので不明
（言ったら殺される）

胸は紗那ぐらい

見た目 ベリーショートで色は黒

たれ目で目の色は藍色

趣味 読書

特技 テニス

得意科目 化学 日本史 古典

苦手科目 国語 物理 英語

詳細 テニス部に所属しているCクラスの生徒

おとなしいがしんは強くて、試召戦争になると性格が変わる

Aクラスにいる久藤望早くとうのぞみ「後に登場」と仲良し

物静かでもあるが、クラスの人は普通に親しんでる

得意科目のなかで一番得意なのが化学
点数は200点代

苦手科目のなかで一番苦手なのは国語
点数は15点

召喚獣はハンマーに鎧という装備

本人はハンマーという武器は嫌らしい

オリキャラ紹介 part3（後書き）

このメンバー達もいつかはできます（笑）
特に出てくる確率が高いのは隆と紗那です

次回はBクラス戦です

Bクラス戦で活躍するのはいつたい誰だ！！！！（笑）
そして瑠美と瑞希に魔の手が……………

第十四話 Bクラス戦 その1（前書き）

Bクラス戦です！

長いです……………。

前半、瑠美と恵里菜が暴走します。

第十四話 Bクラス戦 その1

Side 明久

明久「あゝ、づかれだゝゝゝ」

そういつて卓袱台にもたれ掛かる僕。

昨日のCクラス戦で消耗した点数を回復するため、午前中はすべてテストだった。

今日の午後はBクラス戦。

宣戦布告は荒さんがしてくれてた。

さすがに女子にはてを出せなかったみたいでボロボロではなかった。というか、荒さんの中で、糸切りばさみやニッパーなどがあつたのは見まちがいだろう。うん。

雄二「さてお前ら。今日の午後はBクラス戦だ!!各自しっかり昼食を食べ、Bクラス戦に望むように!!!!!!」

Fクラス生徒

『『『『『『『『『『『『『『『『『『!!!!!!!!!!』』』』』』』』

雄二「そういえば荒。お前が宣戦布告しにいったとき代表はいたか？」

恵里菜「いえ、いませんでした。脅して確認をとってみたんですけど、『今代表は職員室にいる』と言われました」

雄二「そ、そうか。（脅して聞いたのか!?!）」

今の荒さんの言葉は聞かなかったことにしよう。うん。

直貴「さて。俺らも昼食食いにいくか」

豊「そうするか」

瑠美「腹がへっては戦はできずともいうからね」

ん？

今日の瑠美はやけにテンションが高いぞ？

瑞希「あれ？瑠美ちゃん。髪型を変えたんですか？」

美波「あ、ほんとだ。一つのお団子が二つに別れてるわね」

瑠美「えへへ」ちょっと昨日嬉しいことがあってね」（／／／／／／／／／／）

直貴「……………（／／／／／／／／／／）」

明久「直貴？顔が赤くなってるよ？」

直貴「き、気にするな……………（／／／／／／／／／／）」

気にするなと言われても……………。

康太「……………（ツンツン）」

明久「ん？どうしたのムツツリーニ？」

康太「……証^{サツ}拠写真」

するとムツツリー二は僕に何枚かの写真を渡してきた。
見ると……………、

明久「……………！！！！！！こ、これは……………」

佑樹「どうしたんですか？吉井さん」

明久「みんな……………これを見るんだ……………！！！！！！」

そういつて僕は写真をみんなに見せる。

Fクラス生徒

『『『なっ！？これは……………！！！！！！』』』

直貴・瑠美

「ああ！？それは……………！！！！！！」

みんなは写真を見ると、一気に驚く。

実はこの写真。

昨日の帰り道、瑠美と直貴が放課後デートをしている写真なのだ。

須川「諸君……………異端者渡辺直貴の死刑の時間だ……………！！」

Fクラス生徒

『『『死刑……………！！死刑……………！！死刑……………！！』』』

直貴「ちよっ、待てよ……………これにはわけが……………！！」

明久「ああー！ー！ー！ー！この写真よく見ると、直貴が瑠美を泣かせてる！ー！」

Fクラス生徒

『『『『なんだとおお！？』『』『』』

明久「しかもプレゼントもしてる！ー！ー！ー！」

Fクラス生徒

『『『『死刑だあああああああ！ー！ー！』『』『』『』

直貴「ちっ明久！ー！てめえ！ー！ー！」

ふっ！ー！

残念だったな直貴！ー！

Dクラス戦で僕をコケにした罰だ！ー！↑まだ気にしていた

瑠美「……………ねえみんな？誰を死刑にするのかな？（黒笑）」

Fクラス生徒全員

「「「「「（ビクッ！ー！ー！）！？」」「」「」

なんだ！？

めちやくちや瑠美の背後から黒いオーラが！ー！ー！

瑠美「直貴を死刑にするですって？そんなこと……………サセナイヨ？エリナ！ー！ハサミ！ー！（黒笑）」

恵里菜「協力します！ー！（シュッ！ー！）」

直貴「はつきりいっけどお前のせいだからな明久」

雄二「これで全員点数が落ちていたらお前を死刑にするからな」

言わなければよかった。

秀吉「ところでお主ら。昼休みが終わるまであと10分しかないぞ。昼食をとらなくていいのなの？」

雄二「全員急いで食え!!!」

Fクラス生徒

『『『『 (バグバグバグ、ムシャムシャムシャ) 』』』』

雄二の一言で、全員いま持っている昼食を食べ終えた。

Side 直貴

雄二「さて。昼食も食べ終わったことだし。お前ら、総合科目テストごころうだった」

瑠美の暴走を止めるのに大変だった昼休みが終わり、いよいよこれから始まるBクラス戦の作戦をたてていた。

雄二「午後はBクラス戦に突入するが、覚悟はできているな？」

F全員『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

さっき衝撃的なことはあったがそんなにモチベーションは下がらな

い一行。

これがFクラスの魅力とも言えるのだろう。

雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は負けるわけにはいかない」

F全員『『『『ふむふむ』』』』

雄二「そこで前線部隊は姫路に指揮をとってもらい、さらには西崎にも加わってもらう。他にも荒や南谷も加わるので、お前ら！！きつちり死んでこい！！」

瑞希「が、頑張ります！！」

瑠美「みんな！！頑張ろうね！！」

恵里菜「やる時はやりますよ！！」

愛里「久しぶりに活躍が来たわ！！！！」

F前線部隊『『『『うおおおー！！！！！！！！！！』』』』

この四人が前線部隊に加わるっただけでFクラスの士気は最高潮に達していた。

まあ瑠美に近づくバカどもは、全員制裁を喰らわすけどな。って、彼氏でもない俺が言うセリフじゃないよな。

まあとにかく、今回は廊下での戦闘が鍵を握っている。

廊下で負けてしまうとFクラスに勝ち目はない。

だから、Fクラス生徒50人中40人をいきなり投入する。そして、

瑞希、瑠美、恵里菜、愛里といった主力メンバーを使い廊下を制圧していく。

今回は桃子は教室で待機らしい。

昨日暴走を起こしたので、点数がヤバいから教室で補充をしておくらしい。ついでにムツツリー二と一緒に雄二の護衛をするらしい。

キンコンカーンコン

昼休み終了のチャイムになり、ついにBクラス戦が始まった。

雄二「よし！！いつてこい！！目指すはシステムデスクだ！！！」

F全員『『『サー、イエッサー！！！！』』』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いが重要となる。俺らはほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

今回のこちらの主武器は数学。

Bクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由だ。

一気に勝負をかけたいときにはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

立会いの教師を多くして一気に駆け抜ける！

F生徒「いたぞ、Bクラスだ！」

F生徒「高橋先生を連れているぞ！」

正面を見ると向こうからゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。

人数は十人程度。

あくまで様子見といったところだろう。

F生徒「生かして帰すなーっ!!」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男
総合 1943点

V S

Fクラス 近藤吉宗
総合 764点

□

さすがBクラス。桁が違うな。

『Bクラス 金田一祐子
数学 159点

V S

Fクラス 武藤啓太
数学 69点

□

『Bクラス 里井真由子
物理 152点

V S

Fクラス 君島博
物理 77点 ㊦

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。
止めを刺される前にフォローをしないと戦力が激減してしまう。

直貴「豊は吉宗のフォローを、美波は啓太のフォローをしてくれ。
俺は博のフォローをする。木村先生。召喚許可を」

豊「任せろ！！高橋先生！！召喚許可を！！」

美波「了解！！長谷川先生！召喚許可をください！！」

先生達「」「承認します」「」

直貴・豊・美波「」「試^{サモン}獣召喚！！！！」「」

召喚許可を出されるとすぐに俺達は召喚獣をだす。

「Bクラス 野中長男
総合 1943点

V S

Fクラス 金沢豊
総合 4408点 ㊦

「Bクラス 金田一祐子
数学 159点

V S

Fクラス 島田美波

数学 318点 ㊦

『Bクラス 里井真由子
物理 152点

V S

Fクラス 渡辺直貴
物理 508点 ㊦

Bクラス連中『はあ!?!』

豊「消えろ!?!!」

美波「はああああ!?!?!!」

直貴「じゃあな!崩雷殺!?!?!」
ほうらいさつ

豊の銃で何発もつつ攻撃。美波の巨大なサーベル攻撃。俺の雷の攻撃で敵を一発でしとめた。

Bモブ男「な、なんで渡辺直貴がFクラスなんかにいるんだよ!?!」

B女子生徒「どうやって戦えっていつのよ!?!」

どうやら俺がFクラスにいますということは、しれわたってはいなか

つたらしい。

まあ、案外ラッキーだったな。
すると、

瑞希「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……………」

瑠美「瑞希大丈夫？無理しないで」

恵里菜「瑠美ちゃんは、平気なんですね……………」

愛里「恐るべし……………」

息を切らせながら瑞希がやってきた。

その両脇に案外疲れていない瑠美と、それに驚いている恵里菜と愛里がやってきた。

Bモブ男「きたぞ！！姫路瑞希だ！！」

B女子生徒「西崎瑠美もいるわ！！！」

Bモブ男「荒恵里菜と南谷愛里って、Dクラスじゃなかったか！？」

B女子生徒「なんで、Aクラス並の成績をもつやつらがくるのよ！？」

四人の登場で驚くBクラス生徒たち。
さてと、

直貴「瑞希、瑠美、恵里菜、愛里。来たばかりで悪いんだが……………」

瑞希「は、はい。行つて、きます」

瑠美「任せて。暴れてくるわ」

恵里菜「了解しました」

愛里「了解よ」

そして四人はトタトタと戦場に紛れこんでいった。

岩下「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

瑞希「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

菊入「律子、私も手伝う！」

早速勝負を挑まれる瑞希。

向こうとしては早く潰しておきたい相手なんだろう。

しかもその後ろから、もう一人Bクラスの女子が召喚を開始。

Bクラスは十人しか来ていないのに二人がかりなんて、よほど警戒しているらしい。

三人「^{サモン}試獣召喚！！！！！！」

換声に応えて現れる召喚獣たち。

敵の二体は剣と槍を構えていて、瑞希の召喚獣は大剣を構えている。

直貴「お！！瑞希は腕輪持ちなんだな！！」

瑞希「あ、はいっ。数学はけっこう解けたので」

明久「腕輪って確か……………」

瑞希の召喚獣は綺麗な腕輪をしていた。

岩下「そ、それって!？」

菊入「私達で勝てるわけじゃない!?!」

瑞希「じゃあ、いきますね」

瑞希が手を握るとそれにあわせて召喚獣が敵に左腕を向けた。

岩下「ちよつとまってよ!？」

菊入「律子!?!とにかく避けないと!?!」

大げさなぐらい横に跳ぶ敵の二体の召喚獣。その直後、瑞希の腕輪が光だし……………、

キュポ!!

岩下「キャアアアア!?!?!?!」

菊入「り、律子!?!」

左腕から光線がほとばしった瞬間、片方の召喚獣が炎に包まれた。腕輪をしているということはその召喚獣は特殊な能力をもっている

ということなんだよな。

当然、俺も腕輪をもっているけどな。

☐ Fクラス 姫路瑞希

数学
4
1
2
点

V
S

Bクラス
岩下律子

&

Bクラス
菊入真由美

189点
&
151点

瑞希「ご、ごめんなさい。これも勝負なので」

瑞希の召喚獣は、バランスを崩したもう片方の召喚獣に近づき一刀両断をして勝負をつけた。

Bモブ男「もう5人も戦死したぞ!？」

Bモブ男「なっ！？そんな馬鹿な！？」

Bモブ男「こいつら予想以上に危険だぞ!？」

Ｂクラスの残り５人に驚愕の表情が浮かぶ。

まあ無理もないだろう。

ここにいるFクラス的主力メンバーは、全員Aクラス並の成績をも

っているしな。

Bモブ男「なら、俺の得意な科目で！！高橋先生！！Fクラス金沢豊に日本史で勝負——」

明久「Fクラス吉井明久がつける！！試獣^{サモン}召喚！！」

愛里「同じくFクラス南谷愛里も参戦します！！試獣^{サモン}召喚！！」

B女子生徒「なら私はWで！！Fクラス島田美波に勝負を——」

瑠美「Fクラス西崎瑠美がうけます！！試獣^{サモン}召喚！！」

『Bクラス モブ男
日本史 158点

V S

Fクラス 吉井明久

&

Fクラス 南谷愛里

日本史 305点

&

318点

『Bクラス 女子生徒

英語W 182点

V

S

Fクラス 西崎瑠美

525点

Bクラス二人「はいっ!？」

Fクラス全員「ええ!？」

明久「どりゃあああ!！」

愛里「とどめえええ!！」

瑠美「決めます!! 天空まわしげり!!」

得意科目で豊と美波に勝負を仕掛けようとしていたBクラス二人は、あっけなく瑠美と愛里、そして明久に倒されていった。

それにしても、明久。いつのまにあんなに強くなったんだ?

愛里「明久!! あんたいつの間にそんな点数とってるの!？」

瑠美「明久!! いくらなんでもカンニングは駄目だよ!!」

明久「失礼な!! これでも日本史は得意科目であって、きちんと勉強していたんだよ!!」

なるほど。

そういや、日本史って明久の得意科目だったよな。
なんて考えていると、

Bモブ男「木村先生！！Fクラス西崎さんに物理で勝負します！！
試獣召喚！！」
サモン

はい？

いま、物理で瑠美に勝負をしようといいました？
や、やばい。

物理は確か瑠美の苦手科目……………。

『Bクラス モブ男

物理 186点

V S

Fクラス 西崎瑠美

物理 10点 』

直貴「全員瑠美の援護をしろ……………！！！！！！！！！！」

Fクラス生徒『『『『『なんですと……………！？』』』』

くっ。

このままじゃ、瑠美が戦死してしまう！！

直貴「木村先生！Fクラス渡辺直貴。参戦します！！試獣召喚！！」
サモン

『Fクラス 渡辺直貴

物理 541点 』

Bモブ男「ギャアアアアアア！」

俺に負けたBクラスの男は補習室へと連れていかれた。

愛里「全員突撃！！もう少して全滅よ！！」

瑞希「み、皆さん！！頑張ってください！！」

瑠美「いくよみんな!!!」

Fクラス全員 「うおおおー!!!」

瑞希達の指示で全員が突撃していく。

Ｂクラス生徒「くそっ！！！！中堅部隊と入れ替わりながら後退！！！！戦死だけはするな！！！！」

相手の指示が聞こえてくる。

これなら一気に下がらせていくことが出来て、目的のBクラスに釘付けにするくらいで今日の戦闘は終了するだろう。

すると更に、

恵里菜「逃がしません！！現代国語でBクラスの残りの前線部隊の
人達に勝負します！！試獣召喚！！」
サモン

恵里菜が逃げていこうとした残りの前線部隊二人を、現代国語のフールドに閉じ込め、後退させないようにした。

Bクラス男子生徒「くそっ！！！！試獸召喚！！！」

Bクラス女子生徒「やるしかないわね！！試獣召喚^{サモン}！！」

秀吉「わしも参戦するのじゃ！！試獣召喚^{サモン}！！」

『Bクラス男子生徒

&

Bクラス女子生徒

現代国語 185点&165点

V

S

Fクラス 荒恵里菜

&

Fクラス 木下秀吉

現代国語 412点&402点

『

お！！

二人とも400点オーバーか。

恵里菜「それじゃあ、さようなら！！セイクリッドシャイン！！」

秀吉「わしをなめるではない！！風斬月水晶^{ふうざんげつすいしょう}！！！！」

恵里菜の光の爆発（的なもの）攻撃。

秀吉の水に閉じ込めて、風のように敵を切り裂いていく攻撃でBクラス前線部隊はいなくなつた。

B女子生徒「ぜ、前線部隊があっけなく倒されたわよ！？」

???「怯むな!!全員突撃しろ!!!」

???「得意科目で攻撃していつて!!!教師の準備はできてるよ!!」

Bクラスの中堅部隊からそんな声が聞こえてくる。

多分今指示をだしたのは、Bクラスの幹部できなやつらだろう。

Cクラスと同じように、Bクラスにも要注意人物がいるというのは雄二からきいている。

あまり、詳しくは聞かなかったけど名前は確か……………

……、
せがわみず

・瀬川実鈴

しろいしみかこ

・白石美夏子

ふじたいき

・藤田大樹

つきさわせい

・月沢聖華

という四人だ。

今指示を出していたのは、藤田大樹と月沢聖華だろう。
さてと、

直貴「明久。秀吉。豊。佑樹。俺らは一旦教室に戻るぞ」

明久「えっ?どうして?」

豊「なんかあるのか?」

佑樹「……………そういえば、Bクラス代表はたしか……………」

秀吉「“根本恭二”じゃったな……………」

直貴「桃子とムッツリーニ、そして他のメンバーもいるが一応戻るぞ。あいつのことだから、何を企んでるか分からないからな」

ということ、この場を瑠美達に任せ俺らは教室へと戻っていった。

第十四話 Bクラス戦 その1（後書き）

次回はその2になります。

第十五話 Bクラス戦 その2（前書き）

Bクラス戦その2です。

微妙に直貴の過去と瑠美の過去につながる場面がいられています。
後半は……………またやってしまった……………（苦笑）

第十五話 Bクラス戦 その2

Side直貴

豊「……………うわ、こりゃ酷いな」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

佑樹「卑怯、ですね」

教室に引き返した俺らを迎えたのは、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープや消しゴムだった。

明久「酷いね。これじゃ補給がままならない」

秀吉「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

くそつ。器の小さいやつだ。

雄二「あまり気にするな。修復には時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

明久「雄二がそう言うならいいけど」

直貴「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのに気づかなかったんだ？」

昼休みまではこんなことはされていなかったから、戦闘開始から今までの間にやられた嫌がらせだろう。

でも、それなら教室にいたはずの雄二と他のメンバーが気づかないわけがない。

雄二「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

佑樹「協定ですか？」

雄二「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

明久「それ。承諾したの？」

雄二「そうだ」

豊「でも、体力勝負に持ち込んだ方が俺らとしては有利なんじゃないか？」

雄二「姫路以外は、な」

そういえばそうだな。

瑞希は瑠美と違って体力がない。

逆に瑠美は、学園1位という座を持ちながらも運動面でも素晴らしい活躍をしている。

運動では瑠美は空手が一番得意なはずだと思っている読者も多いことだろう。

しかし瑠美は、空手ではなく水泳で活躍をしている。実力は全国1位の實力。学園の水泳部には所属しないで、スイミングクラブで泳いでいる。

4 泳法（バタフライ、背泳ぎ、平泳ぎ、クロール）の選手で長距離担当でありながらも短距離もはやい。

ちなみに瑠美の持ちタイムはこんな感じだ。

5 0 m バタフライ

2 8 : 5 6

5 0 m 背泳ぎ

3 0 : 2 1

5 0 m 平泳ぎ

3 4 : 6 2

5 0 m クロール

2 5 : 3 3

誰にも真似ができない、超次元のタイムである。

雄二「あいつらを教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

佑樹「まあもう。前線部隊は撃破していますけどね」

雄二「どうせなら本隊まで片付けようと思ったが、俺達はまだ完璧に点数が戻ったわけじゃない。個人個人の戦闘力が戻らない場合、西崎や姫路、直貴や豊にも影響がでてる。さすがにこの四人だけには任せることはしないけどな」

直貴「だから受けたのか？全員が万全の態勢で勝負できるように」

雄二「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合がいい」

明久「……………ならいいんだけどね」

直貴「どうした明久？なんか不安なことでもあるのか？」

明久「いや……………。あの根本くんがこんなに甘いことをするのか
って思ってた……………」

直貴「安心しろ。俺もあの根本がこの協定を絶対破るという確信は
している。だが、いくらなんでもそれは無理なことだ」

雄二「直貴のいう通りだ。Cクラス戦後に、俺達はある契約をして
いるんだ。根本が何か頼んできてもCクラスの代表は断るだろう」

明久「それもそうかな……………」

直貴「さてと。はやく戻るか」

佑樹「部隊がどうなっているか不安ですからね」

秀吉「ならはやく行くとするかのう」

豊「ということで先に行くぜ」

そう言って、豊と秀吉は出ていく。

直貴「よし。行くぞ明久、佑樹」

佑樹「うん」

明久「了解。じゃあ後はたのんだよ雄二」

雄二「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

手を挙げる雄二に背を向け、豊達に追い付く。

直貴「さて、自分たちの部隊に戻るとするか」

佑樹「そうだね。皆さん、頑張りましょう!」

明久「戦死だけはしないようにね! みんな!」

全員『その言葉はお前にそのまま返す!』

明久「ひどっ!」

そして、俺達は自分たちの部隊に戻っていく。

直貴「戦況はどうだ？」

F生徒「西崎さんのお陰でとてもこちらのほうが有利だ。この調子なら、一気に教室に押し込められる」

佑樹「僕らも部隊にもどりましょう。兄さん!」

秀吉「もうすぐ4時になってしまっぞい」

直貴「よし。佑樹は化学を中心に、秀吉は荒と一緒に現代国語で攻めてくれ!」

佑樹「了解!!」

秀吉「任せるのじゃ!!」

佑樹と秀吉は一気に戦場へと向かっていく。
すると、

???「……………渡辺直貴だな？」

俺の後ろから男子と思われる声が聞こえてきた。
振り替えると、予想通り。

どこから出てきたのか分からないが、身長はだいたい佑樹ぐらい。
漆黒に染まっている短い髪に青の瞳。女子がみたら、そっこう囲ま
れるだろう。という美少年が立っていた。

直貴「誰だお前……………？文月学園の生徒ではないよな？」

???「その通りだ。だが、いつかはこの学園の生徒となる」

直貴「なぜ、俺の名前を知っている。そして俺になんのような？」

???「……………。やっぱり過去の記憶はなくしてるか……………。
まあいいだろう。俺はお前にこれから起こる出来事を教えにきただ
けだ」

直貴「?どういうことだ」

???「渡辺直貴。これから、お前の大切な人物が永遠に苦しんで
いくだろう。そして、最後には失う……………」

直貴「俺の大切な人物が永遠に苦しむだと？どういう意味だ？」

「???」そしてお前の回りには、お前の過去の記憶に関連する闇が現れるだろう。その時この世界は破滅する」

直貴「！？なんだと!？」

「???」止めたければ、光の姫、天界の姫、天界の王子、8人の使者及び魔法使いを探すことだな」

そう言つて、怪しげな男は立ち去ろうとする。

直貴「ま、待て!!!!」

だが、俺はその男の腕をつかみ止める。

「???」なんだ？」

直貴「お前は俺の過去を知っているのか!?そして、光の姫とか天界の姫とかを探しだせってどういう意味なんだよ!?お前は一体何者なんだ!!!!」

「???」.....。答えはこの戦争が終わるときにでてくるはずだ」

直貴「試召戦争が終わるときに?」

「???」試召戦争が終わるとき、8人の魔法使い達が姿を現すことだろう。そして、奴等も目覚めるはずだ。そして俺とも会うことに

なるだろう……………」

直貴「?????」

「???」まあ、それまでの間。光の姫、天界の姫を天界の王子とともに守っていることだな。渡辺直貴……………いや、光と闇の王子ハデス・セスタスよ」

そう言つて、怪しげな男は消えていった。
はつきりいうと、俺は過去の記憶がない。

でもあいつが言っていた、俺の過去の記憶に関連する闇が現れるだと? 一体どういう意味なんだよ……………。
ていうか、最後にいい放ったハデス・セスタスって、誰のことなんだよ。

すると、何故か頭に変な記憶が流れ込んできた。

「ハデスはずっと、私のそばにいらんだからね!!!!!!」

……………なんだこの記憶?
更にまた記憶が流れ込んできた。

「ハデスはルナを大切に出来るのか?」

「うるせえよ。クルス。お前の知ったこっちゃねえよ」

「ハデスさん……………」

「気にするなフィーラ。所詮はハデスだからな」

ハデス? ルナ? クルス? フィーラ?

なんだよこの記憶。
ていうか、なんで。

直貴「俺と瑠美、明久と瑞希のにた人物が出てくんだよ……………」

だがその瞬間、

直貴「……………！？くっ……………」

激しい頭痛に襲われ俺は気を失った。

S i d e 瑠美

現在4時です。

今は協定通り休戦中です。

雄二の作戦通り、敵を教室に押し込めるところまで行って。休戦となりました。

だけど今のFクラスは大変なことになっています。

一つ目は。何故か教室に戻ってきたとき明久が誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れていたのだ。理由は簡単。明久が悪いという理由です。

どうやら、明久達の部隊は美波が指揮をとっていたみたいなのです。ですが、美波が人質になってしまったみたいなんです。

明久達はすぐに救出に向かいました。救出に成功しましたが、どうやら美波を偽物だと勘違いしてしまいこうなったというわけです。ちなみに豊にも怪我があります。

そして二つ目。私が教室に戻ろうとして引き返したら、直貴が倒れ

そう言つて一部の人は帰つた。
残っているのはいつものメンバー。

雄二「瑠美。直貴はどうだ？」

瑠美「まだ目を覚まさないわ……………」

瑞希「大丈夫でしょうか直貴くん……………」

明久「あまり直貴つて倒れないイメージがあるんだけどな」

みなでいろいろ喋っていると、

直貴「ん……………？ここはどこだ？」

直貴が目をさました。

豊「直貴！！」

恵里菜「目をさましたんですね！！」

直貴「な、なんか心配かけちまつたみたいだな……………」

佑樹「それは当然ですよ！！兄さん。廊下に倒れていたんですもん！！」

美波「何かあつたの？」

直貴「うゝん。……………ダメだ。
思い出せねえ」

秀吉「でも無事でよかったのじゃ」

直貴「ところで戦況は？」

雄二「今は協定通り休戦中だ。ちゃんと教室に押し込めて終了した。続きは明日の朝となる。ちゃんとそれまでに体調を治しておけよ？」

直貴「ああ」

雄二「じゃあ。後は二人で仲良くな。行くぞお前ら」

瑠美以外「」「」「了解」「」

直貴「はっ？二人……………って、瑠美！
？なんで抱きついてんだ！？」

瑠美「直貴のばか……………！！！！！！（号泣）」

ポカポカ↑瑠美が直貴を叩いている音

直貴「痛い、痛い！！ちょ、待って！！！！」

瑠美「うえ……………ひっぐ！！し、心配したんだよ！！？（号泣）」

直貴「分かった分かった！！！！分かったから叩くのやめてくれ！！！！」

瑠美「ばか……………！！！！！！（号泣）」

泣きながら叩いていて、叩くのをやめない私に直貴は……………、

直貴「ああもう！！！落ち着けて！！！！（グイッ！）」

瑠美「！？（ポフッ！）」

私の腕を引っ張り、抱き締めてきた！！！

瑠美「~~~~！！？（/////////）」↑声にならない叫び

直貴「落ち着いたか？」

瑠美「（コクン）/////////」↑赤面しながら頷く

ヤバイヤバイ！！

心臓がヤバイ！！！！

直貴「心配させたのは悪かったって。ごめんな？」

瑠美「わ、分かったから。そろそろ離して？（/////////）」

↑涙目＋上目遣い＋赤面顔

直貴「！！！！！！（/////////）」

上目遣いをする、直貴は顔をめちゃくちゃ真っ赤にした。
そして離してくれた。

瑠美「……………（/////////）」

直貴「……………（/////////）」

………気まずい雰囲気。

直貴「か、帰るか……？（／／／／／）」

瑠美「そ、そうだね………（／／／／／）」

そして帰るためにカバンを持つてくる。

中に筆記用具をいれるため、チャックをあけると………

瑠美「！！！！！！（う、うそ………）」

何故か中に入っていた直貴に告白するための手紙と、昨日もらったプレゼントがなくなっていた………。

瑠美「（いったいどこに！！！！！！）」

直貴「どうした瑠美？帰るぞ」

瑠美「あ、うん（家に置いてきたのかな？）」

不安はあるけど帰ることにした。

教室のドアをあけると、

明久達「あっ………」

直貴・瑠美「えっ？………」

何故か明久達がいた。

直貴「までコラー！！！！（／／／／／）」

直貴の気迫で全員逃げていった。

私もはやく追い付かなくちゃ！！！！

そして、教室をでた。

S i d e o u t

???「で？いったいどういことなのよ裕斗」

裕斗と呼ばれた少年

「なんのことだ？」

???「とぼけるな。なぜ、直貴にあんなことを教えた」

裕斗「一つだけお前らにも教えところ。今、お前達が通っている文月学園。あそこに奴等がくる」

???「なんですって!？」

???「もう攻めてくるのか？」

裕斗「時を調べてみた。そしたらそんなことが出てきた」

???「奴等は確実に、光の姫と天界の姫を狙っているだろう」

???「文月学園に攻めてこられたら、関係ない人にも被害が加わるわね」

裕斗「そうゆうこと。だからあの四人には早く過去の記憶を思い出してもらわなくちゃね」

???「私たちも全力でサポートしなくちゃね」

裕斗「よろしく頼むよ。佑樹、亜梨沙、桃子、隆、光、紗那、美夏子」

佑樹（?）「俺は兄貴のサポートをしなくちゃな」

桃子（?）「私は瑠美を見張ってなくちゃ」

亜梨沙（?）「私はまだ出番はないから……」

紗那（?）「私は姫路瑞希だね」

隆（?）「俺と光は明久だな」

光（?）「その情報を美夏子に渡せばいいんだな」

美夏子（?）「私は情報を集計するかかりだからね」

裕斗「絶対に四人の記憶をよみがえらせるんだ。瑠美と直貴、そして明久と瑞希の記憶を！」

第十五話 Bクラス戦 その2（後書き）

最後に出てきた人たちの中で、これから登場する人が三人います。

最後に出てきた人たちが、直貴と瑠美、そして明久と瑞希の過去に繋がっています。

過去編はまだ書きませんが……………。

第十六話

Bクラス戦

その3（前書き）

その3です。

第十六話 Bクラス戦 その3

Side 明久

明久「あ、おはよう直貴、佑樹」

直貴「よつ。明久」

佑樹「おはようございます。明久さん」

いつもの登校時間。今日は遅刻しないでこれた。

下駄箱で僕のおさ馴染み直貴とその弟、佑樹と会う。

直貴は敬語なんて使わないのに、佑樹はめちやくちゃ礼儀正しい。けっこう、区別がはつきりつく双子だ。でも、僕はあるおかしな点に気づいた。

明久「あれ？瑠美は？」

そう。いつもならこの双子とともに瑠美も登校してくるはずなのだ。FFF団が見たら、すかさずこの双子を死刑にするはずだろう。

直貴「ああ。なんか寝坊したのか分からないが『先に行つてて』と言われたから、先に登校してきたんだ」

佑樹「瑠美さんが寝坊するなんて珍しいですよね」

佑樹の言うことは分かるかもしれない。学園1位という座を持つ彼女がそんなことをするはずがないと誰もが思うはずだ。

直貴「それにしても明久。ちゃんと勉強をしてきたんだろうな？」

明久「当然さ！！」

直貴「ほう。それは感心だな。ちゃんと『日本史』以外をやってきたとは」

え？

明久「直貴さん？今、なんて……………」

直貴「ちゃんと、得意科目以外をやってきたんだな？」

明久「……………（ダラダラ）」

佑樹「その顔。日本史しかやってきてませんね？」

明久「（ギクツ！）な、なにを言っているのさ！！ちゃ、ちゃんと日本史以外やってきて（直貴）「正直に言わなくちゃ、俺の真空ぶったぎりと、佑樹の虎牙^{こがきだん}激弾を喰らわせるぞ」やってきておりません」

さすがに痛い目にはあいたくない。

直貴「はあ……………。やっぱりな」

佑樹「兄さんの予想通りでしたね」

直貴「明久。お前、今日は日本史の勝負以外はうけるなよ」

明久「分かつてるよ……………」

そんなことを話しているうちに教室の目の前にきていた。
扉をあけると、

F生徒『『異端者には死を!!!!!!!!!!』』』

爽やかな朝には似合わない、デスボイスが響いた。

須川「諸君！！異端者渡辺直貴の死刑の時間だ!!!!!!!!」

F生徒『『死刑!!!!!!!!!!』』』

直貴「何でだよ!!!!!!!!」

秀吉「すまんのじゃ直貴!!」

康太「……………隠しきれなかった……………」

そういつてムツツリーニは、昨日甘い展開を出していた直貴と瑠美のビリビリに破かれた写真をだす。

直貴「ちっ。しょうがねえ。Bクラスの前にこいつらを倒すか」

佑樹「兄さん。僕も手伝いますよ」

明久「僕も手伝うよ」

こう見えても、瑠美に格闘技を教えてもらっているんだ。

直貴「（チャッ）さあ、かかってこいお前ら！！」↑木刀を取り出す

FFF団『『『『『異端者には死を！！！！』』』』』

（数分後）

直貴「弱いなこいつら」

佑樹「全然相手にならないですね兄さん」

僕達三人で倒したFFF団は積み重なっていた。

雄二「朝から元気だな」

と、ここで登場。Fクラス代表。

直貴「いったいこいつら。どうやって写真を見つけたんだ？」

雄二「ああ。それは俺が写真をあげたんだ」

直貴「恵里菜！！！！カッターを貸してくれ！！」

雄二「まてまて冗談だ！！！！あと、マジで荒はカッターを用意するな！！！！てか、なんで持ってたんだ！？」

このごろ荒さんが、Fクラスの連中と同じ性格になっているような気がする。

雄二「ところで直貴。西崎はどうした？」

直貴「寝坊だだよ」

雄二「ほう。意外だな」

直貴「この時間だから遅刻か？」

すると、

ガラガラガラガラ

瑠美「はあ、はあ、はあ……………、お、おはよう、みんな……………」

息切れしながらも、みんなにちゃんと挨拶する瑠美がやってきた。

直貴「おう。おはよう瑠美。いったい朝はどうしたんだ？」

瑠美「ちょ、ちよっと、ね……………」

なんか瑠美。

焦っているようにみえる……………。

布施「みなさん席についてください。HRを始めますよ」

瑠美の次に先生が入ってきて、HRの時間になった。

Side 瑠美

やっぱり家にもないし、机のなかにもない。
とても大事なもののなに……………。

いたいどこに……。

すると、瑞希が泣きそうな顔をしてこちらへやってきた。

瑞希「瑠美ちゃん……………」

瑠美「どうしたの？瑞希」

瑞希「これを見てください……………」

すると、瑞希は私に何か書いてある紙を渡してきた。

瑠美「！……こ、これは……………」

書いてあった内容は……………」

『姫路瑞希、西崎瑠美。お前ら二人の大切なものは俺が預かっている。返してほしければ、今日の戦争に参加するな。もし守れなかった場合、手紙はビリビリに破き、西崎のもう一つ大切なものは燃やして捨てる。あと西崎は戦争中、俺のもとへとこい。 b y
根本恭二』

Bクラス代表が書いた、脅迫状であつた……。

瑞希「朝、下駄箱に入っていたんです……………。どうしましょう瑠美ちゃん……………」

瑠美「瑞希は待機しといて、戦争には私だけが参加する」

瑞希「で、でも、そしたら瑠美ちゃんのものが……………」

瑠美「大丈夫。どっちにしろ、戦争中、根本と話すことになるから。その時に取り返してくるよ」

瑞希「で、でも……………」

瑠美「いい？絶対、参加しちゃだめだからね？」

瑞希「は、はい……………」

私は別に平気……………。瑞希の大切なものを取り返すためには、私が犠牲にならなくちゃ。

S i d e 直貴

秀吉「ドアと壁をうまく使うのじゃー！戦線を拡大させるではないぞー！」

秀吉の指示がとぶ。

午前9時。Bクラス戦が開戦した。俺達は昨日中断された、Bクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二いわく『敵を教室にとじこめる』とのこと。

まあ恵里菜と愛里、佑樹と豊など、Aクラス並の成績をもつ奴等がいるから安心なのだが、ここで問題が発生。

主力メンバーでもある、瑠美と瑞希が参加してこないのだ。瑠美はちらほらと参加しているが、瑞希はまったく参加しない。しかも、なにやら困っているようで今すぐ泣きそうな顔をしている。

F生徒「左側入り口押し戻されています！」

佑樹「兄さん！！どうやら、布施先生が出てこれないように、Bクラスの生徒達が布施先生を閉じ込めているみたいです！今は、科学から古典に変わっています！」

豊「古典だと、俺と佑樹は勝負にならない！！援護をしてくれ！」

先ほど左側は科学のフィールドだった。佑樹と豊に指示をとつてもらうためだ。だが、今は古典のフィールド。佑樹は科学じゃなくちゃ意味ないし、豊も帰国子女でもあるため、古典は苦手らしい。しょうがないか…………。

直貴「瑞希！！左側の援護をしてくれ！」

瑞希「え！？あ、あの……………。（瑠美）「わ、私がいく！！試獣^サモン召喚！！」」

泣きそうになっている瑞希の代わりに、少し慌てている瑠美が召喚した。

しかし瑠美も攻撃ではなく防御ばかり。

結局、恵里菜が援護し瑠美は瑞希のもとへと戻ってきた。

ついでに明久も、瑞希の様子がおかしいことに気づいたのか、こちらへやってきた。

直貴「瑞希。瑠美。いったいどうしたんだ？」

明久「また、体調でも悪いの？」

瑞希「だ、大丈夫ですよ」

瑠美「う、うん。瑞希の言う通りだよ」

直貴「そうだとしても、明らかにおかしいぞ。何かあったのか？」

瑞希「う……………」

すると、

瑠美「……………!!」

瑠美がBクラスの教室を見て、驚きの表情をした。

瑠美「ご、ごめん。私、ちょっと……………」

といって、瑠美はFクラスに戻るための廊下を駆けていった。

瑞希「……………」

瑞希はずっとうつむいたまま。

……………これはなにかあるな。

明久「姫路さん」

瑞希「は、はい？」

明久「具合が悪そうだから、保健室で休んでた方がいいよ。あとのことは僕達に任せて？」

瑞希「で、でも……………」

直貴「ここは明久の言う通りにしろ。瑞希」

瑞希「……………はい……………。ごめんなさい……………」

そういつて瑞希は保健室へと向かっていった。

直貴「明久。瑠美を追いかけるぞ」

明久「うん」

豊にこの場を任せ、瑠美を追いかける。

瑠美は四階に上がる階段のフロアにいた。

明久「あ、る……………（直貴）「静かにしろ明久」えっ？」

直貴「瑠美の目の前に誰がいる……………」

そして、ちらつと顔をだす。

あれは……………

明久「根本恭二……………」

そう。瑠美の目の前にいたのは、Bクラス代表、根本恭二だった。そして、二人の会話が聞こえてくる。

瑠美「その手紙を返して」

根本「嫌だね。これは保証がわりとして持っているんだ」

瑠美「いいから返しなさい！！瑞希が書いた手紙を！！」

根本「お？お前が書いた手紙はいいのか？」

瑠美「どうせなら、ヘアゴムも返してほしいけどね……………」

根本「ヘアゴム？ああ。手紙と一緒に大切にしまってあったやつだな」

瑠美「返して。私の大切なものなんだから！！」

！！！！！！

ヘアゴム……………？

まさか、ヘアゴムって俺があげたやつか？

根本「全て返してあげてもいいが……………条件がある」

瑠美「条件？」

根本「ああ。簡単な条件だ。西崎瑠美。お前……………俺の彼女となれ」

瑠美「はあ！？あんた、彼女いるじゃない！！」

根本「あんなやつどうだっていい。学園の美少女を彼女にするなんて。なかなかできないからな」

瑠美「！！！！さ、触らないで！！！！」

根本「ちつ……………、まあいいだろう。お前がこの条件に承認しない場合は、姫路瑞希とお前の大切なものを全て、粉々にしてやるよ！

直貴「瑠美！！！！」

すぐ瑠美に駆け寄る。

明久「直貴。瑠美の容態は？」

直貴「別に異常はない。でもなんで急に……………」

明久「ともかく。どうするの直貴？ちなみに、僕は姫路さんのために根本をぶっ潰すけど？」

直貴「俺もぶっ潰す。その前に瑠美をなんとかしないとな」

明久「保健室に連れていったら？」

直貴「でも、戦争もどうなってるか気になるからな……………」

すると、

隆「お？そこにいるのは……………」

光「明久と直貴じゃないか」

紗那「どうしたの二人とも？」

俺たちと前に戦ったCクラス生徒、隆、光、紗那が声をかけてきた。

明久「隆に光に藤崎さん。君たちこそどうして」

紗那「先生を呼びにいかうとして、たまたま通りすぎたの。で、どうしたの？」

明久「実は……」

―事情説明中―

隆「それなら俺たちが運んでやるよ」

明久「え？いいの？」

光「大丈夫大丈夫。お前たちにはやることあるだろう？」

紗那「困ったときはお互いさま」

直貴「じゃあお願いするな」

隆「おう！！任せとけ！」

紗那「とりあえず、直貴達はもういったほうがいいよ」

明久「そうするよ！！いこう直貴！！」

直貴「ああ！！隆、光、紗那！！ありがとな！！さあ行くぞ明久！！」

明久・直貴

「「眉やろつをぶつ潰しに！！！！！！！！」」

さあ。覚悟している根本！！

俺たちの……好きな人を泣かした罪は重いぞ！！

Side 紗那

いったね……………。

さてと、

紗那「これでよかったの？裕斗」

そして、私達三人の目の前に漆黒の短い髪に、藍色の目、不思議の国のアリスに出てくるウサギが着ている格好をしている少年が出てきた。

裕斗「うん。完璧だよ」

隆「ていうか、直貴にバレなくて良かったぜ。俺達が気絶させたと
いうことをな」

光「正確には、瑠美の頭の中に記憶を流し込んだだけだけどね」

紗那「でもこうしなくちゃ、思い出させることが難しいんだよ」

裕斗「紗那の言う通り。無理やり記憶を流し込まなくちゃ、思い出させることが難しい。まあでも、少しだけの記憶を流し込んだだけだからな。あまり意味がない」

隆「んなので大丈夫なのかよ……………」

光「不安があるね……………」

紗那「残りは明久と瑞希だね」

裕斗「ああ。その事だけど、姫路瑞希の方は俺がやっといた。保健室にちょうどいたからそこを狙って記憶を流し込んだよ」

隆「おいおい（汗）」

光「でも、瑞希と明久って過去の記憶はあるんじゃないか？」

???「残念ながらそれは違うわ」

突如、後ろから声が聞こえた。後ろを振り向くと、茶髪でみつあみをしており、焦げ茶色の瞳。そして、文月学園の制服を着ている女子生徒がいた。

紗那「亜梨沙……………」

亜梨沙「なんか騒がしいと思ったら、あんたたちだったのね」

そういつて、亜梨沙はこちらへやってくる。

隆「で、違うってどういう意味だ？」

亜梨沙「そのままの意味よ。吉井明久と姫路瑞希は確かに過去の記憶はある。けど、その記憶は小学五年から今の高校二年の記憶だけ。その昔の記憶はないのよ」

光「だから、瑞希に記憶を流し込んだんだな」

亜梨沙「少しだけの記憶を流し込んでも効果はある。キーワードとなる人物はあの四人なんだから」

裕斗「まあとにかく。今は瑠美も保健室に運んじゃって。ここにいと怪しまれるから」

亜梨沙「Bクラス戦が終わる前に記憶を流し込んだきなさいよ」

隆「それにしても、どっちが勝つんだろうな」

光「裕斗は分かるんだろ？」

裕斗「おお。けど教えねーー」

紗那「ケチ」

裕斗「まあ、勝敗を言わなければ大丈夫かな？Bクラス代表が面白いことになるぞ」

三人「「「?????」」「」」

亜梨沙「裕斗……。この三人には詳しく教えなくちゃ意味ないわよ……………」

裕斗「でも詳しく教えると、読者が困るだろう。という事で、詳しくは教えない。おら。さっさと運べよ」

隆「つまんねえの」

こうして、私達は瑠美を保健室へと運んでいった。

第十六話 Bクラス戦 その3（後書き）

次回、Bクラス戦完結！！

明久と直貴の怒りが大爆発！！

そして、またまた新キャラ登場！！（活躍がそんなにないけど（笑）
）

誤字脱字があつたら言ってください。

第十七話 Bクラス戦 その4（前書き）

この頃バカテストのネタが思いつかない……………。

まあ、そんなことは放つといて、今回でBクラス戦完結です……！
長い……………

第十七話 Bクラス戦 その4

Side 明久

明久・直貴「雄二イ！！！！！」

勢いよくドアをあけ、雄二の名前を呼ぶ。

雄二「うん？どうしたお前ら？脱走……………なわけないか」

雄二はノートに何かを書き込んでいるところだった。近づいてみるとそれが僕らと敵の現在の戦力を記したものだとなる。

明久「話があるんだ」

雄二「なんだ？」

さっきものすごい勢いで扉を開けたから、雄二には今僕らがとても冗談を言うわけがないと思ったのだろう。真面目に話をきいてくれる顔をしていた。

明久「根本くんの制服が欲しいんだ」

雄二「お前に何があった……………？」

直貴「バカ明久。正しい言葉は根本の制服に入っている、あるものが欲しいんだ」

直貴ナイスフォー！！

このままじゃ僕は変態扱いされるところだった！！

直貴「それと。瑠美と瑞希を今回の戦線から外してほしい」

雄二「理由は？」

明久「理由はいえない」

どうせいつか伝わってしまうことだから、戦線が混乱しないように教える訳にはいかない。

雄二「どうしても外しないとダメか？」

直貴「ああ、どうしてもだ」

直貴・明久「頼む雄二！！」

僕達二人は雄二に頭をさげる。

どうしてもあいつだけは許せないんだ……！！！！

雄二「……………条件がある」

明久「条件？」

雄二「ああ。西崎と姫路がやるはずだったことをお前たちがやるんだ」

直貴「つまり、根本を二人だけで倒せってことか？」

雄二「ああ。誰もフォーローはしない。二人だけで根本を倒すこと。

これが条件だ」

直貴「もちろんやる。明久は？」

明久「うん！！やるよ！！」

直貴「よし。あ、でも近隣部隊がいそうだから、ムッツリーニと桃子を連れてってもいいか？」

雄二「ああ。別にいいぞ」

明久「ムッツリーニ。初瀬川さん。力を貸してくれない？」

康太「……………もちろん（グッ）」

桃子「任せて」

二人は快く引き受けてくれた。

直貴「よし！！いくぜ！！」

三人「！！おう！！」「！！」

僕達四人は勢いよく教室を出ていった。

Side 直貴

豊「直貴。戻ってきたか！！」

豊が気づいて俺達の所へやってきた。

直貴「戦況はどうだ？」

豊「実はけっこうヤバいんだ」

明久「え？こっちが勝っていたのに？」

豊「敵の幹部的な奴らが出てきて、一気に半分の人数を戦死にしやがった」

直貴「幹部的な奴ら？あ、そういえば……………確か名前は……………」

康太「瀬川実鈴、月沢聖華、白石美夏子……………」

桃子「そして藤田大樹。この四人がBクラスの幹部でもあるやつらだよ」

ムツツリーニと桃子が教えてくれた。

豊「今出てきてるのは、藤田大樹と月沢聖華。科目は日本史だ」

直貴「日本史……………ということは、愛里が活躍してるか？」

豊「いや。南谷は他のBクラス生徒に苦戦している」

なるほど……………。それなら、

直貴「明久。いけるか？」

明久「いけるけど……………。根本はどうするの？」

直貴「根本は俺に任せろ」

明久「……………分かった。やるよ」

直貴「豊。協力してくれ」

豊「おう。任せろ」

直貴「康太はさっき言った通りに行動してくれ」

康太「……………了解（シュパッ！）」

康太にはあることをしてもらう。根本の回りにいる奴らを倒すためにな。

とりあえず、入り口に近づいていく。

そこには佑樹、愛里、恵里菜、秀吉、美波というお馴染みのメンバーがいた。

佑樹「兄さん……………！」

愛里「ふう……………。やっと抜け出せたわ……………」

直貴「佑樹、恵里菜、愛里、秀吉、美波。お前らも協力してくれ」

恵里菜「よく事情は分からないけど、別にいいですよ」

秀吉「ワシもじゃ」

美波「ウチも協力するわ」

康太の情報では、瀬川実鈴は科学、白石美夏子は数学、月沢聖華は日本史、藤田大樹は現代国語が得意らしいのだ。とりあえず、

直貴「右側にいるやつらは、全員左側に移動しろ」

F生徒「え？でも……」

直貴「言い方がダメだったな、邪魔だから左側にいけ！！！！！！」

右側にいるF生徒

「「「「「は、はいいいい！！！！！！」」」」」

右側にいるF生徒を全員左側に移動させる。

そして、がら空きになった右側の入り口にはBクラス生徒三人と茶髪でツインテール、焦げ茶色の瞳という顔の月沢聖華がいた。側にはいつの間にか、日本史担当の先生がいる。

聖華「きたね……………」

直貴「明久！！愛里！！頼むぞ！！」

明久「了解！！Fクラス吉井明久。そこにいるBクラス月沢聖華さんに、日本史で勝負！！試獣^{サモン}召喚！！」

愛里「同じく、Fクラス南谷愛里。Bクラス生徒三人に日本史で勝負します！！試獣^{サモン}召喚！！」

聖華「うけてたつよ！！試獣^{サモン}召喚！！」

Bクラス生徒三人

「『試獣召喚！』」」
サモン

明久達の召喚獣が姿を現す。月沢の召喚獣は短剣にテイルズにでてくる、ルー〇イのような格好。いわゆるハンターだ。

『Fクラス 吉井明久

&

南谷愛里

日本史 405点

&

352点

V

S

Bクラス

つきさわせい
月沢聖華

&

Bクラス生徒三人

352点

&

平均158点

『

お！！明久は400点ごえか！！

愛里「明久。また点数上がったの？」

明久「そうみたい。自分でもビックリだよ」

聖華「点数が高いからって、調子にのらないで!!」

明久の召喚獣に月沢の召喚獣が攻撃をしかける。

明久「なんのお!!」

しかし明久はその攻撃を防御する。

愛里もBクラス生徒三人と勝負している。

明久「直貴!!今のうちに!!」

直貴「おう!!任せたぞ明久!!」

この場を明久と愛里に任せる。敵の横を通りすぎると、

聖華「私の他にも三人いるよ」

直貴「え？」

聖華「クスッ……」

なぜかすんなりと敵の情報を教えてきた。

いったいなぜ……？

そう思っていると、

佑樹「兄さん!!なにボーツとしてるんですか!!」

豊「直貴!!次の相手だぞ!!」

豊と佑樹が声をあげた。

目の前を見ると、イナ○レにでてくるヒロ○のような髪型で茶髪。瞳の色は黒。という男子生徒が立ちはだかっていた。そしてそのとなりには、国語担当の先生がいる。つまり、このフィールドは……

大樹「さあ。ここは国語で対戦だ！！Bクラス藤田大樹。試獣召喚
！！」

国語のフィールド。国語ならこいつらの出番だな。

直貴「恵里菜。秀吉。桃子。いけるか？」

恵里菜「任せてください！！Fクラス荒恵里菜。試獣召喚！！」

秀吉「任せるのじゃ！！Fクラス木下秀吉。試獣召喚！！」

桃子「ちよつと自信ないけどやってみます！！Fクラス初瀬川桃子。試獣召喚！！」

三人の召喚獣が姿を現す。藤田の召喚獣はでっかい斧をかついで鎧を装備している。さて、点数はどうだ……？

『Bクラス 藤田大樹
ふじたたいき

現代国語 321点

V S

Fクラス 荒恵里菜
&

木下秀吉

&

初瀬川桃子

352点&341点&301点 』

うーん。やっぱり三人とも点数は落ちているか……………。

佑樹「兄さん！！後ろに後二人います！！」

美波「代表は奥の方に隠れているらしいわ！！」

豊「ここは荒達に任せるぞ！！」

直貴「分かった！！任せたぞ三人とも！！」

秀吉「任せるのじゃ！！」

恵里菜「頑張ってきてください！！」

桃子「残りの幹部二人はレベルが高いわ！！気をつけて！！」

この場を荒達に任せ、またまた奥へ。そして俺達の前に立ち塞がる新たな敵。けい○ん！に出てくる田○中律がカチューシャを外したところに似ている金髪。瞳の色は赤という顔の女子生徒である。

実鈴「三人目はアタシだけど相手は誰かな？布施先生、化学のフィールドを」

布施「承認します」

実鈴「試獣召喚^{サモン}！！」

化学のフィールドに現れる相手の召喚獣。武器は妖剣。装備は忍者のような格好である。

『Bクラス 瀬川実鈴^{せがわみすず}』

化学 405点 ♪

400点オーバー……！！

当然腕輪も装着している……。

桃子のいつていた通り、後の二人はレベルが高いな……。ここは、

直貴「佑樹。いけるな？」

佑樹「もちろんですよ兄さん」

直貴「よし！！任せたぞ佑樹！！」

化学が得意な佑樹に任せる。佑樹も腕輪持ちだから大丈夫だろう。

佑樹「さあやりますか！！試獣召喚^{サモン}！！」

『Fクラス 渡辺佑樹』

化学 458点 ♪

佑樹ならきつと大丈夫だ！！

瀬川の横を通りすぎる。今思ったんだが、なんでこんなに簡単に通

らしてくれるんだ？まあ、いいか。

走っていると、また俺達の目の前に女子生徒が現れる。黒い髪でシヨート。瞳の色は紫という、ボーイッシュ系の女子だ。

美夏子「最後の幹部は私です。数学勝負！！試獣召喚^{サモン}！！」

数学のフィールドに現れる白石の召喚獣。武器はナイフ。装備はシスターのような格好である。

『Bクラス 白石美夏子^{しろいしみがこ}』

数学 415点 『

やっぱり400点オーバーか……。ここは豊と美波に任せるか……。

直貴「豊、美波。いけるよな？」

豊「いけるか、じゃなくていけるよな、かよ……。まあ、やってやるうじゃないか！試獣召喚^{サモン}！！」

美波「ウチもやるわ！！試獣召喚^{サモン}！！」

現れる豊と美波の召喚獣。さてさて、点数は？

『Fクラス 金沢豊』

&

島田美波

数学 425&385点 『

うん。いつもなら豊は450点ぐえ、美波は400点ぐえをするんだけどな……。ま、この二人なら大丈夫だろ。さつさとクス野郎を潰しにいくか。そして、白石の横を通りすぎようとすると、

美夏子「早く倒さなくちゃ西崎瑠美と姫路瑞希が、どんどん苦しんでいくよ……………」

直貴「っ!？」

いきなりの言葉に俺は振り向く。このセリフ……、一度だけ聞いたことがあるぞ……。

『きみの大切な人が苦しんでいくだろう……………』

……………思い出した。昨日謎の男に言われた言葉だ。ちょっと内容は違うと思うけど……………。

美夏子「大切な人を守りたいなら、早くいきなさい」

そう言つて白石は豊達の方に向きなおす。いったいなんだってんだよ……………。この頃、佑樹と桃子もおかしい。佑樹なんか、夜に出かける回数が多くなったり、桃子はあまり昼休みなどは出歩かないのに、よく出歩いている。それと、俺も様子が変。まあ、そんなことはどうだっていいか。

そう言つて、奥にいくと卑怯もの根本がいた。

直貴「根本恭二……………」

根本「わ、渡辺直貴!？くそつ。まさか突破されるなんて……………。近隣部隊!!!」

根本がいうと、近隣部隊五人が出てくる。…………邪魔だな……。だけれどな、俺もそのところは考えてあるんだよ……！

直貴「出番だ！！康太！！！！」

俺がいうと、開いていた窓から康太と保健体育担当の教師が入ってきた。

康太「二年Fクラス土屋康太…………。近隣部隊五人に保健体育で勝負する…………。試獣^{サモン}召喚！！」

近隣部隊五人

「…………試獣^{サモン}召喚！！…………」

『Fクラス 土屋康太

保健体育 441点

V S

Bクラス 近隣部隊五人

保健体育 平均153×5点』

圧倒的な差で康太が近隣部隊を撃破した。

直貴「よくやった康太」

康太「……………（グッ）」

さてと、後は

直貴「さあ。覚悟は出来てるな？クス野郎」

クス野郎こと根本だけだ。

Side 明久

明久「とりゃああああ!!」

聖華「はああああ!!」

激しく僕と月沢さんの召喚獣がぶつかり合う。意外にも月沢さんは、召喚獣の操作がうまい。下手をすれば負けてしまいそうだ。

愛里「これで終わり!! ショックエレガント!!」

Bクラス生徒三人「「「ギアアアアアアア!!」」」

向こうでは南谷さんが、決着をつけていた。

『Fクラス 南谷愛里

日本史 296点

V S

Bクラス生徒三人

0点 『

聖華「よそ見をしてる暇なんかないよ!!」

南谷さんの方を見ていたら、月沢さんの召喚獣がものすごい速さで僕の召喚獣に近づいてきた。

月沢さんの召喚獣は、とにかく動きがすばやい。………あ。今思い付いた。僕は400点ごえしてるから………あれが使えるんだった。いちかばちかでやってみるか………。

そう思つて、僕の召喚獣は木刀を強く握りしめる。

聖華「なにやろうとしてるのは分からないけど。これでおしまいよ！！」

月沢さんの召喚獣がさっきと同じスピードで、攻撃をしかけてくる。そして、短剣を振りかざそうとしたその時に！！

明久「今だ！！！」

僕の召喚獣が背後に回り込む。

聖華「えっ！？」

明久「決めて見せる！！魔王^{まおうなつめつぎん}雑滅斬！！！！！」

僕の召喚獣に翼がはえ、木刀が普通の剣に変わり、一瞬で月沢さんの召喚獣を戦死にさせた。

『Fクラス 吉井明久
日本史 358点

V S

Bクラス 月沢聖華

0点

」

聖華「そ、そんなあ……………」

月沢さんがその場に座り込む。さて、役目は終わった……………。他の皆は大丈夫かな？

Side 恵里菜

大樹「おらあああああ！！」

秀吉「はああああああ！！！！」

桃子「どりゃあああああ！！！！」

藤田くんと秀吉くんと桃子ちゃんが、激しくぶつかり合います。私の召喚獣は、なるべく後方で戦闘しています。勝負はほぼ互角。どっちが勝ってもおかしくない勝負です。

大樹「おらよっ！！！！」

桃子「っ！！」

そこで藤田くんが桃子ちゃんの攻撃を防ぎました。桃子ちゃんの召喚獣はバランスを崩してしまいます。

大樹「どりゃあ！！！！」

秀吉「そうはさせん！！」

大樹「ちっ!!」

桃子ちゃんの召喚獣に藤田くんの召喚獣は攻撃をしかけようとしたが、秀吉くんの召喚獣が攻撃をして守りました。
さて、詠唱は終わりましたよ!!

恵里菜「私のことをお忘れではないですか？フラッシュティア!!」

大樹「な!？ぐっ!!」

明らかに油断してましたね……。さあ止めです!!

恵里菜「セイクリッドシャイン!!」

秀吉「止めじゃ!!ふうざんらいせつしょう風斬雷雪晶!!!!」

桃子「いきますよ!!ギガノドラグーン!!!!」

私の光の爆発の攻撃、秀吉くんの風、雷、雪の属性を生かした攻撃、桃子ちゃんの巨大な竜の攻撃で藤田くんの召喚獣を戦死させました。

『Fクラス 荒恵里菜

& 木下秀吉

& 初瀬川桃子

現代国語 311&290&241点

V

S

Bクラス 藤田大樹

0点
『

大樹「くっ……！まさか、この俺がな………」

藤田くんは膝をおり、座り込んでしまいました。ここで私達の役目は終わりです。他の皆さんは大丈夫でしょうか？

Side 佑樹

実鈴「ちゃんと楽しませてよね！！妖剣・火炎！！」

佑樹「火龍炎舞！！」

瀬川の炎にまとった剣の攻撃と、俺の炎をまとった蹴りの攻撃がぶつかり合う。この女、意外に強い……。え？いつもと言葉づかいが違うだって？当たり前じゃん。だってこれが俺の本性だもん。本当の正体がばれないように、ほとんどの人の前では性格を変えているんだよ。

実鈴「やるね！！それじゃあこれはどうかな？妖剣・時雨！！」

次に瀬川は水にまとった剣の攻撃をしてきた。

佑樹「なめんな！！幻竜拳！！」

俺はそれに対して、力をためた一発を喰らわせる。観察処分者ではないくせに動きが素早い。攻撃も威力が強い。すると、

実鈴「……………」

急に瀬川の召喚獣が動きを止めた。いったいなにをするきだ？

実鈴「もう終わりにしようか……………」

その時、瀬川の召喚獣がつけていた腕輪が光だした。って、腕輪だと！？そういえばこいつ400点をオーバーしていた！！！！

実鈴「それじゃあさようなら！！腕輪発動！！『百鬼夜行』！！！！」

その瞬間、瀬川の召喚獣の武器が怪しく光だし俺の目の前に妖怪達がたくさん……………、つまり百鬼夜行がいた。

佑樹「こ、これは……………」

実鈴「百鬼夜行だよ。アタシの腕輪は妖怪を呼ぶの。もちろん最強のね……………」

次の瞬間、百鬼夜行は一気に俺の召喚獣に襲いかかってきた。

実鈴「バイバイ♪」

佑樹「……………俺をなめるなあああ！！！！腕輪発動！！『ドラグーン』！！！！」

俺も腕輪を発動する。発動すると召喚獣は輝く竜となった。そして竜は、辺り一面に火の玉をばらまき百鬼夜行を全滅させる。

実鈴「なっ……………！」

佑樹「これで終わりだあ！！ゴットブレス！！！」

竜から光線が発射され、瀬川の召喚獣は戦死となった。

『Bクラス 瀬川実鈴

化学 0点

V S

Fクラス 渡辺佑樹

化学 218点 『

実鈴「まさか……………負けるなんて……………」

瀬川はそこで呆然としていた。俺の役目はおしまい。他はどうだ……………？

S i d e 豊

美夏子「いくよ！！ホーリーランス！！」

豊「ツインバレット！！」

美波「トルネードスピン!!」

白石のランス的なものがたくさんふってくる攻撃と、二丁の銃で長い時間攻撃するわざと、美波のカーオイがコピー能力トルネイドに似てる攻撃がぶつかり合う。敵も400点をオーバーしてるからな。慎重にやらないとな。

美夏子「これはどうかな?デルタレイエッジ!!」

次に白石はスピードを上げてくる。多分近づいたらナイフで切り裂かれるだろう。それなら、

豊「フリーズバレット!!」

凍らせれば安心だ。しかし、

美夏子「甘いよ!!」

白石の召喚獣は凍った弾丸を切り裂いた。そして俺の召喚獣に近づき、

美夏子「ブラッディローズ!!」

黒いバラを目の前に咲かせそれを切り裂く。同時になぜか俺の召喚獣もダメージをおう。

豊「くっ……………」

このままじゃ…………、すると、

美波「ウチのことを忘れないで！！風牙絶洗！！！」

美波が白石を風のように一直線に切りつけた。

美夏子「そういえば二人いたんだった……………！」

美波「豊、平気？」

豊「ああ。これぐらいなともねえ」

美夏子「……………仕方ないか……………。ほんととは使うきはなかったけど…………腕輪発動！！『紅の翼』！！！」

その瞬間、白石の召喚獣が光だした。まさか……………、

美夏子「君たちの力を見せてもらうよ……………。天へとかける翼をあなたに…………。紅翼鷄蓮翔！！！！！」

その瞬間、俺達の回りに赤い羽根がたくさん出てきた。そして、その羽根は一気に俺達に襲いかかってきた。

豊「なっ……………！？」

美波「こんなにたくさん！！直撃したら、間違いなく戦死になるわよ！？」

美夏子「（それをどう攻略するのはあなたち。これを攻略できなければ……………あいつらと戦う資格はないし、あの四人に近づく資格もない）」

どうする！！どうする！！………
あつ、そういえば、俺も腕輪を持っていたな。これ使えるよな？

豊「腕輪もちはお前だけじゃねえんだよ！！！！腕輪発動！！」ラスト最終
バトル
戦闘』！！！！」

そして、

豊「輝ける力よ………ここにずっといて道を示さん！これで終わりだ
あ！！Xバスター！！！！！！」

俺の召喚獣が銃で円をかく、その次に上でクロスさせ力をためてい
く。最後は円が魔方阵的なものになり、最強の光線を天井に向け発
射させる！！！！天井にぶつかった光線は分岐され、紅の翼と白石
の召喚獣に向かっていく。

美夏子「えっ………！」

紅の翼は全てけされ、白石の召喚獣は光線に直撃し戦死となった。

『Bクラス 白石美夏子
数学 0点

V S

Fクラス 金沢豊&島田美波

数学 158&215点 』

意外にも美波も点数が減っていた。

美夏子「……………合格かな……………」

美波「え？」

美夏子「……………クスッ」

そついうと白石はどこかに向かつていった。いったいなんだ……………？
さてと、後はお前だけだぞ直貴！！

S i d e 直貴

直貴「高橋先生。このゲス野郎……………じゃなくて根本恭二に総合科目で勝負します」

高橋「しよ、承認します」

俺の気迫にビビったのか、高橋先生は慌てながらも承認してくれた。

根本「さ、試^{サモン}獣召喚！！！！」

根本が召喚獣をだしてくる。

『Bクラス 根本恭二（代表）
総合 1964点 』

雑魚だ。こんな点数、たいしたことじゃない。

直貴「根本。お前、分かってるよな？」

根本「な、なにがだ!!」

直貴「なにがって、そりゃあ……俺を怒らせたことに後悔しろっていうことだよ!!……!!試獣^{サモン}召喚!!……!!」

こいつは徹底的にぶっ潰す!!……!!

『Fクラス 渡辺直貴

総合 9589点 』

根本「きゅ、9000点オーバーだと!?!」

直貴「学園2位なんだから当たり前だ。まっ、瑠美はこれより上だけどな」

ちなみに瑠美は10000点オーバーしている。俺達二人だけが、学年主任の高橋先生を超える点数をもっている。

直貴「さあ、覚悟しろ!!!風牙絶洩!!!月破翔裂破!!!覇^は胴^{どう}烈^{れつ}火^{つか}!!……!!」

次々と技を根本に喰らわしていく。

根本「くっ……。学園2位だからっていばってんじゃねえよ!!……!!」

ここで根本が反撃してくる。しかし、

直貴「遅い!!……!!」

俺の召喚獣は素早く背後に回り込む。

根本「なっ!?!」

直貴「月破翔裂破!?!」

そして、毎回使っている技を喰らわせる。

根本「くそっ……………」

直貴「遊びは終わりだあ!?!腕輪発動!?!『オーバーリミッツ』!?!?!」

ここで腕輪を発動する。腕輪を発動すると、俺の召喚獣は光輝く輪に包み込まれる。

根本「な、なんだ!?!」

直貴「瑠美と瑞希を泣かせた罰だ!?!?!終わらせてやる!?!全てを切り裂く!?!獣破轟衝斬!?!」

テイルズのア○ベルの秘奥義でもある技を喰らわせ、根本を戦死にさせる。

『Fクラス 渡辺直貴

総合 9345点

V

S

Bクラス クズ野郎（根本恭二）

総合 DEAD ♪

根本が戦死になったことで、

高橋「戦争終結！！勝者はFクラスです！！！！」

俺達FクラスがBクラスに勝利した。

第十七話 Bクラス戦 その4（後書き）

誤字脱字があつたら言つてください。

次回は戦後の会話です。

一番Bクラス戦が相当書いたようなきが……（笑）

第十八話 とりあえず根本は死刑にしよう!! (黒笑) b y 明久 & a m p . 直

いよいよ今日で今年が終わりますね♪

というわけで今年最後の更新です。

最後のほうがグタグタ……………。

Side 瑠美

???「——ちゃん!!」

誰かが私を呼んでいる……。聞いたことのある声……。

瑞希「瑠美ちゃん!!」

今度こそはつきり聞こえた。この声は……、

瑠美「み、瑞希……?」

瑞希「瑠美ちゃん!! 目をさましたんですね!!」

瑠美「こっは……?」

瑞希「保健室ですよ」

保健室……? なんで……? ?

瑞希「私は明久くん達に言われて保健室に来たんです。だけど、急にきをうしなつて……」

瑠美「私は根本のところにいたんだよね……。根本が去っていったあと、私も急にきをうしなつた」

瑞希「瑠美ちゃんも？」

瑠美「うん……。しかも、きをつしなう寸前に変な記憶が頭のなかに流れ込んできたんだ」

瑞希「えっ！？私も同じです！！」

瑠美「瑞希まで？」

瑞希「はい……。それから、目を覚ますまではずっとその記憶が……」

「いったいどういうことなのだろう……。なんで瑞希まで私と同じことが……。」

瑞希「そういえばあの記憶の中に、私と瑠美ちゃんと明久さんと直貴くんのいた人が出てきていたような……」

！？

瑠美「ほ、ほんとに！？」

瑞希「は、はい……。ほんとに似た人が出てきました」

瑠美「私と同じだ……」

瑞希「え！？」

でも私はそれだけではない。佑樹、桃子、紗那、隆、光……。こ

の五人の似た人も出てきた。そして知らない三人も。瑞希の見た記憶には、この記憶はなかったのだろう。

つて、今はそんなことはどうだっていい。試召戦争は？そして、私と瑞希の大切なものはどうなったの？

紗那「試召戦争はFクラスの勝ちみたいだよ」

瑞希・瑠美「「！？」」

ドアの方を向くと、紗那、隆、光の三人がいた。

瑠美「な、なんであなたたち……。ていうか、今なんて……」

隆「だから、BクラスはFクラスに負けたんだよ。いわゆるFクラスの勝利だということだ」

瑞希「よかった……。勝ったんですね……」

光「早くいった方がいいよ？大切な人のところへ」

瑠美「え？」

紗那「明久と直貴。あの二人が、瑠美達の大切なものを取り返してくれたはずだよ」

！！！！

瑠美「瑞希！！いっつー！！」

瑞希「は、はい！！」

隆「瑠美はそのままBクラスへ向かえ！！姫路は屋上へいけ！！」

瑠美「分かった！！！！」

なんでそんなことを言うのか理由が聞きたかったけど、今はどうだつていい！！私と瑞希は勢いよくとび出していった。

紗那「あの二人はあなたたちのために行動しているということもあるんだよ？ルナ……、フィーラ……」

途中、紗那が何かを呟いていた……。誰に言っていたのかな？

Side 直貴

雄二「さすが学園2位の实力を持つだけはあるな。普通に一人で倒すなんてな」

Bクラスの中には、Bクラスの生徒、Fクラスの生徒がいる。Bクラスの生徒はFクラスに負けたことに、非常にがっかりしている。ちなみにクズ（根本）は床に座りこんでいる。で、今は雄二がクズと話している。おいおい雄二。さっさと仕置きをしようぜ？（黒笑）

雄二「さて。嬉し恥ずかし戦後対談といくか。負け組代表さん？」

直貴「ああ。楽しい楽しいO H A N A S Iの時間だぜ？クズ野郎（黒笑）」

明久「ほんとほんと。楽しいO H A N A S Iの時間だよ？ク

ズ（黒笑）」

クス（根本）「……………」

さすがに俺と明久の気迫にびびっているのだろう。全然反抗してこない。

雄二「本来なら設備を受け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

この発言に周りが一斉に騒ぎ出す。特にFクラスメンバーが。

豊「おいお前ら落ち着け。俺達の目的はAクラスの設備をてにいれること。他のクラスの設備をてにいれることではないから、こういう風に条件付きで設備交換をなしにするんだ。だろ？雄二」

雄二「ああ。その通りだ」

この騒ぎを豊が黙らせた。どうやら豊には雄二が考えていたことはお見通しだったみたいだな。

クス「……………条件はなんだ」

力なくクスが問う。それとめんどくさいから、根本はクスという設定だからな。

雄二「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

クス「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には散々好き勝手やってもらっただけ、正直去年から目障りだったんだよな」

凄い言い様だが、そうやって言われるだけのことをクズはやっている。だからこそ、周りの人間は誰もフォローはしない。

雄二「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言してこい。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけ伝えるんだ」

クズ「それだけでいいのか……？」

直貴「ああ。けどな、それだけで許されると思っっているわけじゃないよな？（黒笑）」

雄二「直貴落ち着け。もちろん直貴のいう通り、それだけで許されるわけがない。Bクラス代表のお前がこれを着てさっき言った通りに行動すれば許してやるう」

そう言つて雄二は、文月学園の女子の制服を取り出した。

クズ「ば、馬鹿を言うな！！この俺がそんなものを……！！」

そりゃあ嫌だよな。それにお前が着ても全然似合わないし。でも、やらせなくちゃ俺と明久の怒りが収まらないんだよ！！

B男子「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！！」

B 女子『任せて！！必ずやらせるから！！』

B 男子『それぐらいのことで、設備が守れるなら絶対やるさ！！』

それにBクラス生徒全員はこちらの味方になってるからな。それほどこいつは嫌われているのだろう。

雄二「じゃ、決定だな」

クズ「くっ……！！よ、よるな！！変態！！ぐふっ……！！！！」

ドサッ！！！！↑クズが倒れたおと

大樹「とりあえず黙らしといたぜ」

雄二「お、おお。ありがとう」

驚きの早さでクズを倒したから、雄二もビックリしていた。藤田って案外強いんだな。

直貴「さて着付けに入るとするか。雄二。制服」

雄二「ほら」

直貴「明久。脱がすのに手伝え」

明久「うん」

雄二から制服を受け取り、クズの制服を脱がしていく。

クズ「う、うう……………」

ちょっと、拳が入るのがあさかったのかクズは気絶まではいかなかった。

直貴「おらあつ！……！」

ドゴツ！……！

クズ「ぐふっ！……！」

よし。今度こそ気絶したな。明久と協力してクズの制服を脱がしていく。

制服を脱がしたあと、女子の制服を着せようとするのだが……………、

直貴「着せかたが分からない……………」

明久「確かに……………。女子の制服って、どうなっているか分からないよね……………」

着せかたが分からないため手を止めてしまふ。すると、

実鈴「アタシが着せてあげるよ」

Bクラス生徒の瀬川がそう言って出てきた。

直貴「そうか？ならお願いするな」

明久「どうせなら可愛くやっちゃって」

実鈴「それは無理なことだね。だって、土台が腐ってるもん」

ひどいいいわれようだな。まあ、着付けは瀬川に任せて。このクズの制服からあるものを探す。

直貴「お。あつたあつた」

取り出したのは、瑞希と瑠美の大切なもの。どちらも同じものらしいな。瑠美は髪飾りもあるけど。それにしてもこの手紙……。ラブレターか？さすがに俺でも分かるぞ。瑞希のは明久あてだよな絶対。でもまさか瑠美まで書いているとは……。いったい誰なんだ？瑠美の好きな人は……。ヤバイ……。なんか泣けてきた……。

明久「な、直貴？なんで泣いてるの？」

直貴「ちがう……。これは汗だ……」

明久「いやいや。明らかに涙がでてるからね？」

直貴「ぎにずるな……」

明久「しかも、泣きすぎて声がおかしくなってるし!!」

瑠美の好きな人は幸せだよ……。学園で一番可愛い美少女に好きでいてもらってるんだからよ……。あ、ヤバッ。大量の涙が……。

直貴「明久これ……」

明久「なにこれ？」

直貴「瑞希の大切なもの……。瑞希に返してきてやれ。あいつのことだから、屋上にいるはずだ」

明久「あ、うん。分かった」

そして明久はBクラスの教室を全速力で出ていった。
さてと。俺もこれを返してくるか……。泣くなよ俺……。泣くなよ俺……！！

豊「……………」

美波「？どうしたの豊？」

豊「いや……。今直貴が、涙をこらえながら出てったから何かあったのかと思ってな」

美波「へ〜。いったいどうしたのかしらね〜」

途中、豊と美波の話し声が聞こえてきたが、最早頭に入ってこなかった。

Bクラスの教室をでて、Fクラスへと向かう。Bクラスは新校舎、Fクラスは旧校舎なので遠いからめんどくさい。旧校舎に足を踏み入れたその時、

瑠美「直貴！！！！！！」

直貴「ぐはっ！？」

後ろから誰かが飛び付いてきた。（正しくいえばタックル）なんだ
と思いながら後ろを振り返ると、

直貴「！？瑠美！？」

瑠美が抱きついてた。って、今の状況やばくね！？瑠美に抱きつか
れてるよ俺！！理性がもたねえ！！！！

直貴「る、瑠美。そろそろ離れてくれ……………」

瑠美「あー！ご、ゴメン……………」

って、なに俺拒否ってんだああああ！！！！せつかくそっちから抱き
ついてきてくれたのによおおお！！！！！！

瑠美「な、直貴。それ……………」

直貴「ん？あ、これか？」

瑠美が指を指してきたのは、手紙と髪飾り（正確にはラブレターと
ゴム）。

直貴「ほら。大切なものなんだろう？」

瑠美「うん……！」

俺は瑠美に手紙と髪飾りを渡す。渡すと満面の笑みを俺に見せてき
た。

瑠美「あ、そういえば……………、中身見てないよね……………？」

ちよつとビクビクしながら訪ねてくる。

直貴「見てねえよ」

そんな不幸の手紙なんか見たくもねえよ。

瑠美「よかったあ……………」

直貴「……………それ、ラブレターか……………」

瑠美「えっ！？（／／／／／）」

やっぱり当たりなのか……………。

直貴「なら、俺が言えるのはこの一言だけだ。うまくいけるといいな」

瑠美「えっ？……………あ……………、うん！！！！（／／／／／）」

真つ赤になりながらも笑顔を見せる瑠美。ヤバイ……………、また泣きそうだ……………。

直貴「ちなみに、いつ告白するんだ……………」

瑠美「うゝん。Ａクラス戦後かな？」

直貴「それなら手紙じゃなく、直接の方がいいんじゃないか？相手に伝わりやすいと思うぞ？」

瑠美「直貴はの方がいい？」

直貴「ああ。どうせなら手紙じゃなくて直接の方がおれてきにはいい」

過去に散々、手紙を貰ったことがあるからな……………。

瑠美「じゃあ、そうしてみようかな。あ、そうだ……！直貴……！いまいったこと絶対忘れないでね……！」

直貴「……あ、ああ……………」

これでもついいよな……………。ほんとに涙が溢れてきたわ……………。

直貴「俺、もう帰るわ……………。じゃあな……………」

瑠美「え？ちょ……………、直貴……………」

俺は全速力でFクラスの教室に向かい、カバンをもって校舎から出ていった。家に帰って、枕に染み込むほどの大量の涙を流したということは別の話。

S i d e 明久

屋上に来たのはいいんだけど誰もいないんだよね……………。

明久「教室に戻ろう……………」

そう呟いて戻ろうとすると、

瑞希「明久くん!!!」

明久「!?(///)」

姫路さんの声が聞こえたから目の前を見た瞬間、抱きつかれていた。当たってる当たってるうつうつ!!!!↑理性が保てていない

瑞希「わ、私のためにありがとうございます!!あと、他のみんなが頑張っているのに私だけ何もできなくて……、瑠美ちゃんも辛かったはずなのにムリして私のために……」

そう言つて、姫路さんは泣いてしまう。この状況……、明らかに僕が姫路さんを泣かしてみたいになってるよ!?しかも姫路さん。いま明久くんって……。名前で呼んでくれたよ!?僕、もう死んでもいい……。って、そんなことを思っているのかいま!?とりあえずこの状況をなんとかしよう。

明久「姫路さん落ち着いて。とりあえず離れてくれるかな?苦しから……」

瑞希「え?あ!!す、すみません……」

あ、なんかもつたいたい。せつかく向こうから抱きついてきてくれたのに……。って、僕は変態か!!↑君が変態だということはみんな認めていると思うよby作者
誰だ!!僕の言葉に否定したやつは!!

瑞希「あの……明久くん?誰に向かって喋っているんですか?」

ヤバッ。いつの間にか声に出てたみたい。

明久「気にしなくていいよ姫路さん。天に向かって叫んでいただけだから」

瑞希「は……………はあ……………」

明久「それより姫路さん。これ姫路さんの何でしょう？はい。返すね」

僕は姫路さんに手紙を渡す。正しくは姫路さんが雄二あてに書いたラブレターだと思うんだけど。

瑞希「あ、ありがとうございます！！ちなみに明久くん……………これはどこで？」

明久「え？えつと……………たまたま拾って…（瑞希）「嘘ですね」あ、バレた？」

瑞希「バレまくりですよ明久くん。直貴くんが根本くんを倒して、二人で私と瑠美ちゃんの大切なものを取り返してきてくれたのでしよう？」

明久「あははは……………。まさか、バレていたとはね……………」

瑞希「まあこれは藤崎さんから教えてもらったんですけどね」あと、この戦争も私のためにやってくれているのでしょ？」

明久「！？」

そ、そこまでバレているの！？

瑞希「直貴くんが教えてくださったんです」

直貴のやろっ…………。

瑞希「凄く嬉しかったです。明久くんは優しくて、小学生の時から変わってなくて…………」

なんか、妙な空気だ。僕には耐えられない。話題を変えよう。

明久「ちなみに姫路さん。いつ告白するの…………？」

瑞希「え！？えっと……………」

僕のバカアアア！！そんなこと、唐突に聞いてどうするきなんだ
ああああ！！！！

瑞希「…………… Aクラスとの勝負が終わったらします」

真っ赤になりながらも、ちゃんと答えてくれた。

明久「そうなんだ…………。直接に告白しないの？」

瑞希「…………… あ、明久くんは手紙と直接。どちらがいいですか？」

え？僕？っん。

明久「僕だったら直接の方がいいな…………」

瑞希「そ、その言葉に嘘はありませんよね！？」

明久「え？あ、うん」

瑞希「…………私、手紙じゃなくて直接にします」

明久「え？あ、そうなの？じゃあ、頑張ってね姫路さん！！！」

瑞希「はい！！！！って、あれ？なにか下が騒がしくないですか？」

明久「あゝ。多分あれだね」

根本くんの写真撮影だね。ついさっき根本くんの制服は捨てたんだよね。せつかなんだし、女子の制服の着心地を楽しんで貰わなくちやつまらないじゃん？

瑞希「あれって？」

明久「気にしないでいいよ姫路さん。それじゃあしたに行こうか」

瑞希「は、はい！！！」

ちらつと校庭を見たとき、全速力で直貴が家に帰っていたのは気のせいである。うん。

S i d e o u t

場所は変わって……………文月学園地下。

美夏子「（コンコン）裕斗？入るわよ」

そう言つて白石美夏子は、謎の部屋へと入っていく。部屋のなかにいたのはイケメン？の男子……………。

裕斗「情報集められた？」

美夏子「その報告じゃないわ」

裕斗「じゃあ何の報告なんだよ……………」

美夏子「やつらと戦える人物達の情報よ」

裕斗「ああ。あの人達ね……………。どう？合格かな？」

美夏子「ええ。今のところの合格者は、Fクラス代表坂本雄二、Fクラス土屋康太、Fクラス島田美波、Fクラス金沢豊、Fクラス木下秀吉、Fクラス荒恵里菜、Fクラス南谷愛里、Cクラス五十嵐亨弥、Cクラス林舞衣、Bクラス瀬川実鈴、Bクラス藤田大樹、Bクラス月沢聖華。このメンバーよ」

裕斗「Aクラスのメンバーは？」

美夏子「まだ。これからよこれから。でも、合格だと思っただけだね。一応指定してるのは、霧島翔子、木下優子、久保利光、工藤愛子、大石亜美、久藤望早、鈴木修也、丸山浩介、遠藤奈々美、鈴川結美、ぐらいかな？」

裕斗「Aクラスの最強メンバーってところか」

美夏子「ま、そういうこと。それじゃあ私はまた情報集めにいくから」

そう言って美夏子は出ていった。

裕斗「……………俺は未来にいつて、AクラスとFクラス、どちらが勝つか見てくるか……………」

そういつと裕斗は立ち上がり、部屋の中央まで来て……………、

裕斗「輝きの未来へ我を連れていけ！！時魔法！！タイムスリップ
！！」

そんな呪文を唱えたあと、裕斗の姿はもう部屋にはなかった……………
…。

第十八話 とりあえず根本は死刑にしよう!!（黒笑）by 明久 & amp・直

Bクラス戦がやっと終わりました（笑）

次回からはAクラス戦となります。

更新は年明けになります。冬休み中にと二回更新したい……………（笑）

それではみなさん、よいお年を!!!!

オリキャラ紹介 part 4 (前書き)

前回予告したにも関わらずキャラ紹介です……………。
今回のキャラ紹介はBクラス戦で出てきたオリキャラ達です。

オリキャラ紹介 part 4

瀬川実鈴（せがわみすず）

身長 158?

体重 44? ↑ なんてほとんどの女子ってこんな気にするんだろ
うね? by 実鈴

見た目 けい○ん! に出てくる田○中律がカチューシャを外し前髪
でデコを隠している感じ

金髪で瞳の色は赤

胸はA〜B程度

趣味 太○の○人で遊ぶ ↑ 意外に上手いby 作者

特技 特になし

得意科目 化学 日本史 物理

苦手科目 数学 現代国語 英語

詳細 怪しい性格のBクラスの生徒。腹黒くて怖いところもあるけど、元氣いっぱい性格の持ち主。誰にでも厳しくて、根本のような卑怯ものが嫌い。意外に歌が上手くてアニオタでもある。ゲーム
ーでもあり、どっちかというと男友達が多い?

得意科目の中で一番得意なのは化学。400点をオーバーしており、
化学だけはAクラス並の成績である。苦手科目の中で一番苦手なのは
数学。点数は30〜40点代。

召喚獣は赤色の忍者の服。武器は怪しげな光を放つ妖剣。実鈴が使う
技は全て属性がある。

実鈴が使う技 ←

『妖剣・火炎』… 剣に炎が纏まり相手をきりつける。

『妖剣・爆炎』… 上の応用技。纏まった炎を飛ばし爆発させる技。

『妖剣・時雨』… 火炎の逆で、剣に水が纏まり相手をきりつける。

『妖剣・氷柱』… 上の応用技。纏まった水が氷の針となり相手に突き刺さる技。

『妖剣・風神』… 上の四つより遥かに威力が高い技。風の力がたまつた剣を振りかざし風神を呼び出す。後は攻撃力の高い竜巻を何発も喰らわせる。

『妖剣・雷神』… 一番攻撃力が高い技。上とは違って雷神を呼び出す。後は雷神の攻撃と実鈴の雷の力がたまつた剣での合体攻撃

腕輪の色は紫

発動キーワードは『百鬼夜行』

消費点数は恵里菜の腕輪のように使うとすぐに自分の点数が1点になる。

その名の通り百鬼夜行を呼び出す腕輪。

実はというと、実鈴の召喚獣には特殊腕輪がある。百鬼夜行の腕輪と似たような腕輪。

特殊腕輪

色は薄い紫

発動条件 化学の点数が500点をオーバーしていること。その戦争のときに、まだ百鬼夜行の腕輪を使っていないこと。

発動キーワードは『四神』

消費点数は百鬼夜行と同じ

白虎、朱雀、玄武、青龍を呼び出す腕輪。一体ずつ交互に相手を攻撃し、最後は四体の合体攻撃で止めをさす。この時、四神達のコントロールを得ることができる。

月沢聖華 （つきさわせいか）

身長 161?

体重 涙目でしかも背後に怖いオーラを出しているので不明

胸はC〜D程度

見た目 茶髪でツインテール

瞳の色は焦げ茶色で少し垂れ目

趣味 お笑い番組を見る

特技 ボケ? チューバを吹く

得意科目 日本史 古典 現代国語

苦手科目 数学 理科 物理

詳細 ちよつと天然ボケなところがあるBクラスの生徒。お笑いが好きで毎日お笑い番組を見ている。お笑いを見ているせいか、いつの間にかボケ役になっている。ちなみにツツコミ役は実鈴↑意外に仲がいい。実はというと、同じBクラスの生徒、藤田大樹の彼女でもある。

得意科目で一番得意なのは日本史。成績は300点以上。後の得意科目はBクラス並の成績。苦手科目の中で一番苦手なのは数学。成績は40〜50点代。

召喚獣は武器は短剣。装備はテイルズのルーイのような姿。腕輪持ちではない。

藤田大樹 （ふじたたいき）

身長 175?

体重 61?

見た目 イナズ〇〇レブンに出てくるヒ〇トのような髪型。茶髪で瞳色は藍色。

趣味 ギターを弾く

特技 ギター

得意科目 現代国語 数学 英語

苦手科目 日本史 化学

詳細 ギターを弾くのが得意なBクラスの生徒。身長がでかいが、中学生のころからでかかったらしく、今はそんなに伸びていない。熱血なキャラではあるが、マジギレするとクールになり怖い。優しいときは優しいが……。実はというと、同じBクラスの生徒、月沢聖華とは恋人である↑死刑だあああああ!!!!!! by FFF団

得意科目で一番得意なのは現代国語。点数は300点以上。後の得意科目はBクラス並の成績。苦手科目の中で一番苦手なのは日本史。点数は50点代。化学の点数は80〜90。

召喚獣 武器は斧（工藤愛子の斧よりは少し小さい）

装備は黒い鎧。

腕輪持ちではない。

白石美夏子 （しろいしみかこ）

身長 161?

体重 後ろで怖いオーラが迫ってきているので不明

見た目 ショートヘアで色は黒 瞳の色は紫

胸はC〜D程度

趣味 特になし

特技 バスケット

得意科目 数学 英語

苦手科目 現代国語 日本史

詳細 桃子の友達でもあるBクラスの生徒。ちょっとクールなところもあるが明るい性格の持ち主。バスケットが得意で、バスケット部では二番目のエースとも言われている。瑠美と直貴、そして明久と瑞希の秘密を握っている。実は人間「ネタバレ禁止！！！！！！by美夏子」↑この事は試召戦争編が終わると分かりますよ♪by桃子

得意科目で一番得意なのは数学。点数は400点以上。他の得意科目は150点以上。苦手科目の中で一番苦手なのは現代国語。一番苦手ではあるが成績はCクラス並みである。他の苦手科目も同じ。はつきりいって根本より強い？という噂が流れている。

召喚獣 武器はナイフ。装備はシスターのような服。簡単にいうとティルズのア○ジュのような格好。

美夏子が使った技←

『ホーリーランス』：自分の上に7〜8本ぐらいの光のランス的なものをだし相手を攻撃する技。

『デルタレイエッジ』：徐々にスピードを上げて相手の近くまでいききりつける（ムツツリー二の加速とはちょっと違う）

『ブラッディローズ』：相手の目の前に黒いバラを出してバラをきりつける。きりつける度に黒いバラの近くにいた相手はダメージをくらう。

腕輪の色は朱色

発動キーワードは『紅の翼』くれないのつばさ

消費点数は200点

相手を包み込むように赤い羽根が無限に出現する。美夏子の掛け声によって相手を攻撃する。ちなみにこの赤い羽根、全て毒があるとかないとか……………。

発動するときは「天へとかける翼をあなたに……紅翼鷄蓮翔！！」
と美夏子という↑言わせてんのはあんたでしょうが！！by美夏子

オリキャラ紹介 part 4 (後書き)

次回からAクラス戦へと入っていきます。

Aクラス戦ではたくさんオリキャラが出てきます。
こんなに出て大丈夫かな………？

第十九話 Aクラス戦始まる！！！（前書き）

いよいよ今日で冬休みが終わりです！！！！
間に合ったーーーー！（・・・）

そしてAクラス戦が始まります！！

あ、でも今回はAクラス戦の作戦がいた的なものです。

第十九話 Aクラス戦始まる!!!

Side 瑠美

Bクラス戦が終わって点数補給のテストを終えた二日後の朝。いよいよAクラス戦を残すのみとなった私達は教室で最後の作戦の説明を受けていました。

雄二「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があったのことだ。感謝している」

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

直貴「いつもの雄二じゃないぞ……………」

豊「ちよつとひくな……………」

雄二「明久はともかく、直貴と豊は嫌みしかいえないのか!?!」

直貴「何のことだ?俺達は嫌みなんか言っていないぞ?なあ豊」

豊「ああ。直貴のいうとおりだぞ」

雄二「……………まあ、いいだろう。で、話の続きだ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

Fモブ『おおーっ!』

Fモブ『そっだーっ!』

Fモブ『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の勝負を前に、皆ヤル気満々だね

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ち、もしくは2VS2で決着をつけたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話だったので私は驚かなかったけど、クラスの皆はかなり驚いたようで、教室中にざわめきが広がった。

Fモブ『どういうことだ?』

Fモブ『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

Fモブ『2VS2ということは誰かとペアになって戦うのか?』

Fモブ『それで本当に勝てるのか?』

雄二「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

雄二「まず、一騎討ちでやるメンバーは俺、ムツツリー二、姫路、佑樹、初瀬川この五人だ。そして俺の相手はもちろん翔子。代表同士の一騎討ちということだ」

とりあえず、代表同士の一騎討ちは大切だから雄二は分かる。それに瑞希も、学年2位の實力を持つているから分かる。けど、他の三人は一騎討ちでも大丈夫なのかな？はつきり言って、雄二も心配。だって、代表同士の一騎討ちということは学年1位と戦うということ。

明久「馬鹿の雄二が勝てるわけなあつ！？」

あ、明久にカッターが飛んでいった。ちょうど頬をかすったけど危険だね。まあ、明久が悪いんだよね。でも友達を本気で殺そうなんて考えるワケが、

雄二「次は耳だ」

どうやら雄二にとっては明久は友達じゃないみたい。

直貴「でも、明久のいうとおりだぞ。相手は学年1位。まともにやりあえば勝ち目はないだろ。それなら瑠美を出したほうが手っ取り早いぞ」

瑠美「え〜？私一騎討ちとかめんどいんだよね〜」

直貴「お前な……………（呆）」

だって、一騎討ちでやると一発で倒しちゃうからつまないんだもん。

直貴「お前は一騎討ちじゃなくても一発で倒すけどな」

瑠美「ちよつと！？人の心の中読まないでくれる！？」

直貴「お前ならそう考えると思ったただけだ」

瑠美「くくくっ」

雄二「おいそのバカップル。話を進めていいか」

直貴「だれがカップルだと!？」

雄二「お前らだ。ちなみにお前は否定しているが片方を見てみる」

直貴「おい瑠美。お前も否定しろって、瑠美!？大丈夫か!？」

瑠美「直貴と恋人……………（プシュー）」↑顔真っ赤

ボタン!!↑倒れた

直貴「瑠美イイイイイ!？」

瑞希「瑠美ちゃん!？」

明久「瑠美!？」

雄二「……………これは俺のせいかな?」

↓数分後↓

瑠美「なんで私気絶したんだろうっね?」

雄二「おい西崎。黒いオーラを出しながら近づいてくるな」

瑠美「え？ナンノコトカナ？」

雄二「マジで怖いからやめてくれ！！謝るから！！」

瑠美「別に謝んなくていいよ」

雄二「？なぜだ？」

瑠美「だって……全然気にしないんだもん」

雄二「……なるほどな……」

直貴のバカ……。少しぐらい意識してくれたっていいのに……。

雄二「で、話を戻すぞ。確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。だが、あるフィールドで勝負をすれば俺は勝てる」

恵里菜「あるフィールド？何の教科でやるつもりなんですか？」

雄二「日本史だ」

直貴「日本史？別に霧島が日本史を不得手としているも、雄二が得意としているとも聞いたことがないぞ？なぜ、日本史なんだ？」

雄二「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生程度のレベルで満点ありだと、満点が前提となつて、ミスを

したほうが負けるといった注意力勝負になるね。同点だったら延長戦となり、問題のレベルも上げられるはず。集中力との戦いでもあるよ。何か策でもあるのかな？

豊「雄二。そろそろタネを明かしてもいいんじゃないか？」

豊の言葉にみんなが一齐にうなづく。

雄二「ああ、すまない。俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

桃子「ある問題？」

雄二「ああ。その問題は——『大化の改新』」

瑠美「大化の改新？だれが何をしたのか説明しろ、とか？」

雄二「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

秀吉「単純というと——何年に起きた、とかかのう？」

雄二「おつ。ビンゴだ秀吉。お前のいう通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

愛理「大化の改新が起きたのは645年。ふじこの改新と覚えれば簡単な問題よね」

雄二「この問題は明久は解けないだろう」

明久「失礼な！！僕だって分かるさ！！」

雄二「じゃあ、大化の改新を誰が何のために行ったのか答える」

明久「中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我氏を倒し、新しい政治のしくみをつくる改革を始めようとしたから」

瑠美・直貴・愛理以外「……………」

雄二「せ、正解だと……………！？明久！！次の問題の答えを言え！！」

明久「え？あ、うん」

雄二「794年に京都においた都をなんというか！！」

明久「平安京」

雄二「天皇が幼いときは摂政、成長すると関白という職について政治の実権を握った、藤原氏の政治の仕組みを何というか！！」

明久「摂関政治」

雄二「倭の大王が中国にたびたび使いを送った目的は！！」

明久「倭の王としての地位と朝鮮半島南部の軍事的指揮権を認めてもらうため」

雄二「……………な、なんでバカの明久が……………」

瑠美「雄二。一言いっとくけど、明久は日本史が得意なんだよ？」

直貴「しかも強いしな」

愛理「あと、明久は日本史の点数は400点をオーバーしてるよ？」

雄二「な、なんだと!？」

気づいていなかったんだ……………。

瑠美「ほら雄二。話を進めてよ」

雄二「ああ……………」

なんかめちゃくちゃテンション下がってない？

雄二「今は驚いたがこれで明久の日本史の実力は分かった。まあ、これはほつといて。話を進めよう」

あ、テンション戻った。

雄二「大化の改新を行った年号を答える問題が出れば俺は勝てる。なぜなら、アイツは必ず間違えるからだ」

うゝん。ちょっと不安だね。それにしても、さっきから『アイツ』とか『翔子』とか言ってるけど、雄二って翔子と仲いいのかな？

瑞希「あの…………坂本くん」

雄二「ん？なんだ姫路？」

瑞希「霧島さんとは仲がいいんですか？」

雄二「ああ。あいつとはおさ馴染みだ」

明久「総員狙えええつ！！！」

FFF団「オオーツ！！！！」

明久の一言でFFF団が一斉に雄二に襲いかかった。

雄二「な、なんだお前ら！？なぜ明久の一言で襲いかかってくるんだ！？」

明久「黙れ、男の敵！！Aクラスの前に貴様を倒す！！！」

雄二「俺が何をしたと！？」

明久「遺言はそれだけか？……待つんだ、須川くん。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に突っ込むものだ」

須川「了解です。吉井隊長」

こりないねあいつらも。

瑞希「あの………明久くん」

明久「ん？どうしたの姫路さん？」

瑞希「明久くんは霧島さんが好みなんですか？」

明久「そりゃ、まあ美人だし」

瑞希「……………」

明久の一言で瑞希は教室のすみに移動し体育座りをした。……………つて、ちょ！？会話の内容は聞いてないけど、なんで瑞希は暗いオーラを出しながら泣いてるの！？

明久「ひ、姫路さん！？どうして教室のすみで体育座りして暗いオ
ーラを出しながら泣いてるの！？」

原因こいつか……。あ、そういえば直貴は翔子の
ような美人が好きなのかな？……聞いてみよう。

瑠美「ねえ直貴」

直貴「ん？なんだ瑠美？」

溜美「直貴は翔子のような美人さんが好み？」

直貴「まあ、あいつは美人だから微妙に好みだな……って、瑠美！？なんで俺に攻撃の体勢してるんだ！？しかもその体勢、明らかに殺撃舞攻撃をくりだす体勢だよな！？」

瑠美「直貴なんか奈落の底に落ちればいいんだ――――！！！！！！」

直貴「おい！！！落ち着け！！！確かに霧島は美人だけど、俺は見た目だけでは決めないからな！？それに小さいころから好きな人は変わってねえぞ！？」

瑠美「……………え？直貴……………好きな人いるの……………？」

直貴「ああ……………まあ……………（／／／／／／／／）」

瑠美「（ガーン！）（――。㇏）」

直貴……………好きな人いるんだ……………。↑鈍感
よし。私も瑞希と一緒に体育座りしよう。

直貴「瑠美？って、おい！！瑠美！？なんでお前まで体育座りして
暗いオーラを出しながら泣いてるんだ！？」

……………告白の自信がなくなっちゃった。

豊「なんか暗いオーラを出しながら泣いてるのが二人いるぞ」

美波「ねえ豊？あんたは霧島さんのような人が好み？」

豊「いや。その前に俺、霧島とかいうやつ知らないからな？今年来たばかりなんだから」

美波「そういえばそうね（ホッ）」

豊「（ピン！）ちなみになんでそんなこと聞くんだった？（ニヤニヤ）」

美波「はあ！？あんたには関係ないわよ！！（／／／／／）」

豊「ちえっ」

FFF団1「須川会長!!!!あそこに異端者が!!」

須川「殺せ!!!!八つ裂きにしてしまえええっ!!!!!!」

FFF団「オオーツ!!!!!!」

豊「なんで!?!」

今度は豊のほうにFFF団が襲いかかった。ていうか、もうあの二人付き合えばいいのに。豊が鈍感なのかな?

恵里菜「あ、あの秀吉くん!!」

秀吉「なんじゃ?恵里菜」

恵里菜「ひ、秀吉くんは……………(秀吉)「ワシはあまり興味ないのじゃ」え!?!」

秀吉「言葉通りの意味じゃよ」

恵里菜「私が言いたかったこと分かっていたんですね……………(よかつた)」

なんか、あちこちでピンク色の空間が……………。

愛理「はいはい。みんな落ち着きなさい(パンパン)」

この騒ぎを落ち着かせたのは愛理。手をたたきながら、全員に声をかけた。しかしFFF団だけはいまだに豊と戦闘中。と、その時

佑樹「連牙拳！！！」

豊&FFF団『がはっ！？』

佑樹「いい加減にしてください！！今はAクラス戦のための作戦会議でしょ！？」

桃子「勝ちたいならちゃんと話し合いに参加して！！余計なことはしない！！」

佑樹と桃子が割り込み説教を始めた。

ていうか今思い出したんだけど、翔子ってなんか女子にしか興味がないとかいう噂が流れてるんだよね。本当にそうなのかな？

（数分後）

雄二「では作戦の説明の続きをする。一人で戦うやつらは自分が得意する科目で勝負しろ。姫路は問題ないと思うが、後のメンバーは大変だからな」

康太「……………ということは俺は保健体育……………」

佑樹「僕は化学だね……………」

桃子「私は……………英語かな？」

雄二「なぜか最低クラスなのにAクラス並みの成績をもつやつらが多いからな。あっという間に勝ちそうだな」

瑠美「でも油断大敵だよ。一騎討ちとかでやるならAクラスのトップにたつ人物が出てくるはずだからね」

雄二「まあな。ま、その方がお前にとっては退屈しないだろ？」

瑠美「うん。その方が退屈しないよ。あまりにも弱いとつまらないからね」

過去に何回、ズルいと言われたことやら……………。

雄二「では次は2VS2で戦うメンバーを発表する。まずは、秀吉と荒ペア。この二人には現代国語で勝負をしてみようと思っている」

秀吉「現代国語なら、わしらは400点をオーバーしているから平気なのじゃが……………」

恵里菜「そう簡単に科目の設定をとれるかな？」

雄二「安心しろ。ちゃんと策はあるからな。次は南谷と明久ペア。お前らは日本史だ」

愛理「ま、明久も日本史なら得意だから平気よね」

明久「僕も日本史なら別に大丈夫だよ」

雄二「次は豊と島田ペア。お前らは数学だ」
豊「楽勝だな。数学でなら普通に勝てるぜ」

美波「ウチも数学なら安心ね」

雄二「最後は直貴と西崎ペア。お前らは……………すきにしろ」

直貴「なぜ？」

雄二「学園1位と2位にこの科目で勝負しろって言えるわけないだろー！」

瑠美「じゃあ。私達は後で考えようか」

できれば、総合科目あたりがいいんだけどな。まあ、数学でもいいんだけど。物理は絶対やだ。

雄二「以上がAクラス戦で戦うメンバーだ。このメンバーなら必ず勝てる。それに、あの作戦が上手くいけば俺も翔子に勝てるはずだからな。実は小さな頃に俺が間違えの答えを教えていたんだ」

つまり雄二は大化の改新を行った年号の答えを、翔子に645年と教えていないという意味だね。よく625年と間違える人がいるから、多分翔子はそっちの方を記憶しているのだろう。

雄二「あいつは一度覚えたことは忘れない。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は――」

F生徒『システムデスクだ!!!!!!!!!!』

Side 明久

優子「一騎討ちとダブルス？」

雄二「ああ。FクラスはAクラスに試召戦争として一騎討ちとダブルスで申し込む」

現在交渉のため、僕、雄二、直貴、豊、ムッツリーニ、秀吉、女子メンバーという主力メンバーでAクラスに来ている。

優子「うーん、何が狙いの？」

交渉のために話を聞いてくれるのは秀吉の双子の姉の木下優子さん。秀吉を女の子にしたそのままの姿で、とても可愛い。でも、この子を認めると秀吉にもきがあるということに……。！落ち着け僕！！僕にはちゃんと好きな人がいるではないか！！それに秀吉にも荒さんがいるではないか！！

雄二「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。それと代表同士だけではないぞ。ここにいるFクラス主力メンバーも勝負する」

優子「つまり何人かは一騎討ち何人かはダブルスで勝負するのね」

雄二「ああ。ちなみに人数は決めてある。五人が一騎討ちで勝負し、残り八人はダブルスで勝負する」

優子「合計十三人かあ……。まあ人数もいるし……。面倒な試召戦争を早く終わらせるのにいいかも……。いいよ。その提案受けるよ」

さすがに時間がかかると思っていたのにすんなりと受けてくれた。雄二もこれにはびっくり。せっかく、BクラスとCクラス、Dクラスを使って攻めこまさせると脅迫しようとしたのに……。

優子「ただしこちらからも提案。科目ぐらいいはこちらにも選ばせて一騎打ちでは三回、ダブルスでは二回の科目の選択権はもらうよ」

まあ、科目の選択権ぐらいいは別に平気だね。でも、自分の苦手科目を選ばれたら困るけど。

雄二「なるほど。西崎と直貴、姫路が出てきたときのための作戦か？」

優子「まあね。うちの代表が負けるとは限らないけど、もしその三人が絶対調だったら負ける可能性が高いからね。（まあ、西崎さんと渡辺くんには誰も勝てないと思うんだけど……………）」

雄二「安心してくれ。代表同士の一騎打ちは必ずやるからな」

優子「そんなこと言われたって、信じられるわけないでしょ？」

「……………まあまあ、優子。その辺にしときな」

「……………」AクラスとFクラスの試召戦争は一騎打ちとダブルスで。科目の選択権は五回だけこちらが選ぶ。私はいいと思うよこの条件」

木下さんの後ろから来たのは女子生徒二人。一人は茶色の髪でみつあみに朱色の瞳。もう一人は黒のベリーショートで焦げ茶色の瞳。

優子「亜梨沙……………結美……………」

亜梨沙「翔子も別にいいわよね？」

続いて出てきたのは日本人形のような美しい容姿。Aクラス代表の

霧島翔子さんだ。

翔子「私も別に構わない……………」

結美「ほら優子。代表も言ってるんだから」

翔子「だけど……………私にはもうひとつ提案がある……………」

そして霧島さんは姫路さんをちらりと一目見てこう言った。

翔子「負けたほうは勝ったほうのことを聞く……………」

雄二「ほう……………面白いじゃないか。いいぜ。受けてやるよ」

明久「ちよっ！！雄二！！姫路さんの了承が！！！！」

雄二「安心しろ。姫路には迷惑をかけない。それじゃあいくぞ。開戦は午後だ」

佑樹「あ。すみません。ちょっとさきにいつててください」

桃子「私達二人はちよつと遅れていきます」

雄二「そうか、分かった」

ということ、佑樹と初瀬川さん以外のメンバーはFクラスへと戻っていった。

なんで、佑樹と初瀬川さんは残るんだろう？

S i d e o u t

???「佑樹……桃子……地下室に来て……」

佑樹「ああ………」

桃子「ええ………」

「場所が変わって謎の地下室」

美夏子「あら……。亜梨沙……佑樹……桃子………」

亜梨沙「先客がいたのね………」

美夏子「大丈夫よ。今から出ていくから。それじゃあ」

亜梨沙「………出ていったわね。で、あんたたちAクラス戦どうするつもりなの？」

佑樹「俺と桃子はどちらも一騎討ちで勝負する」

桃子「亜梨沙はどうするの？」

亜梨沙「私はダブルスで勝負するわ……。直貴と瑠美とね………」

佑樹「勝つ自信があるのか？」

亜梨沙「まさか……。あるわけないわ……。ただ、あの二人の力をみてみたいだけ………」

桃子「ふうん」

亜梨沙「まあ、記憶もだんだんよみがえってきてるし……、私と勝負するとまた何か思い出すはずだからね……」

佑樹「さて、用が終わったならさっさと戻るぞ」

桃子「じゃあね亜梨沙……いや………アクア………」

亜梨沙「ええ………ロック………ミスト………」

第十九話 Aクラス戦始まる!!! (後書き)

次回からAクラス戦が本格的に始まります!!
オリキャラも出ますよ~!

最後にでたキャラの名前は.....まだ秘密です.....。

第二十話 Aクラス戦 その1（前書き）

Aクラス戦です!!

桃子と秀吉と恵里菜がAクラスの生徒と戦います！

今回、恵里菜がめちゃくちゃ暴走します（笑）

あとユーザー名が変わりました。水夢^{スイム}というユーザー名です。

第二十話 Aクラス戦 その1

Side 瑠美

高橋「では、両名共準備は良いですか？」

雄二「ああ」

翔子「……問題ない」

午後になって、いよいよAクラス戦が始まった。会場はAクラス。こっちのほうがいよいよ、腐った畳のFクラスじゃ締まらないからね。立会人は高橋先生。Aクラスの担任でもあり学年主任でもある、とてもきれいな先生だ。

高橋「順番は、一騎打ち、ダブルスと交互に行いたいと思います。では、一騎打ちを始めます。一人目の方、どうぞ」

雄二「よし。桃子。頼んだぞ」

桃子「任せてください」

こちらの一人目は桃子。さて、むこうは……？

???「私がいくわ」

出てきたのは黒のショートヘアで前髪をピンドメでとめている女子。

奈々美「Aクラスの遠藤奈々美よ。よろしく」

高橋「科目はどうしますか？」

奈々美「私が選んでもいいかしら？」

桃子「うーん……………」

奈々美「ちなみに選ぶのは英——（桃子）」「どうぞお選びください！」「アハハハ……………」（苦笑）「じゃあ、科目は英語をお願いします」

高橋「分かりました」

高橋先生が言うと言語のフィールドがはられた。ていうか桃子……。緊張感無さすぎ……………。

奈々美「それじゃあいくわよー！」

桃子「全力でいきますよー！」

奈々美・桃子

「「^{サモン}試獣召喚！……！」

英語のフィールドに現れた二人の召喚獣。桃子はいつものように画家のような召喚獣。相手は魔術師のような召喚獣だ。って、よくみると二人とも腕輪をつけてる。

あれ？作者。桃子は腕輪持ちではないんじゃない？……………。↑気にするなby作者

……………まあいーや。さてさて、点数は？

『Aクラス 遠藤奈々美^{えんどうななみ}』

英語 412点

Fクラス 初瀬川桃子

英語 413点 』

一点差か……。一回戦からいい勝負が見れそう♪てか……、桃子強くなりすぎだろ!!!作者!!!!↑気にするな!!!!by作者

Aモブ『え、Fクラスなのに400点こえたと!?!』

A生徒『どうしてこんな点数がとれるのよ!?!』

桃子の点数を見てAクラスの生徒がめちゃくちや驚いている。

雄二「まさか400点こえしてるとはな……………」

恵里菜「すごいです!!桃子ちゃん!!」

これには雄二もビックリしたらしい。相手の腕輪の効果も気になるけど、桃子の腕輪はどんな効果なんだろう?

奈々美「へへ。Fクラスなのにやるわね。楽しくなりそう♪」

桃子「それでは先手はもらいます!!!」

桃子の召喚獣がスケッチブックに何かをかいていく。そして、

桃子「ウインドカッター!!!」

絵が実体化して、カービィのコピー能力でおなじみのカッターが飛んでいく。

奈々美「面白い攻撃方法ね！！でもこちらにも負けないわよ！！」

相手の召喚獣は詠唱の体勢に入る。詠唱が終わると、吹雪が吹き荒れた。

奈々美「いくわよ！！ブリザード！！」

吹雪はカッターを凍らせ桃子の召喚獣まで凍らせようとする。

桃子「シャボンバリア！！」

しかし桃子はシャボン玉を出して自身を包み、防御をした。便利な技だね。

桃子「出でよ！！ウィンドソード！！！！」

次に桃子は風の力がたまっている剣を出した。

奈々美「（何をするつもり……………？）」

桃子「（別にここで力を使っても大丈夫だよね♪）風魔法！キレンジャック！！」

すると桃子の腕輪と剣が同時に光だし、大量の黄色い鳥が奈々美の召喚獣に攻撃した。

奈々美「くっ……………！！」

『Aクラス 遠藤奈々美

英語 394点

』

一気に点数を消費させた……！！あの腕輪はいつたいなに！？

亜梨沙「（……………なんで自身の力を使ってるのよ……………。召喚獣の技じゃないじゃない……………（呆））」

佑樹「（ズルいな桃子。俺も使おうかな……………）」

桃子「（なんか、亜梨沙からものすごい気迫が……………）風魔法！アトリー！！」

またまた剣と腕輪が光だし、今度は2個の風の玉が奈々美の召喚獣を攻撃した。

奈々美「くっ……………！！反撃ができない……………！！」

『394点↓364点』

あの腕輪……………？ちょっとおかしくない……………？普通なら点数も消費するはずなのに桃子の点数が全然減ってない。ていうか変わってない。腕輪の効果もよく分かんないし……………。なんだろう……………あれ……………。

桃子「（そろそろ点数を消費させなくちゃ怪しまれるかな？）じゃあ、やりますか……！！」

すると、今度は腕輪だけが光だす。何をするき？

桃子「もうひとつの腕輪の力を発揮します！！腕輪発動！！キーワードは『風の星コットン！！』」

凄い名前の腕輪だね……。って、あれ？なんか桃子の腕輪の名前……。どっかで聞いたことがあるような……。

瑞希「どうしたんですか？溜美ちゃん」

溜美「えっ？あ、いや。なんか桃子の腕輪の名前……。どっかで聞いたことがあるって思ってた……」

瑞希「……。実は私もどっかで聞いたことがあるような気がするんです……」

溜美「え？そうなの？」

瑞希「はい……。でも……詳しくは……」

うーん。なんとなく懐かしい感じがしてくるんだよね。まあ、いつか。

ちなみに今の状況。

桃子が腕輪発動↓なんか桃子の召喚獣がうさぎになった。てかあれうさぎ？うさぎなの？だって、耳が両方垂れていて、なんか頭の真ん中の毛縛ってるし。服着てるし。↓んで、召喚獣の上になんか凄いもの登場。惑星？というよりはなんか竜巻をイメージしたような惑星？↓その惑星？から光がでてうさぎに直撃↓そしたら桃子が『風魔法！プテラノドン！』とか言ったら、うさぎがプテラノドンになった。

どこからつつこめばいいんだ!?

直貴「なんかすげえな……」

明久「めちゃくちゃすぎるね……あの腕輪」

豊「↑開いた口が塞がらない

佑樹「（あれって風魔法の上級技じゃん。召喚獣がよく使えるよな）」

奈々美「な、なにこれ!? こんなの普通、誰にもできないわよ!？」

桃子「（当たり前じゃん。普通の人間がこんなことなんかできるわけないよ）さあ、これで終わりだよ! いつけー! ー! ー!」

プテラノドンは奈々美の召喚獣をめがけて突進していった。そして、

ドガーーン!!!!!!!!

衝突したとは思えない効果音。相手のほうの召喚獣は煙に包まれてどうなっているかは分からない。誰もが終わったと思っただろう。しかし、

奈々美「力の違いを見せてあげるわ! インディグネイトジャッジメント!」

桃子の召喚獣の下に魔方陣が現れ、強力な光が魔方陣から一気に溢れだし、桃子の召喚獣は戦死となった。

『Aクラス 遠藤奈々美
英語 1点

V S

Fクラス 初瀬川桃子
英語 0点

高橋「勝者。Aクラス、遠藤奈々美」

高橋先生がそう告げるとAクラスからはすごい歓声が。それにしても、どうやってあの桃子の攻撃から逃れられたんだろう？

桃子「腕輪を使っただけですね」

奈々美「ええ。私の腕輪は『光のプリズム』。点数を一点にすることで、相手の攻撃を全て防ぎ反撃ができるのよ。ちなみにあなたの腕輪は？どうやら二つ持っているようだけど……」

桃子「はい、その通りです。私は腕輪を二つ持っているんです。でも二つともあなた達のような人間には使えない特別な腕輪なんです」

奈々美「人間って……あなたも人間じゃない」

桃子「（クスッ）」

少し笑みを浮かべ、奈々美に桃子は近づいた。

桃子「（確かに私は人間……でも、人のことは見た目で判断できないんですよ？）」

奈々美「（！？あ、あなた……………いたい……………」

桃子「（私以外にもいますよ？見た目だけでは人間とは限らない人達がね……………」

奈々美「（そんなことを私に言っても大丈夫なの？）」

桃子「（ちゃんと許可はとってあります。それに選ばれた人達はあなただけではないですからね……………。このことは、他の人にはバラしてはダメですよ？）」

奈々美「（え、ええ……………」

二人で小声で何かを喋っていたけどなんなんだろう？
そして桃子は戻ってきた。

桃子「ごめんなさい。負けてしまいました」

雄二「気にするな。他にもメンバーはいるからな」

明久「それにしても初瀬川さん。腕輪持ちだったんだね」

桃子「つい最近、手に入ったばかりだよ」

美波「え？そうなの？」

桃子「まあ、今はそんなそんなに教えないけどね。ていうか、まだ教えられないからね。あの腕輪の効果はまだ秘密ということだ」

そして桃子は佑樹の隣に立つ。

佑樹「（お前。なに風の力使ってんだよ）」

桃子「（いいじゃん。あんたも土の力使えば?）」

佑樹「（バカいうなよ。俺は格闘家の召喚獣だぞ?土魔法なんか使えねえって）」

桃子「（土の力を利用する腕輪、あんたももってんでしょ?使えばいいじゃん）」

佑樹「（……………気が向いたらな……………）」

高橋「では、次はダブルスです。各クラス二人ずつ出てきてください」

雄二「ダブルスの最初のペアは秀吉と荒ペアだ。よろしく頼むぞ」

秀吉「任せるのじゃ」

恵里菜「勝ってきますね♪」

優子「結美、行くわよ」

結美「ええ」

Fクラスからは、秀吉と荒さんという現代国語最強ペア。Aクラスからは秀吉の双子の姉木下優子さん、そして昨日一回だけ僕らに姿を見せた、結美さんだ。

高橋「科目はどうしますか？」

優子「選択権はそちらにあげるわ」

結美「いいの？優子」

優子「ええ。Fクラスなんかに負けるはずないじゃない」

秀吉「むっ……」

恵里菜「（カチン）」↑何かが頭の中で切れた

結美「まあ……それもそうか。（ヤバイヤバイ。めちやくちゃ、女の子の方が怒ってるゝ！！（。㇏；≡；㇏）（」
なんか……恵里菜の背後に魔王が見えるの気のせい？

恵里菜「じゃあ、お言葉に甘えて科目の選択権はこちらがもらいますねゝ（調子のとてんじゃねえぞゴラアッ！！）（黒笑）」

秀吉「（いま、恵里菜の心の声が聞こえてきたのは気のせいかなのう？）（」

めちやくちゃ恵里菜、怒ってない？

恵里菜「科目は現代国語でお願いしますゝ」

高橋「分かりました」

高橋先生はさつきと同じようにパソコンを操作して現代国語のフィールドをはった。

高橋「では、始めてください」

四人「^{サモン}「試獣召喚！！！！」」「」」

現代国語のフィールドに現れる四人の召喚獣。優子の召喚獣はランスに西洋風の鎧。結美の召喚獣は武器は弓矢。装備はティルズのエーターの服の色をピンクにし、ズボンではなくスカートという感じの装備。

秀吉と恵里菜はいつも通りだけど、二人とも腕輪をつけている。

「Aクラス 木下優子

&

香坂結美（こうさかゆいみ）

現代国語 375点&388点

V

S

Fクラス 木下秀吉

&

荒恵里菜

現代国語 421点&455点

A生徒「また、400点オーバー！？」

A生徒「なんでこんな点数を！？」

Fクラスは、二人とも400点オーバー。それなのにAクラスは350点以上止まりで、400点には達していない。

優子「ひ、秀吉……。あんたいつのまにこんな点数を……………！」

秀吉「直貴達に教えてもらったりしておるからのう。わしだってちゃんと勉強しておるのじゃ」

結美「（この組み合わせだと、絶対私この女の子と勝負だよね？めちゃくちゃ、怖いんですけどー！！）」

恵里菜「アハハハ…………… コロス…………… コロス…………… コロス！！！（黒笑）」

なんか一名暴走してるんだけど！？

結美「優子！！私が秀吉さんと勝負するから、あんたはこの子の相手をしてよ……………」

優子「ぜ、絶対嫌よ……………その子の背後に魔王が見えてるし……………」

結美「原因はあんたでしょ！？あんたが怒らせたから悪いんじゃない……………このままだと私も召喚獣とともに、戦死するわよ……………」

優子「点数は結美の方が高いんだから我慢してよ……………」

ギャーギャー騒ぐAクラスの二人。ていうか、あんなに焦っている優子は始めて見たな。

恵里菜「さあ、秀吉くん。あの二人を……………コロシニイキマシヨウカ」（黒笑）」

秀吉「（笑顏がめちやくちゃ怖いのじゃ！！！！）（（（（（； Д
。 ）（ ）」

直貴「秀吉……………ドンマイ！」

明久_「(_|_|_|)_」b

愛里「（恵里菜を敵にまわしたらおしまいね……）」

恵里菜「さあ、イキマスヨ……！ディープリミスト……！」

するとフィールド全体に霧がかかる。

優子「くっ…………。これだから400点オーバーしてる人と戦うのは嫌なのよ」

結美「どこからくる……？」

恵里菜「私の攻撃は終わってませんよ？フラッシュティア……！」

次に恵里菜は光の衝撃波的なものをだす攻撃をする。

優子「あぶないわね……」

秀吉「魔神劍・双牙！！！」

優子「なっ！！くっ……！！」

今度は秀吉の攻撃。見事に優子は喰らってしまった。

『木下優子 375↓314点』

しかも直撃だったので、点数の消費が半端ない。

恵里菜「ホーリーランス!!!!」

結美「キャアッ!!!!」

向こうでは恵里菜の攻撃を避けきれなかった結美の点数が消費されていた。

『香坂結美 388↓321点』

優子「くっ……!!せめて秀吉だけでも!!!!」

そう言っつて優子は秀吉に攻撃する。秀吉はすかさずガードをする。

優子「はあああああ!!!!」

秀吉「……………っ!!」

ガードをしていても、点数は消費していく。秀吉の点数が優子の攻撃によって削られていく。

優子「とどめっ!!」

優子は秀吉の召喚獣の首を狙う。

恵里菜「命を盾とし、かのを打ち砕け!!!!セイクリッドシャイン!!!!」

しかし恵里菜の攻撃で失敗してしまう。

結美「今だ！！！」

秀吉「させん！！風雷斬！！」

結美が恵里菜の召喚獣に攻撃を仕掛けようとするが、秀吉に邪魔をされる。けっこう長いな……。なんて思っていると。

恵里菜「もう終わらせます……………！使う気はなかったけど……………！！！」

そんなことを言うと恵里菜の腕輪が光だす。

恵里菜「腕輪発動！！キーワードは『フェニックス不死鳥』！！」

するとフィールドのちょうど真ん中に炎に包まれている黄金の鳥が現れた。

結美「な、なにっ？あれっ」

恵里菜「もう、終わりにしましょう……………。いきますよフェニックス！！！！必殺！！フェニックスバーニング！！！」

すると、恵里菜が呼んだ不死鳥が二人にめがけて火を吹いた。火を吹くのを終わると、不死鳥は天へと戻っていった。そして煙の中から現れた、優子と結美の召喚獣はどうなったかというと、

& 香坂結美

現代国語 0点&0点

V S

Fクラス 木下秀吉 & 荒恵里菜
現代国語 311点&1点[㊦]

見事に戦死していた。恵里菜は腕輪の効果で一点になっていたが……。
……。ていうか秀吉つよっ！！！！

高橋「勝者。Fクラス、木下秀吉・荒恵里菜ペア」

この言葉でFクラスからものすごい歓声が。

Fモブ「さすが荒さん！！」[㊦]

Fモブ「秀吉！！結婚してくれーーーー！！！！」[㊦]

Fモブ「荒さん！！俺の嫁に！！！！」[㊦]

いや、歓声じゃなくて告白？

優子「そんな……。負けたなんて……」

結美「しょうがないわよ。二人とも400点をオーバーしていたんだから」

恵里菜「あ、あの……」

優子「あら？確か……………荒恵里菜さんだったかしら？」

恵里菜「あ、は、はい…。先程はお見苦しいところを見せて申し訳ありませんでした……………」

優子「気にしないで。私も悪かったから」

恵里菜「で、でも……………」

結美「大丈夫大丈夫！！優子もこう言ってるんだし！！気にしないでっっ」

恵里菜「は、はあ……………」

秀吉「恵里菜。ワシは先に戻っているぞ」

恵里菜「あ！！待ってください秀吉くん！！それじゃあ」

優子「ねえ荒さん」

恵里菜「はい？」

優子「これからも弟のことをよろしく頼むわね。応援してるわっ」

恵里菜「は、はいっ！！（／／／／／）」

ダブルスはFクラスの勝利！！

まだまだこれから油断大敵だね！！

さあ、次回はどうなるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5875x/>

バカとテストと召喚獣 ～バカと未来と過去とFクラス～

2012年1月14日21時53分発行